

石川流域遺跡群発掘調査報告XXXI

藤井寺市文化財報告第27集

2007. 3

藤井寺市教育委員会

石川流域遺跡群発掘調査報告XXXI

藤井寺市文化財報告第27集

2007. 3

藤井寺市教育委員会



くびれ部葺石・形象埴輪出土状況（北より）



形象土製品出土状況（北より）



くびれ部出土形象埴輪



くびれ部出土埴形土製品

はしがき

近年、各地で行われているさまざまな発掘調査のニュースが新聞紙上を賑わすことが多くなっています。調査の成果から明らかになる新たな歴史的事実を目撃したりにして、太古へのロマンをかきたてられるのは私だけではないでしょう。

私たちの街、藤井寺市でも、日々発掘調査が行われており、これまでにもさまざまな歴史的事実が明らかになってきています。今回ここに刊行いたします報告書にも、それらの一部が掲載されています。本書をおして、皆様に、藤井寺市にある貴重な文化遺産に触れていただくことができれば幸いです。

発掘調査を実施するにあたり、文化財保護行政に対しご理解とご協力をいただきたい開発事業者や市民の皆様方、指導助言いただいた文化庁、大阪府教育委員会をはじめとする関係各位、また、考古学とその関連諸科学の研究者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、なお一層のご支援をお願いいたしますとごあいさつといたします。

平成19年3月

藤井寺市教育委員会

教育長 平野 義明

例　　言

- 1 本書は、2006年度国庫補助事業「市内遺跡発掘調査等事業」の報告書である。
- 2 調査は、藤井寺市教育委員会事務局管理部文化財保護課が実施し、2006年4月3日に開始し、2007年3月31日に終了した。但し、本書には、整理作業等の都合から、2006年9月30日までに調査の終了したものについて登載した。
- 3 本文の執筆は、上田睦、川村和子、新開義夫が分担して行った。文責は文末に記載した。編集は各担当者及び整理作業参加者が行った。
- 4 調査及び本書作成の参加者は次のとおりである。(五十音順)
天野未喜、綾田隆、今莊ひとみ、井本齋、魚田一人、大塚文子、尾崎理枝、木木泰、久保繁、条勇、佐々木理、塩野清一、下地陽子、谷口宗市、寺崎理恵、中村美起、野口尚久、野村工、深尾まき子、山口俊夫、山田幸弘、吉岡美和
- 5 図面のトレースは川村、新開、野口、深尾が行った。
- 6 遺構写真の撮影は各担当者が行ったが、遺物写真の撮影については、有限会社 阿南写真工房 阿南辰秀氏、伊藤慎司氏にお願いした。
- 7 奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田尚氏には、玉稿をいただき、これを掲載することができた。記してお礼申し上げます。
- 8 本書の作成にあたり、学生社、宮内庁書陵部、高槻市教育委員会、一瀬和夫氏、徳田誠志氏、宮崎康雄氏から御指導、御協力がありました。記して感謝申し上げます。(五十音順)
- 9 図面の方位は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高はT.P.を用いた。なお、調査区位置図及びトレンド位置図については、方位を明示していないものは上を座標北とした。
- 10 各遺跡の略号は次のとおりである。
葛井寺遺跡：FJ　　はざみ山遺跡：HM　　土師の里遺跡：HJ
- 11 実施した調査の資料は文化財保護課で保管している。多数の方々の活用を望むものである。

目 次

第1章 調査の概要	1
第2章 葛井寺遺跡の調査	7
1. FJ04 - 11・05 - 1区	8
2. FJ05 - 2区	13
第3章 はざみ山遺跡の調査	16
1. HM06 - 2区	17
2. HM06 - 11区	18
第4章 土師の里遺跡の調査	20
1. HJ97 - 10区 (狼塚古墳)	21
2. HJ06 - 3区	81

挿 図 目 次

図 1 葛井寺遺跡調査区位置図	7
図 2 FJ04 - 11・05 - 1区 トレンチ位置図	8
図 3 FJ04 - 11区 遺構平面図	8
図 4 FJ04 - 11区 トレンチ及び各遺構断面図	9
図 5 FJ05 - 1区 遺構平面図	10
図 6 FJ05 - 1区 トレンチ及び各遺構断面図	11
図 7 FJ04 - 11区 SK03 出土土器実測図	12
図 8 FJ05 - 2区 トレンチ位置図	13
図 9 FJ05 - 2区 トレンチ及び各遺構断面図	13
図 10 FJ05 - 2区 遺構半面図	14
図 11 FJ05 - 2区 各遺構出土土器実測図	15
図 12 はざみ山遺跡調査区位置図	16
図 13 HM06 - 2区 トレンチ位置図	17
図 14 HM06 - 2区 遺構平面図	17
図 15 HM06 - 11区 トレンチ位置図	18
図 16 HM06 - 11区 SK01 出土須恵器実測図	18
図 17 HM06 - 11区 トレンチ及び各遺構断面図	19
図 18 HM06 - 11区 遺構平面図	19
図 19 土師の里遺跡調査区位置図	20
図 20 HJ97 - 10区 トレンチ位置図	21
図 21 HJ97 - 10区 平面・断面・コンター図	23
図 22 HJ97 - 10区 土層断面図	25
図 23 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 A・B・C 平面・断面図	26
図 24 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 D・E 平面・断面図	27
図 25 HJ97 - 10区 くびれ部形象埴輪・葺石平面図	29
図 26 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 A 円筒埴輪実測図 (1)	31
図 27 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 A 円筒埴輪実測図 (2)	32
図 28 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 B 円筒埴輪実測図	33
図 29 HJ97 - 10区 造出し埴輪列 C・D・E 円筒埴輪実測図	34
図 30 HJ97 - 10区 造出し・他出土円筒埴輪実測図	36

図 31	HJ97-10区	造出し、他出土円筒・朝顔形埴輪実測図	37
図 32	HJ97-10区	造出し出土形象埴輪実測図	38
図 33	HJ97-10区	造出し出土鳥形埴輪実測図(1)	39
図 34	HJ97-10区	造出し出土鳥形埴輪実測図(2)	40
図 35	HJ97-10区	楕円埴輪各部名称	41
図 36	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図A(1)	42
図 37	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図A(2)	43
図 38	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図B(1)	44
図 39	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図B(2)	45
図 40	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図C(1)	46
図 41	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図C(2)	47
図 42	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図D(1)	48
図 43	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図D(2)	49
図 44	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図E(1)	50
図 45	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図E(2)	51
図 46	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図F(1)	52
図 47	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図F(2)	53
図 48	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図G(1)	54
図 49	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図G(2)	55
図 50	IU97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図H(1)	56
図 51	HJ97-10区	くびれ部出土楕形埴輪実測図H(2)	57
図 52	HJ97-10区	くびれ部出土楕形土製品実測図	58
図 53	HJ97-10区	くびれ部周辺出土形象埴輪実測図(1)	59
図 54	HJ97-10区	くびれ部周辺出土形象埴輪実測図(2)	60
図 55	HJ97-10区	水鳥形埴輪復元図	61
図 56	HJ97-10区	野中古山古墳出土埴形土製品実測図	62
図 57	HJ97-10区	狼塚古墳埴丘復元図	69
図 58	HJ97-10区	応神陵古墳陵墓図	69
図 59	HJ97-10区	応神陵古墳・周辺古墳埴丘復元図	70
図 60	HJ97-10区	導水施設形埴輪の位置と入口	74
図 61	HJ06-3区	トレンチ位置図	81
図 62	HJ06-3区	各トレンチ断面図	82
図 63	HJ06-3区	5トレンチ SX01 遺物出土状況半面図	82
図 64	HJ06-3区	各トレンチ出土土器類、黒色土器実測図	83
図 65	HJ06-3区	5トレンチ SX01 出土円筒埴輪実測図	84
図 66	HJ06-3区	5トレンチ SX01 出土円筒埴輪、形象埴輪、2トレンチ出土円筒埴輪実測図	85

表 目 次

表 1	93条第1項届出及び94条第1項通知件数月別集計表	1
表 2	表1に係る指導事項月別集計表	1
表 3	試掘調査一覧表	1
表 4	遺跡別届出及び通知件数に対する発掘・立会の指導事項集計表	2
表 5	発掘調査一覧表	3
表 6	楕形埴輪法量・諸特徴表	62
表 7	楕形埴輪形態分類表	66
表 8	導水施設形埴輪と造出し樹立形象埴輪	75
表 9	狼塚古墳の埴輪の表面にみられる砂礫	80

卷頭図版目次

- 卷頭図版一 狼塚古墳 くびれ部蓋石・形象埴輪出土状況（北より）
 埴形土製品出土状況（北より）
- 卷頭図版二 狼塚古墳 くびれ部出土形象埴輪
 くびれ部出土埴形土製品

図版目次

- 図版一 葛井寺遺跡 FJ04-11区 トレンチ全景（北より）
 同上（南より）
 SK03 遺物出土状況（東より）
- 図版二 葛井寺遺跡 FJ04-11区 SK03 出土土器
- 図版三 葛井寺遺跡 FJ05-1区 トレンチ全景（南より）
 同上（北より）
- 図版四 葛井寺遺跡 FJ05-2区 トレンチ全景（南より）
 同上（北より）
- 図版五 葛井寺遺跡 FJ05-2区 SX03（西より）
 SX01 遺物出土状況（西より）
 SX07 遺物出土状況1（北より）
 SX07 遺物出土状況2（南より）
 P1 墓土の状況（西より）
- 図版六 葛井寺遺跡 FJ05-2区 出土土師器
- 図版七 はざみ山遺跡 HM06-2区 トレンチ全景（北より）
 同上（南より）
 同上（西より）
- 図版八 はざみ山遺跡 HM06-11区 トレンチ全景（南より）
 同上（北より）
 SK01 出土須恵器
- 図版九 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し全景（西より）
 造出し円筒埴輪列出土状況（北より）
- 図版一〇 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し埴輪・蓋石転落状況（北より）
 （西より）
 調査区北側蓋石転落状況（南より）
- 図版一一 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部形象埴輪出土状況（北より）
 （西より）
- 図版一二 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部形象埴輪出土状況（南東より）
 （南より）
- 図版一二 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し円筒埴輪列A 出土地輪
- 図版一四 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し円筒埴輪列A・B 出土地輪
- 図版一五 上師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し円筒埴輪列B・C・D 出土地輪
- 図版一六 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し円筒埴輪列E、他出土埴輪
- 図版一七 上師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し、他出土円筒・朝顔形埴輪
- 図版一八 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し出土形象埴輪（1）
- 図版一九 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し出土形象埴輪（2）
- 図版二〇 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 造出し、くびれ部周辺出土形象埴輪
- 図版二一 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪A
- 図版二二 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪B
- 図版二三 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪C
- 図版二四 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪D
- 図版二五 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪E
- 図版二六 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪F
- 図版二七 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪G

- 図版二八 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形埴輪H
- 図版二九 上師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部出土橢形土製品
野中宮山古墳出土橢形土製品
- 図版三〇 上師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部周辺出土形象埴輪(1)
- 図版三一 土師の里遺跡 狼塚古墳 HJ97-10区 くびれ部周辺出土形象埴輪(2)
同上
- 図版三二 土師の里遺跡 HJ06-3区 1トレンチ全景(西より)
2トレンチ全景(西より)
3トレンチ全景(東より)
4トレンチ全景(東より)
6トレンチ全景(南より)
- 図版三三 土師の里遺跡 HJ06-3区 5トレンチSX01遺物出土状況(東より)
同上(南より)
同上(北より)
- 図版三四 土師の里遺跡 HJ06-3区 各トレンチ出土土師器
- 図版三五 土師の里遺跡 HJ06-3区 各トレンチ出土上器
2トレンチ出土遺物
- 図版三六 土師の里遺跡 HJ06-3区 5トレンチSX01出土円筒埴輪
- 図版三七 土師の里遺跡 HJ06-3区 5トレンチSX01出土円筒埴輪、形象埴輪

第1章 調査の概要

【現状と課題】

平成16年10月から平成17年9月までに受け付けた文化財保護法第93条第1項届出及び第94条第1項通知件数は350件を数える(表1)。そして、実際に発掘調査を行ったのは81件である。

発掘調査件数を遺跡別に見ると、はざみ山遺跡が13件と最も多い。次に林遺跡11件、北岡遺跡8件、葛井寺遺跡と土師の里遺跡がそれぞれ7件と続く。のことから、市域の西部から南部にかけてと東部で比較的多くの調査が実施されていることがわかる。また、北東部の国府遺跡では、調査件数自身は少ないが、比較的大規模な調査も実施されている。これらの調査によって、さまざまな成果があがっている。

表1 93条第1項届出及び94条第1項通知件数月別集計表(2005年10月～2006年9月)

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	計
市関係公共事業	1	0	0	2	0	1	5	5	5	3	0	1	23
国・府関係公共事業	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	4
関西電力・大阪ガス	8	8	7	6	10	4	18	7	9	3	11	13	104
その他民間事業	11	15	12	14	9	17	24	23	26	29	19	20	219
計	21	24	19	23	19	22	47	35	40	35	30	35	350

表2 表1に係る指導事項月別集計表(2005年10月～2006年9月)

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	計
発掘	8	5	7	3	15	8	0	8	8	8	9	3	82
立会	1	2	3	0	2	5	1	15	2	2	3	1	37
慎重	22	12	16	11	13	26	4	30	8	39	27	18	226
計	31	19	26	14	30	39	5	53	18	49	39	22	345

表3 試掘調査一覧表(2005年10月～2006年9月)

No.	調査場所	所 在 地	予定工事内容	敷地面積 (ha)	調査所見	担当者
1 1/25	小山1-1224-1 16草	宅地造成	1,811.69		調査区に3箇所のトレンチを設定。GL-1mで砂層。2.8m削削したが湯水のため中止。遺構、遺物なし。	上田
2 4/19	参日丘1-438-10、-20	駐輪場	1,791.59		調査区に3箇所のトレンチを設定。南側のトレンチでGL-0.5mで褐色灰色粘土の地山確認。遺構、遺物なし。他のトレンチではGL-0.5mで砂層。どちらもGL-2.0m削削したが砂層であった。	上田
3 6/5	西古室2-186	店舗	1,294.78		敷地内にトレンチを1箇所設定。GL-1.0mで黄灰色シルトを確認。遺構、遺物は認められなかった。	佐々木
4 8/4	林2-117-1 他	店舗	2,989.76		敷地内にトレンチを1箇所設定。GL-0.7mで黄灰色シルトを確認。遺構、遺物は認められなかった。	佐々木
5. 9/6	沢田1-141-8の一部	店舗	2,403.58		敷地内にトレンチを1箇所設定。GL-2.4mで褐色砂層を確認。遺構、遺物は認められなかった。	佐々木
6 9/27	大井1-458-2	工場付 事務所	889.22		敷地内にトレンチを1箇所設定。GL-0.5mまで掘削したが、遺構、遺物及び地山は確認できなかった。	佐々木

表4 遺跡別届出及び通知件数に対する発掘・立会の指導事項集計表（2005年10月～2006年9月）

遺跡名	届出	①発掘	②立会	①+②	遺跡名	届出	①発掘	②立会	①+②
大正橋遺跡	7	1	0	1	土師の里遺跡	28	7	4	11
津堂遺跡	5	4	0	4	津堂城山古墳	14	3	2	5
小山遺跡	20	4	1	5	岡ミサンザイ古墳	6	2	1	3
小山平塚遺跡	6	3	0	3	ボケ山古墳	1	0	0	0
北岡遺跡	26	7	3	10	葛山古墳	2	1	1	2
葛井寺遺跡	27	6	1	7	仲津山古墳	6	3	0	3
はざみ山遺跡	62	17	6	23	市野山古墳	1	0	0	0
青山遺跡	2	1	0	1	折山古墳	1	1	0	1
西古室遺跡	24	4	3	7	葛井寺1号墳	1	0	1	1
古室遺跡	1	0	1	1	古市大溝	1	0	0	0
川北遺跡	5	1	0	1	土師の里埴輪窯跡群	1	1	0	1
船橋遺跡	58	3	7	10	下田池瓦窯跡	1	0	0	0
林遺跡	31	11	6	17	合計	350	84	40	124
国府遺跡	13	4	3	7					

周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外において、500m²を超える開発工事の場合には事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無の確認を行っていることは従来のとおりである。平成17年10月から平成18年9月までにも6件の試掘調査を実施したが、新規に埋蔵文化財が確認されたものはなかった（表3）。今後とも、事業主との協議の中で、より綿密な試掘調査を実施していく必要がある。

[調査の概要]

次に、実施した調査のうち、主なものについて述べる。

古墳時代では、土師の里遺跡06-3|Xで、掘り込みを検出し、そこから円筒埴輪、形象埴輪が出土した。これらは5世紀中ごろの所産と思われる。この掘り込みは、西隣の土師の里遺跡04-6|Xで見つかった土師の里12号墳に関係する施設の一一部とも考えられるが、それとは別の性格の可能性もある。今後の周辺の調査成果も含めた検討を要する。また、土師の里遺跡05-11区では、新たに埴輪窯が2基見つかった。5世紀中ごろの操業時期が考えられる。これまで埴輪窯の存在が認識されていなかった地点での検出であり、土師の里南埴輪窯跡群と名付けた。土師の里埴輪窯跡群でも2基の埴輪窯の発掘調査が行われた。

古代、中世の時期についても、複数の調査区で成果が認められる。

以上のように、本市では連続と発掘調査が行われている。貴重な埋蔵文化財の発掘調査によつて得られたデータを総合的に分析することによって、当該地域の歴史像を再構築していくことが今後の大きな課題である。

（新開）

表5 発掘調査一覧表（2005年10月～2006年9月）

遺跡名	No.	発蓋期間	所 在 地	敷地面積 (m ²)	測量 高さ (m)	時期	遺構	遺 物	標高 (T.P.) m			地山の土質	備 考	担当者
									地山	葛西河 岸	上層			
大渡 止 施跡	05-1	12/7	小山7-1242, 1243	2,457.80	12	古代	-	土師器	12.5	11.9	-	1.5m掘削 地山未確認		上田
津 堂 遺 跡	05-1	11/11	津堂2-64-5, 64-7	231.41	3	古代		土師器、須恵器	15.2	14.9	14.3	淡灰褐色粘土		上田
	05-2	1/13	津堂2-28-1	1,113.73	8	-	-	-	15.4	-	-	2.5m掘削 地山未確認		上田
	05-3	3/13	津堂2-53-1	325.84	2	-	-	-	15.4	-	-	1.5m掘削 地山未確認		新聞
小 白 道	05-3	12/21	小山3-290-1, 577-1	1,304.70	20	-	-	-	16.0	-	15.5	灰褐色粘土		上田
	06-1	5/29 5/30 ~6/10	津堂2-10-2 の一部	382.88	80	古代 中世	掘立柱建物 構、上層	土師器 瓦器、丸質十器	15.5	15.0	14.8	灰褐色粘土		上田
	06-2	8/17	津堂2-23-1	93.39	3	-	-	瓦	15.4	-	-	1.2m掘削 地山未確認		新聞
群 落	06-3	9/21	津堂1-569-2 他2棟	349.91	32	平安	溝	土師器、須恵器	16.1	15.5	15.3	黄灰色シルト		佐々木
	06-4	9/11	津堂1-181-1 の一部	151.43	4	-	-	-	17.5	-	-	1.5m掘削 地山未確認		上田
小城 山道 平跡	05-2	11/11	小山17-951-6	67.53	2	-	-	-	14.5	-	-	1.5m掘削 地山未確認		新聞
	05-8	10/12	岡1-191-22	97.14	4	-	-	-	21.8	-	20.7	淡灰褐色と 淡黃色粘土 が混じる層		新聞
北 山	05-9	11/2	小山1-545-25	126.47	2	古代	落ち込み	土師器、須恵器	20.5	20.1	20.0	灰褐色粘土		上田
	05-10	11/15	小山2-387-1, 392-1、393-1 の各一部	1,431.01	10	-	谷落ち込み？	-	18.7	-	-	2.0m掘削 地山未確認		上田
岡 通	05-11	2/13	岡1-191-4	80.43	2	古代	-	土師器、須恵器	21.9	-	-	1.4m掘削 地山未確認		新聞
	05-12	2/23	北岡2-49-37	246.33	2	古代	掘り込み	土師器、須恵器	22.0	-	21.2	黄灰色土質十 (淡灰褐色粘 土混じり)		新聞
群 落	05-13	3/6	小山2-16-10, 18-12	86.42	2	-	-	-	20.2	-	-	0.8m掘削 地山未確認		新聞
	06-1	4/7	恵美坂 1-241-2	960.00	8.3	中世	柱穴(中世)	古代・中世の 土器	24.7	東24.5 西24.5	24.4 24.1	黄灰色砂礫 黄灰色シルト		天野
	06-2	9/15	岡2-980-1	131.28	4	-	-	-	27.0	-	26.5	灰褐色粘土		上田
西 井 寺 遺 跡	05-5	10/13	泰日丘2-652-25	238.01	1	-	-	-	31.6	-	31.4	淡黄褐色粘質 土		新聞
	05-6	11/1	泰井寺 3-323-14	84.77	1	-	-	-	27.6	-	-	0.6m掘削 地山未確認		新聞
	05-7	2/13	泰井寺 2-270-49	130.11	2	-	-	-	26.3	-	24.5	暗緑灰色砂礫		新聞

調査地名	No.	調査期間	所在地	敷地面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	時期	遺構	遺物	標高 (T.P.) m			地山の土質	備考	担当者
									地表	野古層 上部	地山 下部			
馬井寺遺跡	06-1	4/12	春日丘 1-534-8	148.63	2	—	—	—	29.2	—	29.0	白灰色バイラ ン土		上田
	06-2	5/15	藤井寺 2-270-35	98.67	2	—	—	—	26.4	—	25.5	黄灰色粘質土		新聞
	06-3	6/20	藤井寺2-209- 4, 6, 8, 部分 の各一部	1,078.31	6	—	—	—	26.5	—	25.9	淡褐色粘土		上田
	06-4	9/4	春日丘 1-530-45 の一部	278.71	4	—	—	—	29.5	—	29.2	淡褐色粘土		上田
は	05-14	2/7	野中2-44-8	177.62	4	—	—	—	30.2	—	28.8	淡黃灰色砂疊		新聞
	05-15	2/22	藤井寺 3-148-26	110.62	2	—	—	—	29.1	—	27.8	黄灰色粘質土		新聞
	05-16	3/14 3/17 ~ 27	藤ヶ丘2-151-30	338.59	39.5	古墳 古代	—	埴輪 土器、須恵器 瓦	24.6	24.2	24.0	淡黃灰色粗砂		新聞
	06-1	4/28	藤ヶ丘 1-108-137	132.24	3	—	—	—	24.6	—	23.4	淡褐色粘土		新聞
み	06-2	6/1 · 2	藤ヶ丘 4-354-141	184.57	9.5	古代	溝	土器、須恵器	30.1	—	29.4	淡白灰色粘質土	本曹掲載	新聞
	06-3	6/19	藤ヶ丘2-151-13	231.00	2	—	—	—	26.6	—	—	0.5m削削 地山未確認		新聞
	06-4	6/21	藤ヶ丘 3-312-4 313-3 の各一部	171.90	2	中世	—	土器、瓦器	29.6	29.0	28.9	黄灰色粘土		新聞
	06-6	8/22	藤ヶ丘 3-327-15	66.21	2	—	—	—	30.5	—	29.4	灰褐色粘土		上田
路	06-7	8/22	野中2-44-7	104.68	3	—	—	—	30.2	—	28.9	淡黃灰色砂疊		新聞
	06-8	8/29	藤ヶ丘 1-108-94	140.19	2	—	—	—	26.5	—	26.1	淡黃灰色粘質土		新聞
	06-9	9/11	藤ヶ丘2-151-68 の一部	234.74	2	—	—	—	27.0	—	—	0.5m削削 地山未確認		新聞
	06-10	9/14	藤ヶ丘3-330-6	79.87	3	—	—	—	30.3	—	29.9	黄灰色粘質土		新聞
西古座遺跡	06-11	9/21 9/26 ~28	藤ヶ丘2-222-8 の一部	85.92	15.5	古代 中世	掘り込み	土器、須恵器 瓦器	27.9	—	26.9	淡黃褐色粘質土	本曹掲載	新聞
	05-1	12/21	青山2-630-77	95.45	2	—	—	—	36.4	—	34.9	黄灰色粗砂		新聞
	06-1	6/6	東藤井寺町 79-12	105.21	2	—	—	—	22.4	—	21.7	淡黃灰色粘質土		新聞
	06-2	6/28	西古座1-72-1	335.26	2	—	—	—	19.8	—	19.4	黄灰色粘質土		新聞
青	06-3	6/29	東藤井寺町 106-3	493.155	5	古代	—	土器、須恵器	22.4	22.0	20.2	淡灰黄色粘土		上田

遺跡名	No.	調査断面	所 在 地	敷地面積 (m ²)	調査 面積 (m ²)	時 刻	遺 槽	遺 物	標高 (T.P.) m			泡山の土質	備考	担当者
									地表	気合場 上部	地山 上部			
内蔵 古墳跡	06-4	9/1	東藤井寺司 99-6	302.76	2	-	-	-	24.2	-	23.3	黄灰色粘質土		新聞
川北 古墳跡	06-1	6/28	川北2-204-1 の一部	1,562.00	18	-	-	-	17.3	-	-	2.0m削削 地山未確認		上田
船 棺 通 路	05-1	10/31	北様町35-1, 3	891.98	4	-	-	-	16.6	-	-	2.5m削削 地山未確認		上田
	05-2	1/5 ~ 3/14	大井1-2	9,451.35	407	占墳 古代	柱穴	須恵器 土師器、須恵器	15.2	13.8	13.4	褐色砂疊		佐々木
	06-1	9/25	大井1・41日	6,300.00	8	-	-	-	15.7	-	-	3.0m削削 地山未確認		佐々木
	05-4	10/24 ~ 12/9	沢田3-324-1	11,431.00	62	古代	落ち込み	土師器、須恵器	26.9	26.6	26.5	褐色砂疊		佐々木
林 道	05-5	11/7	林6-301、302	375.78	5	中世	落ち込み	土師器、瓦器	18.3	17.9	17.7	淡褐色砂疊		上田
	05-6	1/18	林3-236-361	96.15	2	-	-	-	15.6	-	-	1.8m削削 地山未確認		新聞
	05-7	2/8	林4-365-2	109.90	2	-	-	-	19.2	-	18.7	淡褐色砂疊		上田
	05-8	2/21	沢田3-671-1	142.98	2	--	-	-	18.8	-	17.5	黄灰色粘質土		新聞
河	05-9	2/15	沢田2-705-1, 8	1,675.75	4	-	-	-	18.2	-	17.1	灰黄色粘土		上田
	05-10	3/13	沢田2-262-7, .8	139.37	2	-	-	-	17.8	-	-	1.2m削削 地山未確認		新聞
	06-1	5/25 6/8	沢田3-374-5	159.21	6	古代	-	土師器 瓦	24.7	-	24.4	淡黄色砂疊		新聞
	06-2	6/2	沢田2-265-2	234.03	2	-	-	-	17.1	-	15.8	黄灰色砂疊		新聞
周 道	06-3	7/24	沢田2-697-2	201.34	1	-	--	-	17.3	-	-	0.5m削削 地山未確認		新聞
	06-4	7/31	林5-358-12	151.46	8	-	掘り込み	土師器、瓦	23.8	-	23.4	黄灰色パイナ ン土		新聞
	05-1	12/13	国府2-441-23, .28	153.49	1.5	-	--	-	22.7	21.3	20.9	黄褐色砂疊		山田
	05-2	1/6	国府2-441-24, .29	133.28	4	-	-	-	22.7	-	-	0.5m削削 地山未確認		新聞
通 路	06-1	4/25 4/28~ 6/1	国府1-401-1, 403-1 の一部	985.34	192	古墳	円筒形器	地輪 土師器、須恵器	24.0	23.7	23.2	褐色砂疊		佐々木
	06-2	7/4 ~ 5 7/13 ~ 12/16	国府1-395-甲, 他	4,777.48	1,200	弥生 古墳	土塗 堆積土塙、薄 土塗、薄 集落基	火炎土器 須恵器、土師器 瓦質土器	24.5	24.1	23.5	褐色粘土上 褐色砂疊		上田
土質 的遺 跡	05-10	10/14	透明寺2-561-3	115.66	2	-	-	-	22.6	-	21.9	淡灰色細砂		新聞

遺跡名	No.	調査期間	所在地	敷地面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	時期	遺構	遺物	標高(T.P.) m			地山の上質	備考	担当者
									粘土	砂岩層	基盤トコ			
土居の里 東路	05-11	1/24～ 2/2～ 5/3	道明寺5-319 1,-7,-315,- 316の一部	1,765.42	450	古墳 中世	埋輪窓2基 土壙器、須恵器 瓦等	縄繩土器、環状 土器器、須恵器 瓦等	25.0	24.8	24.6	褐色色粘土 褐色砂礫	土居の日 南治輪窓 漆器発見	上田
	06-1	4/21	道明寺2-677-1	152.86	1	古代	—	土器器	21.6	—	—	0.4m削削 地山未確認		新聞
	06-2	5/19	道明寺2-493-1	139.89	2	—	—	—	23.0	—	22.6	淡黄灰色粗砂 (淡灰灰色細砂 が少々混じる)		新聞
	06-3	6/6 6/9～ 14	道明寺5-317-4	164.60	12	古墳 中世	埋り込み ビット	埴輪 土器器	25.5	—	25.0	淡黄褐色砂礫	本寺探査	新聞
	06-4	7/10 -57,-60	道明寺1-682	171.07	2	—	—	—	22.3	—	—	0.5m削削 地山未確認		新聞
津 山 古 墳	06-5	7/21 7/24～ 8/27	道明寺2-675, 648-3 の各部	424.34	80	古代	埋敷き土壙、櫛 刷毛、瓦類	土器器、須恵器 瓦等	21.0	20.7	20.3	灰褐色砂質土		上田
	05-1	10/3	小山4-1293 -1,-6	235.78	2	—	—	—	16.5	—	—	0.7m削削 地山未確認		新聞
	05-2	10/20 -21	津堂74-6 小山4-1299 -23,-26	611.57	10	古墳	漢状遺構 城山古墳外堤 盛土	—	16.6	—	—	0.8m削削 地山未確認		上田
	05-3	1/26	小山新町 1111-16	149.55	9	—	—	—	15.2	—	—	0.9m削削 地山未確認		新聞
	06-1	6/14	小山6-1136-94	144.86	2	古墳	内堀	—	15.2	—	—	0.5m削削 地山未確認 T.P.14.8m	内港上面	新聞
阿 波 シ ン ガ 古 墳	06-1	5/19	藤井寺 4-765-39	149.53	2	—	—	—	34.6	—	34.3	黃灰色細砂		新聞
	06-2	7/28 8/3-4	藤井寺 4-765-40	272.28	9	—	—	—	34.6	—	34.1	黃灰色細砂		新聞
桑 田 古 墳	05-1	2/27	西中3-1017 の一部	316.93	2	中世	埋り込み	土器器、瓦	32.0	—	31.5	淡黄褐色砂礫		新聞
	05-2	11/10	沢田4-384-2	114.65	2	—	—	—	28.4	—	28.1	淡黄灰色砂礫		新聞
	06-1	5/12	沢田4-591-15	115.71	2	—	—	—	25.5	—	24.1	淡黄褐色砂礫		新聞
竹 津 古 墳	06-2	7/26	沢田4-384-1	118.34	2	—	—	—	28.3	—	28.0	褐色砂礫		上田
	06-1	7/13 -14	林5-1-30	1,895.16	4	古墳	埴丘	—	25.2	—	—	地山未確認 T.P.25.4m (古墳あり)	埴丘上面	新聞
土居 跡 の里 跡	06-1	7/27 8/22～ 9/30	沢田4-582-1, 583, 585-1	613.23	100	古墳 古代	埋輪窓2基 講	埴輪 土器器、須恵器 瓦等	31.5 (中央)	—	31.1 (中央)	褐色シルト		上田

第2章 葛井寺遺跡の調査



図1 葛井寺遺跡調査区位置図 (S = 1 : 7,500)

1. FJ04-11・05-1区



図2 トレンチ位置図 ($S = 1:500$)

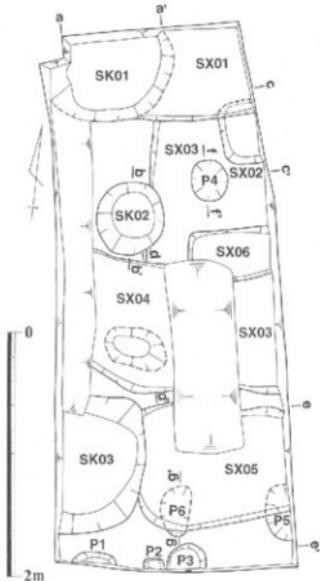


図3 FJ04-11区 遺構平面図

調査区は、羽曳野丘陵から派生する中位段丘上に位置し、周辺の地形は北東方向に下降する。周辺の調査では、古代から中世にかけての集落関連施設や、古代の粘土採掘のためと思われる土壙が検出されている。

調査の経過

今回報告する調査は、FJ04-11区とFJ05-1区の2つの調査区についてである。これらは本来別の調査区であるが、隣接しているため、同時に報告を行う。各調査区の調査面積は、FJ04-11区が 8 m^2 、FJ05-1区が 12.8 m^2 を測る。

FJ04-11区の現状のレベルはT.P.27.15m程度である。にぶい褐色細砂（第2層）の下、トレンチ中央部から南半部では、地山である明黄褐色粘質土（A層）があらわれる。これに対して北半部では第2層とA層との間に黄橙色微砂とマンガン粒が混じる層（第3層）が薄く堆積している。この第3層はSX01の埋土である。地山レベルはT.P.27.05m程度であるが、地形は北方向に緩やかに下降しているようである。地山上で、土壙、掘り込み、ピットを検出した。

FJ05-1区の現状のレベルはT.P.27.15m～27.3m程度である。現代の盛土の下、淡褐灰色細砂が層状に混じる淡灰色細砂（第2層）があり、それ以下に各層の堆積が認められる。そして、その下に地山である淡黄灰色粘質土（A層）があらわれる。地山レベルはT.P.26.75m程度である。地山上で、溝、掘り込み、ピットを検出した。

調査の成果

調査区ごとの主な遺構と、FJ04-11区SK03出土土器について報告を行う。

[FJ04-11区]

SK01 トレンチ北端で検出した土壙。SX01に切

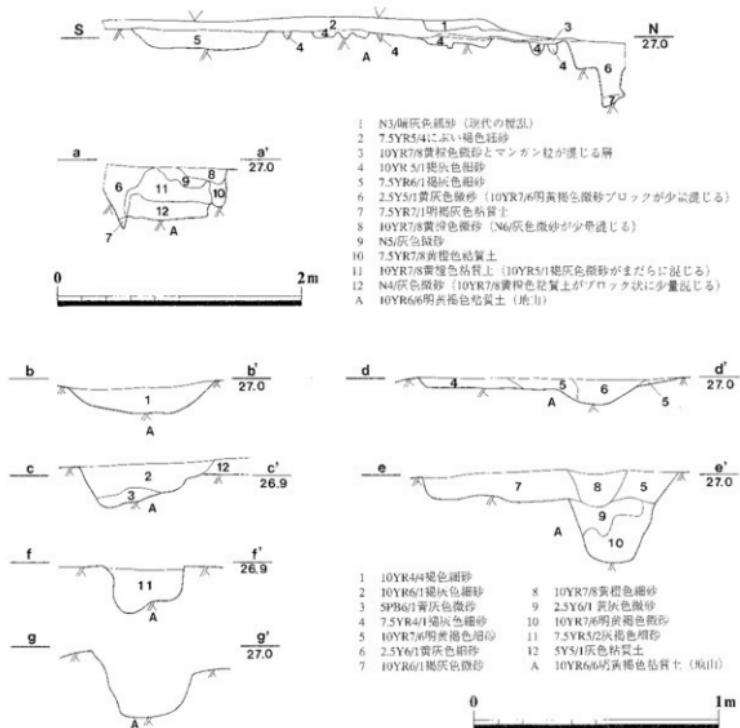


図4 FJ04-11区 トレンチ及び各断構面図

られる。一部がトレンチ外に出るが、平面形態はいびつな円形を呈すると推定される。直径は確認できるところで1.1m程度である。断面形態は不定形で、形態を意識せずに掘削されたと思われる。上端からの深さは0.5mを測る。埋土は粘質土系（第7・10・11層）と微砂系（第6・8・9・12層）があるが、その堆積状況から、自然に埋没したのではなく、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。古代の土師器、須恵器の破片が出土した。この土壇の埋没の上限も同時期に求められる。

SK02 トレンチ北側で検出した土壇。SX03を切る。平面形態はややいびつな円形を呈し、上端の最大径は0.6mを測る。断面形態はいびつな皿状で、上端からの深さは0.14mを測る。埋土は、褐色細砂である。土師器片が出土しているが、時期等は不明である。

SK03 トレンチ南西側で検出した土壇。SX05を切る。西侧がトレンチ外に出るが、平面形態は隅丸方形に近い円形を呈すると思われる。直径は確認できるところで1.1m程度である。断面形態は皿状で、上端からの深さは0.16mを測る。埋土は、褐灰色細砂である。奈良時代前半の土

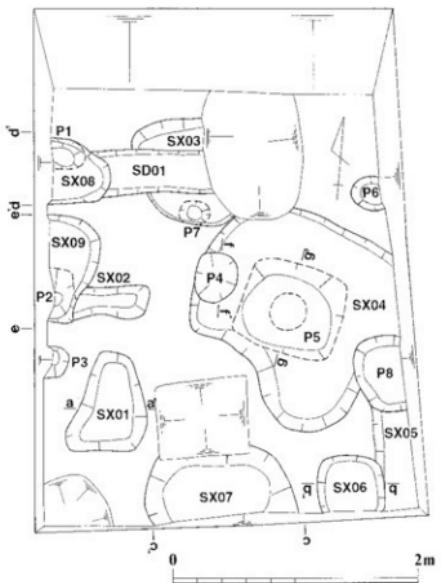


図5 FJ05-1区 遺構平面図

師器、須恵器の破片が出土した。このピットの埋没の上限も同時期に求められる。

P2 トレンチ西隅で検出したピット。SX09に切られる。一部がトレンチ外に出るが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。確認できるところで一辺0.45mを測る。断面形態は、両側面ともやや緩やかに落ち込んで底部にいたる。地山面からの深さは0.51mを測る。埋土は、淡茶灰色細砂が少量まだらに混じる淡灰色細砂であるが、一部に灰白色細砂が認められる。土師器、須恵器の破片が出土しているが、時期は不明である。

P4 トレンチ中央部で検出したピット。SX04を切る。平面形態は楕円形を呈する。上端の最大径は0.4mを測る。断面形態は、両側面ともほぼまっすぐに落ち込んで底部にいたる。上端からの深さは0.42mである。埋土は、暗灰色細砂である。古代の所産と思われる土師器、須恵器の破片が出土した。このピットの埋没の上限も同時期に求められる。

P5 トレンチ中央部より検出したピット。SX04に切られる。平面形態は隅丸長方形を呈する。上端の長辺0.85m、短辺0.75mを測る。断面形態は、両側面ともやや急に落ち込み、底部は平坦な面をなす。上端からの深さは0.41mを測る。直径0.3m程度の柱痕が認められる。掘り方内の埋土は、淡灰色細砂と黄灰色細砂がまだらに混じる層と、淡灰色細砂が混じる黄灰色細砂とに分かれ。古代の所産と思われる土師器、須恵器の破片が出土した。このピットの埋没の上限も同時期に求められる。

師器、須恵器が出土した。この土壤の埋没の上限も同時期に求められる。土器はまとめて廃棄されたような状態で出土したが、ほとんどが土師器で、須恵器は数点のみであった。

以上の土壤のほかに、掘り込み、ピットを検出した。これらは時期の不明なものもあるが、ほとんどは古代の範囲に入るものと思われる。

[FJ05-1区]

P1 トレンチ北西側で検出したピット。SX08に切られる。一部がトレンチ外に出るが、平面形態は楕円形を呈すると思われる。確認できるところで直径0.25mを測る。断面形態は、両側面ともほぼまっすぐに落ち込んで底部にいたる。地山面からの深さは0.52mを測る。埋土は、灰白色細砂と、黄灰色細砂が少量混じる灰色細砂とに分かれ。古代の土

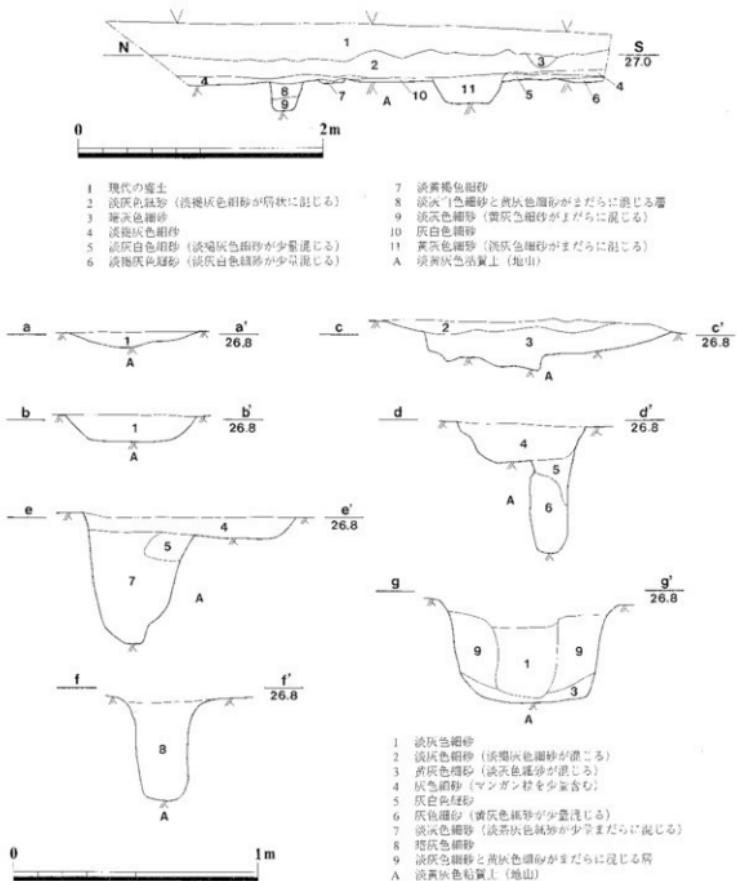


図6 FJ05-1区 トレンチ及び各縦構断面図

P6 トレンチ北東隅で検出したビット。一部がトレンチ外に出るが、平面形態は楕円形を呈すると思われる。上端の直径は0.3m程度を測る。断面形態は、両側面ともやや急に落ち込み、底部は平坦な面をなす。上端からの深さは0.21mを測る。埋土は、淡灰白色細砂と黄褐色細砂がまだらに混じる層と、黄褐色細砂がまだらに混じる淡灰褐色細砂とに分かれる。古代の所産と思われる土師器、須恵器の破片が出土した。このビットの埋没の上限も同時期に求められる。

P8 トレンチ南東隅で検出したビット。SX04・05を切る。一部がトレンチ外に出るが、隅丸方形を呈すると思われる。上端の一辺は0.6m程度を測る。断面形態は、底部の平坦な楕円形を呈する。上端からの深さは0.21mを測る。埋土は、淡灰褐色細砂がまだらに混じる黄褐色細砂であ

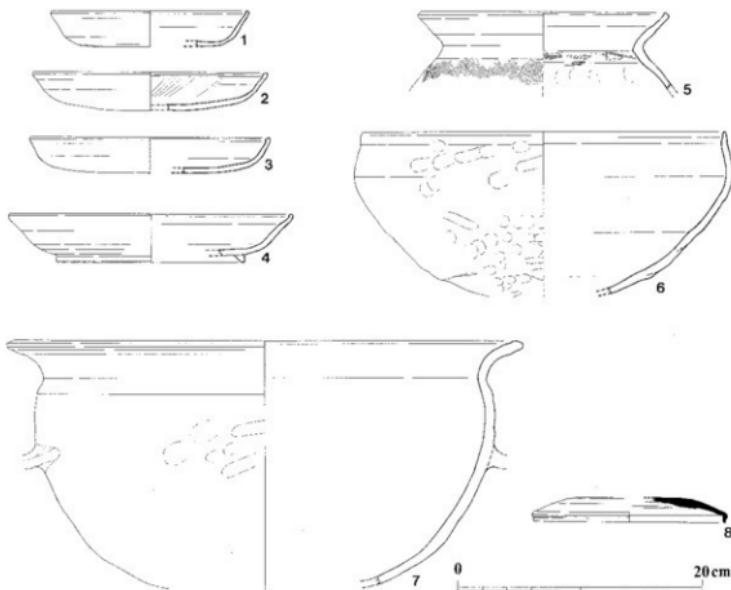


図7 FJ04-11区SK03出土土器実測図

る。SX04・05を切ることから、このピットの埋没の上限は古代以降に求められる。

[FJ04-11区SK03出土土器]

SK03からは整理用コンテナ1箱程度の土器が出土した。先にも述べたようにほとんどが土師器で、須恵器は数点のみであった。形態の判別できるものを図化した。土師器の壊(1~4)、壺(5)、鉢(6)、鍋(7)、須恵器の壊蓋(8)がある。これらは奈良時代前半の所産である。

小結

今回報告したうち、FJ04-11区で検出したSK01とSK03は、周辺の調査でも確認されている古代の粘土探掘のための土壠と同様の性格のものと考えられる。断面形態は異なるが、両方とも周辺で検出した土壠にも見られる形態である。なお、SK02については、埋土の状況などから、粘土探掘のための土壠とは異なったものであると思われる。

FJ05-1区で検出したピットには、集落を構成する掘立柱建物などの建築物の柱穴の可能性が考えられるものがある。特にP5は、柱痕が認められることから、確實に柱穴であることがわかる。その他のピットを含めて、古代の範疇に入るものが多いようである。建物自体の平面形態などは不明であるが、古代集落が当調査区周辺まで広がっていることを示している。

今回の調査では、古代の集落や、粘土探掘のためと思われる土壠の平面的な広がりについての知見が得られたことが大きな成果としてあげられる。

(新聞)

2. FJ05-2区

位置と環境

調査区は、羽曳野丘陵から派生する中位段丘上に位置し、周辺の地形は東方向に緩やかに下降する。これまでの周辺の調査では、古代の粘土探掘のためと思われる土塊が検出されている。

調査の経過

個人住宅建設の届出がなされたため、発掘調査を実施した。調査面積は、 18.8 m^2 を測る。

調査区内の現状のレベルはT.P.28.1 m程度である。

調査区全体に表土及び搅乱（第1層）が存在し、それを除去すると灰黄褐色細砂（第2層）の堆積が認められる。第2層の下が遺構検出面になる。ただし、土層観察を行ったトレーニング西壁断面では、遺構が切り合っているため、地山が確認できるのは、遺構検出面より低いレベルである。なお、遺構検出面の標高は、T.P.27.7 m程度である。

遺構は、溝、掘り込み、ピットを検出した。基本的に地山上での検出であるが、切り合い関係が認められるため、遺構検出面で地山が確認されたのは一部分のみであった。



図8 トレーニング位置図 ($S = 1:500$)

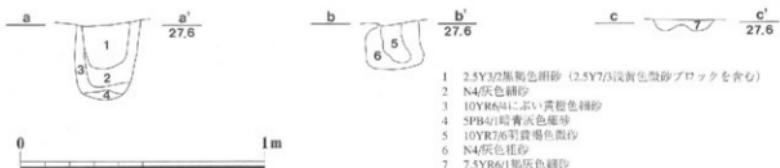
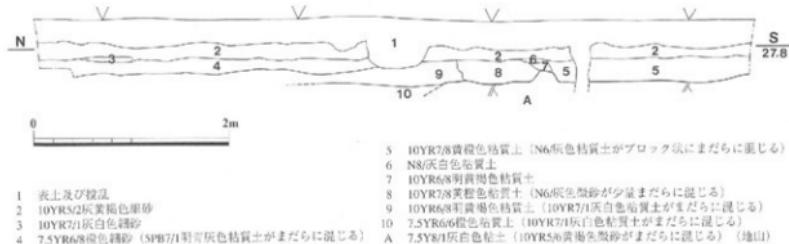


図9 トレーニング及び各遺構断面図

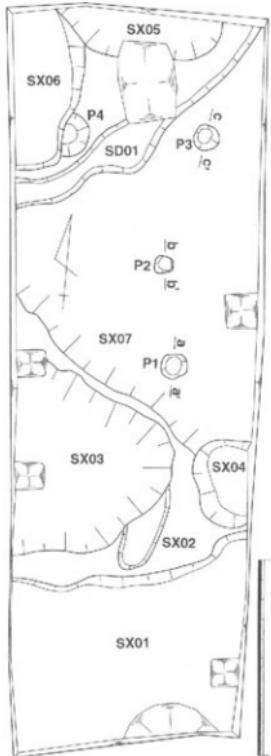


図10 遺構平面図

調査の成果

遺構

調査は、工事で損壊を受ける深度まで行ったため、それよりも深くなる遺構は完掘していない。SX01・07と、P1～3について述べる。

SX01 トレンチ南側で検出した掘り込み。トレンチ東側断面の観察では、SX04を切る。北側の上端のみを検出したが、平面形態は不定形である。大部分はトレンチ外に出ると思われる。断面形態も不明確であるが、底部は平坦な面をなす。遺構検出面からの深さは、0.1mを測る。埋土は、灰色粘質土がブロック状にまだらに混じる黄褐色粘質土（第5層）である。なお、上端から落ち込む斜面の部分には灰白色粘質土（第6層）や明黄褐色粘質土（第7層）の堆積が認められる。土師器、須恵器が出土した。数量的には、土師器が多く、須恵器は数点にすぎない。これらは平安時代前半の所産である。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

SX07 トレンチ中央部から北側で検出した掘り込み。SD01、SX04、P1～3に切られる。南側の上端のみを検出したが、平面形態は不定形である。東半分はトレンチ外に出る。底部を確認できていないため、断面形態も不明である。埋土は、灰白色粘質土がまだらに混じる明黄褐色粘質土（第9層）、灰白色粘質土がまだらに混じる橙色粘質土（第10層）まで確認したが、それ以下は未確認である。土師器、須恵器が出土した。ほとんどが土師器で、須恵器は数点のみであった。これらは平安時代前半の所産である。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

SX01とSX07は、SX04を介した切り合い関係から、SX07→SX01の順に形成されたことがわかる。しかし、出土した土師器はいずれも平安時代前半の所産であり、大きな時期差は認められない。このことから、これらは、SX07→SX04→SX01の順に、わずかな時期差で掘削と埋没を繰り返したと考えられる。これらの性格等は不明であるが、いずれも埋土が粘質土であることから一定期間滞水状態にあったとも考えられ、貯水を目的として掘削されたとも想定される。なお、SX03についても、埋没の上限はこれらとはほぼ同時期であると思われる。

P1 トレンチ中央部で検出したピット。SX07を切る。平面形態は円形を呈し、上端の直径は0.3mを測る。断面形態は両側面が急に落ち込み、底部にいたる。上端からの深さは0.3mを測る。時期等は不明である。

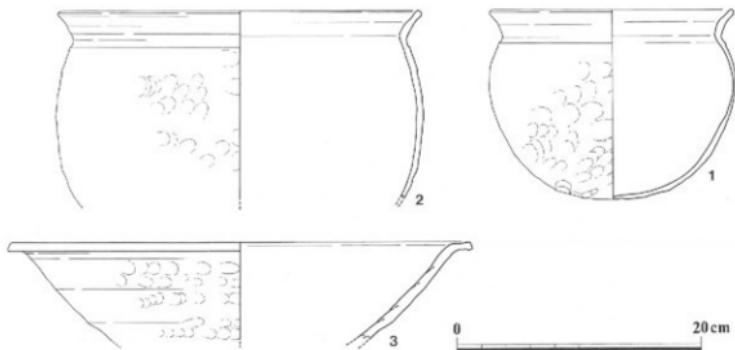


図11 各遺構出土土師器実測図（1：SX01、2・3：SX07）

P2 トレンチ中央部北よりで検出したピット。SX07を切る。平面形態は円形を呈し、上端の直径は0.2mを測る。断面形態は、南側はほぼ垂直に落ち込み底部にいたるが、北側はえぐれるような形状が認められる。上端からの深さは0.19mを測る。埋土は、明黄褐色微砂（第5層）と灰色粗砂（第6層）である。第5層は柱痕の可能性が考えられる。土師器の破片が出土したが、時期等は不明である。

P3 トレンチ北側で検出したピット。SX07を切る。平面形態は円形を呈し、上端の直径は0.25mを測る。断面形態は浅い皿状であるが、底部中央が盛り上がっている。上端からの深さは0.2mを測る。埋土は、褐灰色細砂（第7層）である。土師器の破片が出土したが、時期等は不明である。

遺物

調査区全体では、遺物は整理用コンテナ1箱程度出土している。この内、SX01とSX07から出土した土師器で、図化可能なものを掲載した。

土師器の壺（1・2）、盤（3）がある。壺は、外面に成形時に指で押された痕跡が残る。口縁部はなでて仕上げる。藤井寺市及びその周辺で特徴的に出土する形式である。これらは、先にも述べたように平安時代前半の所産である。

小結

今回報告したSX01やSX07といった掘り込みの性格等については、古代における周辺の土地利用の方法も視野に入れた上で再考する必要があろう。
（新聞）

第3章 はざみ山遺跡の調査



図12 はざみ山遺跡調査区位置図 (S = 1 : 7,500)

1. HM06 - 2区

位置と環境

調査区は、羽曳野丘陵から派生する下位段丘上に位置し、周辺の地形は東方向に緩やかに下降する。周辺の調査では、古代から中世にかけての掘立柱建物、井戸、区画溝などの集落関連施設が検出されている。

調査の経過

工事で遺構を損壊する部分にトレーニチを設定して調査を実施した。調査面積は、9.5 m²である。

調査区内の現状のレベルは、T.P.30.1 m程度である。現代の盛土、旧耕土を除去すると、淡黄褐色細砂、褐灰色細砂、淡青灰色細砂の順に堆積しており、その下に、地山である淡黄灰色粘質土がまだらに混じる淡白灰色粘質土があらわれる。地山レベルは、T.P.29.4 m程度である。地山上で溝(SD01)を検出した。

SD01は、上端ラインはやや湾曲するが、西北西方向に走る。上端の最大幅は、1.2 mを測る。完掘していないため断面形態は不明であるが、埋土は灰色細砂である。土師器、須恵器の破片が出土している。埋土の状況などから考えると、SD01は古代の所産である蓋然性が高いと思われる。性格等は不明であるが、排水等のための施設の可能性を考えられる。

小結

今回の調査では、掘立柱建物や井戸といった、集落の一部であることを直接示す施設は確認できなかった。しかし、周辺の調査成果から、当調査区の場所も古代集落の範囲内であり、SD01も集落内の施設であると思われる。
(新開)



図 13 トレーニチ位置図 (S = 1 : 500)

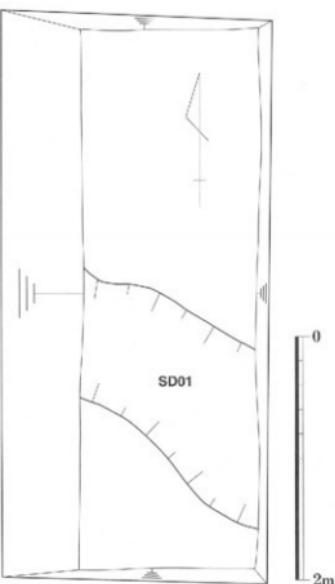


図 14 遺構平面図

2. HM06-11区

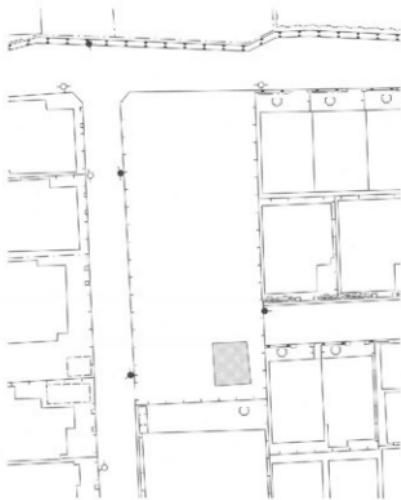


図15 トレンチ位置図 ($S = 1:500$)

を測る。現代の盛土（第1層）、旧耕土（第2層）及び淡褐色灰細砂（床土）（第3層）を除去すると、各層の堆積が認められ、それらの下に地山である淡黄褐色粘質土があらわれる。地山レベルは、T.P.26.9 mを測る。地山上で、土壤、溝、掘り込みを検出した。

調査の成果

SK01 トレンチ北側で検出した土壤。半分以上がトレンチ外に出ると思われ、平面形態、断面形態とも不明である。埋土は、黄灰色粘質土（第1層）と淡灰色細砂（第2層）とに分かれる。須恵器の坏身の破片が出土した。口縁部の直径が12.3 cmを測る。7世紀前半の所産と思われる。この土壤の埋没の上限も同時期に求められる。

SD01 トレンチ南側で検出した溝。北西方向に走り、トレンチ内で収束する。上端の最大幅0.23 m、確認された長さは1.2 mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、上端からの深さは0.05 m程度である。遺物は出土しておらず、時期も不明である。動溝の類であると思われる。

以上の他に、掘り込みを6基検出した（SX01～06）。大きさはさまざまで、平面形態も規則性等は認められない。いずれも遺物は出土しておらず、時期も不明である。



図16 SK01 出土須恵器 実測図

位置と環境

調査区は、羽曳野丘陵から派生する下位段丘上に位置し、周辺の地形は北東方向に緩やかに下降する。

東へ50mのHM02-16区の調査では、7世紀前半を埋没の上限とする溝が検出されている。また、調査区の西側及び南側では、掘立柱建物や井戸、区画溝といった、古代から中世にかけての集落関連施設が多く見つかっている。

今回も、このようなことを視野に入れて調査を実施した。

調査の経過

工事で遺構面を損壊する部分にトレンチを設定して調査を実施した。調査面積は、15.5 m²である。

調査区内の現状のレベルは、T.P.27.9 m

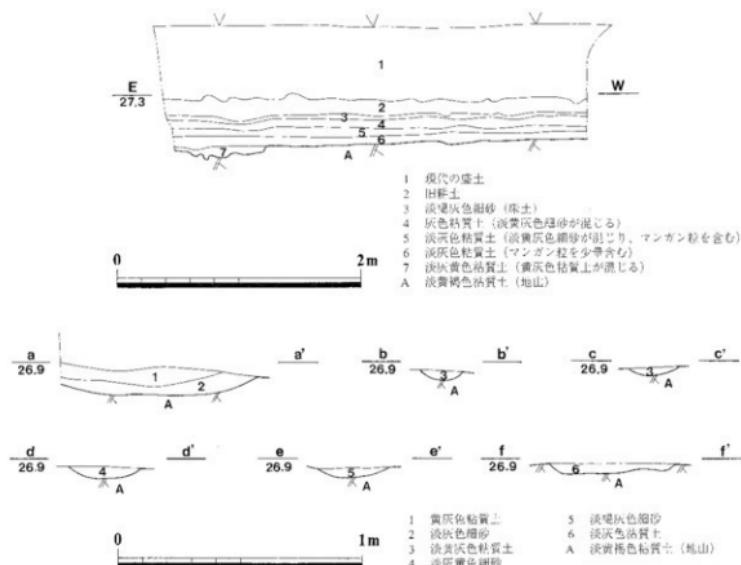


図 17 トレンチ及び各構造断面図

小結

SK01 から出土した須恵器の环身は、先にも述べたように 7 世紀前半の所産である。HM02-16 区の調査成果からも周辺に 7 世紀前半の遺構がさらに分布している可能性があると思われる。(新聞)

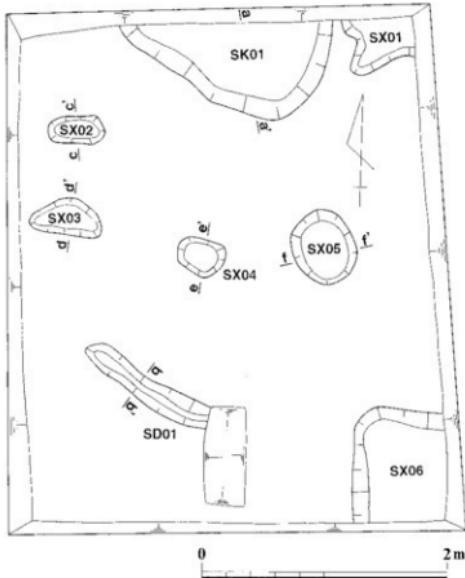


図 18 遺構平面図

第4章 土師の里遺跡の調査

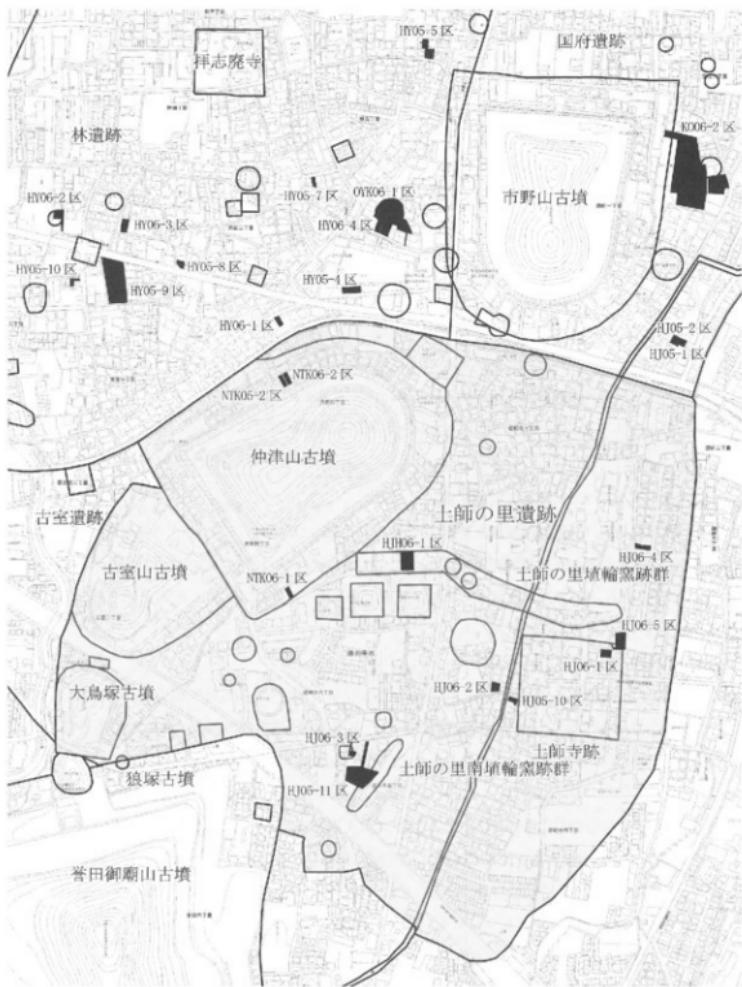


図 19 土師の里遺跡調査区位置図 (S = 1 : 7,500)

1. HJ97-10区

調査区の位置と環境

古市古墳群は墳丘長425mの前方後円墳誉田御廟山（応神陵）古墳を頂点とする大小150基あまりの古墳で構成された古墳時代中期から後期前葉にかけての大古墳群である。

大王陵及びそれに準ずる古墳は古墳時代中期初頭の墳丘長208mの前方後円墳津堂城山古墳を最古とし、墳丘長290mの前方後円墳仲津山古墳、墳丘長225mの前方後円墳墓山古墳、誉田御廟山古墳と続く。その後やや時期的なブランクが見られるが、墳丘長200mの前方後円墳前の山古墳、墳丘長230mの前方後円墳市野山古墳が見られる。古墳時代後期に入ると墳丘長242mの前方後円墳岡ミサンザイ古墳、墳丘長115mの前方後円墳白髮山古墳、墳丘長122mの前方後円墳ボケ山古墳、墳丘長122mの前方後円墳高屋城山古墳まで続く。

本調査区は大鳥塚古墳の南東100mで誉田丸山古墳の北東40m、誉田御廟山古墳の北西部外堤にある。

誉田御廟山古墳では周辺にいくつかの古墳が認められる。アリ山古墳は南西にある一辺45mの方墳で昭和36年に発掘調査を実施し、墳丘部に3基の施設を確認した【北野1979】。北施設からは総数2700を超す鉄器が埋納されていた。南側の東山古墳は一辺50mの方墳で高さ7mを測る。

誉田御廟山古墳の東側には一辺43mの方墳栗塚古墳が認められる。昭和63年から平成元年にかけて3次にわたる発掘調査がなされ、墳丘裾と濠、堤の円筒埴輪列を検出した【吉澤1989】。二ツ塚古墳は墳丘長110mの前方後円墳で、誉田御廟山古墳造営以前に造営されていたため中堤を共有する。東馬塚古墳は昭和55年発掘調査され一辺29mの方墳であることや円筒埴輪列が発見された【畑本1979】。円筒埴輪に有黒斑のものと窯窓焼成のものが混在し、二ツ塚古墳の陪塚と考えられる。茶山1号墳は昭和58年新規発見された一辺11mの方墳である【森田1984】。幅2mの周濠内からは多量の形象を中心とした埴輪が出土した。土師の里11号墳は二ツ塚古墳の北側で誉田御廟山古墳外堤に接して造られた一辺17mに復元できる方墳である【上田1999】。濠内からは有黒斑の家形や甲冑形埴輪などの形象埴輪や円筒埴輪が出土した。

誉田御廟山古墳の北側では多くの古墳が認められる。大鳥塚古墳は昭和60年確認調査を実施

し、墳丘長110mの前方後円墳で造出しを持つことなどが判明した。墳丘では野焼き焼成の埴輪が、周濠内では窯窓焼成のものが混在していた。誉田丸山古墳は直径50mの円墳で造り出しを持つ可能性がある。国宝の金



図20 トレンチ位置図 (S = 1:1,000)

銅製竜文透彫鞍金具や幣鏡板、花形座付雲珠などの馬具類、鹿角製刀装具、刀劍類が出土しており、現在誉山八幡宮で保管されている。盾塚古墳は鞍塚古墳・珠金塚古墳とともに昭和30年に主体部が発掘調査され〔末永1991〕、その後、平成4年・7年には建替えに伴い周囲の調査がなされた〔松村1993〕。その結果盾塚古墳は墳丘長73mの造出しを持つ帆立貝形古墳であることが判明した。主体部は粘土層で、木棺の内外に銅鏡、玉類、甲冑や鉄鎌等の武器・武具や多数の農工具が埋葬されており、粘土層の上は漆塗りの盾で覆されていた。鞍塚古墳も墳丘長51mの造出しの付く帆立貝形古墳であることが判明しており、組合せ式木棺を主体部とし、木棺の内外から銅鏡の他、多数の玉類・甲冑・農工具・馬具等が副葬されていた。珠金塚古墳は墳丘の確認調査が実施されていないが、一辺約25mの方墳と推定でき、主体部は粘土層に割竹形木棺を納めた南棺と粘土層に組合せ式木棺を納めた北棺がある。それぞれの施設からは銅鏡や玉類・甲冑・武器・農工具等の副葬品が検出されている。珠金塚西古墳は珠金塚の西側で1988年に確認された埋没古墳〔一瀬1989a〕で一辺30mの方墳に復元できる。今回、珠金塚西古墳よりさらに西側で埋没古墳が検出できた。

なお、今回の調査区の東隣のHJ91-1区では埴輪を含む落ち込みを検出した〔上田1992〕。当時は誉山御廟山古墳の関連遺構と考えていたが、今回の埋没古墳の一部であったと思われる。

このように誉山御廟山古墳周辺には多くの中小古墳が存在するが、現在、誉田丸山古墳、アリ山古墳、東山古墳、栗塚古墳の5墳がその陪塚として考えられている。

調査の経緯

個人住宅の建替えに伴い浄化槽設置予定地に1×2mのトレンチを設定した。その結果、この付近で認められる地山と思われる土が表土のすぐ下で確認できたが、やや濁っていたため、G.L.-1mまで掘削したが、褐色砂疊層及び粘土層が続き、遺構等の確認ができなかつたため、工事の着工を決定した。

しかし、古墳が多く造営されている重要地であり、付近に「狼塚」字名が見られるなどを勘案し、工事中2回の立会い調査を実施した。1回目でいくつかの埴輪片を探集したため、2回目に土層の確認を行った結果、建物基礎掘削溝の断面に樹立している埴輪を確認した。工事施工業者の好意により、その付近を広げて掘削したところ、原位置を留めていると推定できる埴輪底部をいくつか確認したため、遺構は埋没古墳の一部と判断し工事を一時中断するよう指導した。

その後、施主及び施工業者に検出遺構の重要性を説明するとともに保存協議を行い、平成9年9月8日～21日間で基礎掘削及び古墳確認のため75m²の発掘調査を実施した。

なお、当該地は新規発見の古墳と認識し、北側に残る字名から「狼塚古墳」と命名した。

調査成果

立会い調査で確認した原位置を留めている円筒埴輪の周辺を掘削していくと、それが並んだ状況にあることが判明し、埴輪列の検出を実施した。また、形象埴輪群や葺石も一部残存していることが確認できた。これらの状況から、当該地は古墳の造出し部と判断した。なお、残存する埴

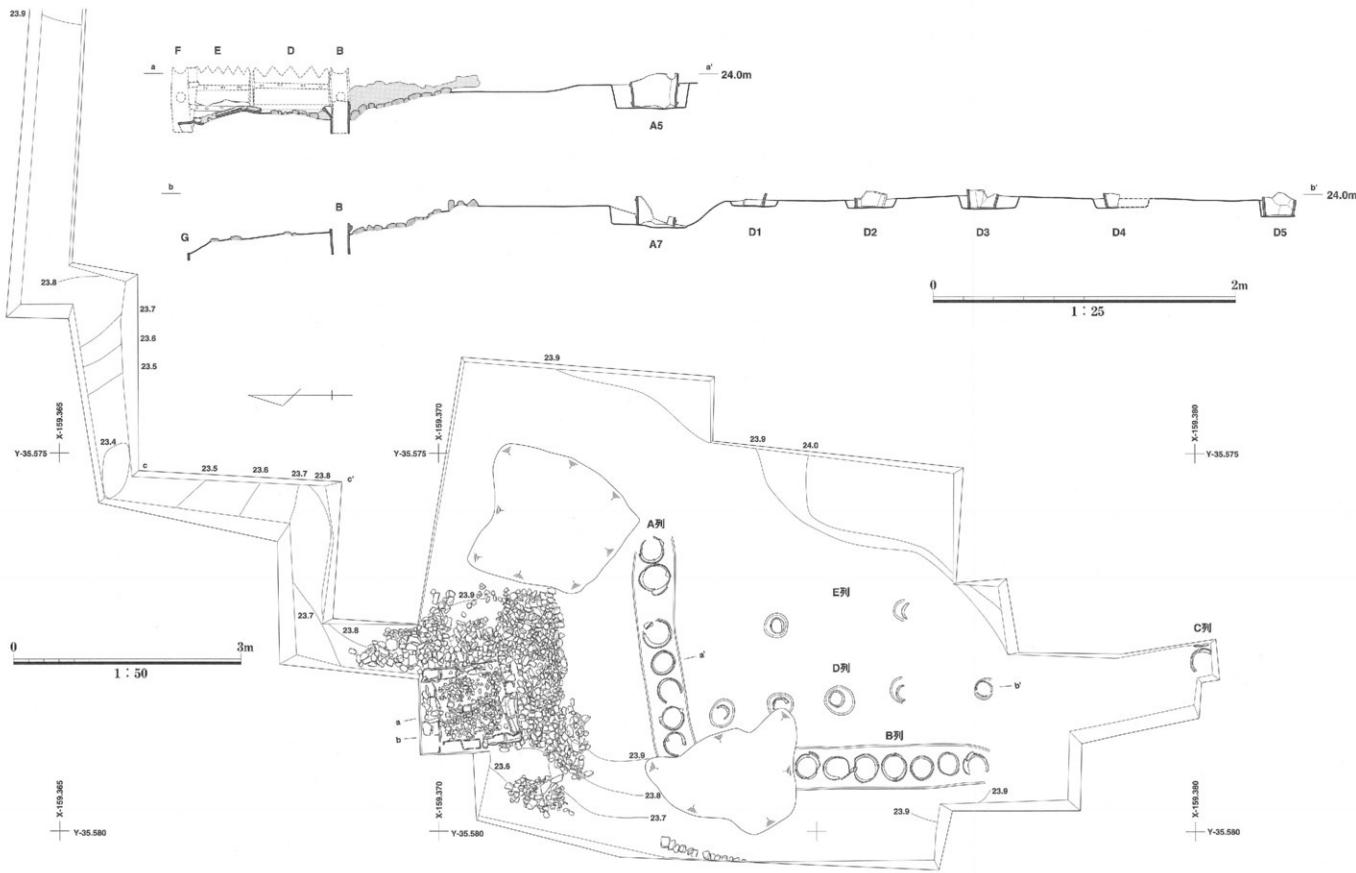


図21 平面・断面・コンター図

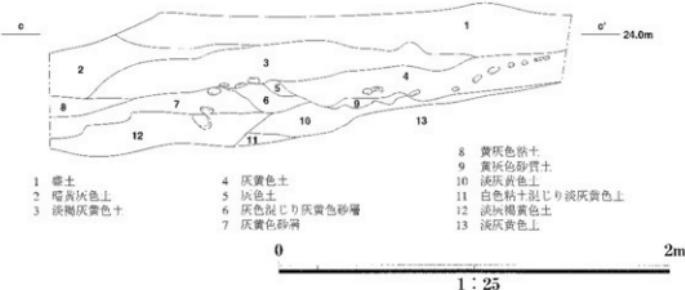


図22 土層断面図

輪列の状況からその平坦面幅は9.6 mに復元できる。

造出し北側の堆積土は大きく4群に分けられる。1群としては盛土・暗黄灰色土(2層)・淡褐黄灰色土(3層)、2群としては北側には砂層の灰黄色砂層(7層)・灰色混じり灰黄色砂層(6層)、南側には灰色土(5層)・黄灰色砂質土(9層)が間に入った灰黄色土(4層)が認められる。7層の上の黄灰色粘土(8層)もこの群に含める。3群としては黄色系土の淡灰黄色土(10層)・白色粘土混じり淡灰黄色土(11層)・淡灰褐色土(12層)がある。これらの下の淡灰黄色土(13層)は葺石転落石を含む層である。これは南側でT.P.23.75 m、北側でT.P.23.4 mと北に向かって下がっている。

遺構

埴輪列

埴輪列は5ヶ所で確認でき、北側の東西方向のものを埴輪列A、南北方向のものを西側から埴輪列B、埴輪列D、埴輪列E、拡張部から検出した埴輪列Aと並行するものを埴輪列Cとした。

また、埴輪列Aの東端から北東方向に個体認識できる程度の円筒埴輪が散乱しており、一部樹立していたものが、倒壊したと考えられるものも存在した。これは墳丘部の埴輪列が倒壊したものと考え、埴輪溜まりとしてとらえた。また、くびれ部付近で形象埴輪が原位置を留めていたほか、葺石上面で多くの埴輪が出土した。

埴輪列A 従30cm前後の円筒埴輪がほぼ東西方向に7本残存していた。これらはすべて底部が樹立前に打ち欠かれており端部は認められなかった。埴輪は幅50 cmの溝状の掘方を穿ち、体部をほぼ接するように立て並べられていた。円筒埴輪は復元すると11本/4 m前後で並んでいる。

これらは埴輪列Bに取り付くコーナー部を除いて復元すると8本、墳丘側の円筒埴輪列に取り付く部分を含めると9本樹立していたと推定できる。残存している円筒埴輪は東側からA1、A2、A4、A5、A6、A7、A8と名付けたが、A3にあたる部分では、破片は認められるものの、原位置を留めているものではなく、円筒埴輪以外のものが樹立していた可能性も考えられる。

掘方の底面レベルはA4～A8はT.P.23.75 mとほぼ揃うが、それより東側ではA2の西では

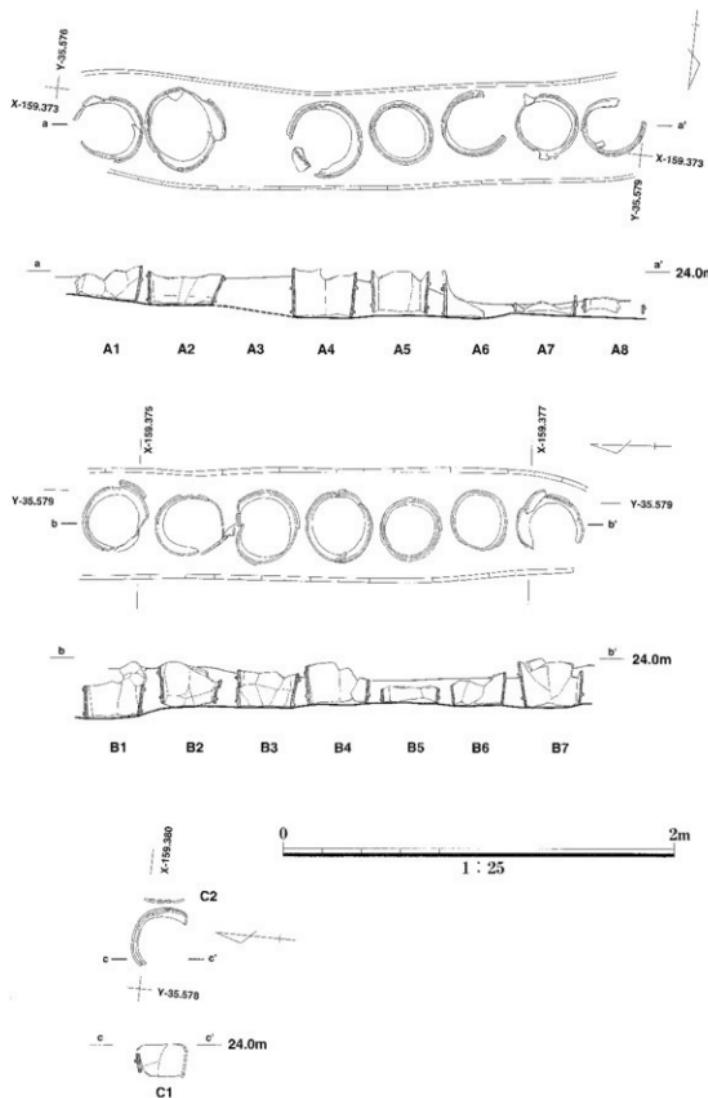


図23 造出し埴輪列A・B・C平面・断面図

T.P.23.84 m、A1 の東では T.P.23.88 m と徐々に上がっており、A1 の東側では認められない。円筒埴輪の上部は不明であるが、円墳部の取り付けに向かってやや上がっている可能性が考えられる。

埴輪列 B 墓輪列 A と同じく径 30 cm 前後の円筒埴輪がほぼ南北方向に北側から B1、B2、B3、B4、B5、B6、B7 の 7 本樹立が残存していた。基部は埴輪列 A 同様すべて打ち欠かれており、端部が認められなかった。円筒埴輪は復元すると埴輪列 A 同様 11 本 / 4m 前後で並んでいる。

幅 57 cm の溝状の掘方を掘削しており、円筒埴輪の中軸間は 35 cm 前後、掘方の底面レベルはほとんどのものが T.P.23.75 m で埴輪列 A と近い。ただ、B1 のみ T.P.23.69 m と深くなっている。

埴輪列 B を構成している埴輪を北端から B-1、B-2 …… B-19 と仮称した。今回検出した

ものは B1 が B-5、B2 が B-6、その後 B3、B4、B5、B6、B7 が各々 B-7、B-8、B-9、B-10、B-11 にあたる。他の埴輪列の位置から考える埴輪列 B は直線ではなく、円弧状もしくはくの字に曲がる状態に配置していたと考えられる。埴輪列 A、埴輪列 E と重複するコーナー部を含め復元すると 19 本が樹立していたと推定できる。

埴輪列 C 径 30 cm 前後の円筒埴輪がほぼ東西方向に C1、C2 の 2 本検出した。

底部は打ち欠かれていた。埴輪列 A と平行しており、同じく 9 本樹立していたと推定できる。東から C-1、C-2 …… C-8 と並んでいるとして、今回検出したものは C-6、C-7 の位置と考えられる。掘方の底面レベルは T.P.23.84 m を測る。

埴輪列 D 径 20 cm 前後の埴輪が南北方向に 5 本確認できた。すべて底部のみの残存で、円形の透孔が穿たれており、形象埴輪の基部の可能性が考えられる。北側から D1、D2、D3、D4、D5 が残存していた。A7 と C1 につながる。埴輪列

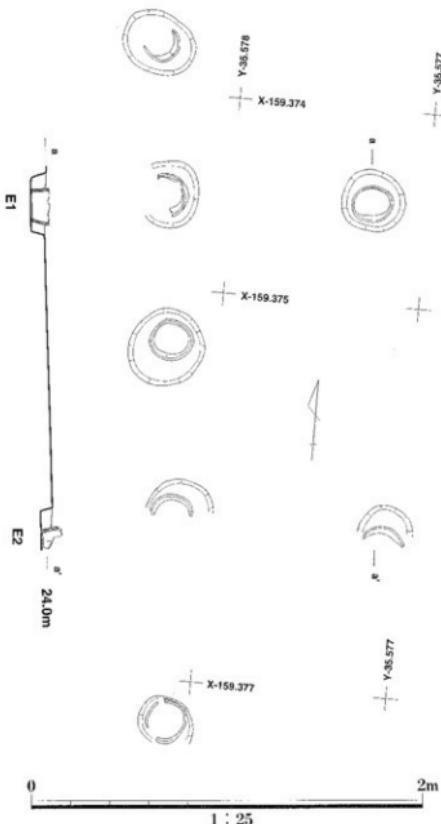


図 24 造出し埴輪列 D・E 平面・断面図

Bに平行しており、イレギュラーな部分を除くと、埴輪列Bのはば1本置きに樹立していたと推定できる。8本樹立していたことになる。北側からD-1、D-2……D-8と並んでいたと仮定すると今回検出したものはD-1、D-2、D-3、D-4、D-5にあたる。

径30~40cmの壠方を掘削し、底面レベルは一番深いD5でT.P.23.85m、他はD1がT.P.23.92m、D4がT.P.23.90mで、北側になるほど高くなっている。ライン上のA7では一段低くT.P.23.76mとなっている。

樹立間隔はA7とD1とが60cm、D1とD2が70cm、D2とD3は75cm、D3とD4が90cm、D4とD5が105cmなので、北側を反転させD5とD6が90cm、D6とD7が75cm、D7とD8が70cm、D8とC1が60cmの間隔だとするとA7とC1の距離7.0mにはほぼ一致する。付近から水鳥形や鶴形の形象埴輪の一部が検出されており、鳥形埴輪列と考えられる。

埴輪列E 壇輪列D同様、径20cm前後の埴輪が底部のみE1、E2の2本確認できた。埴輪列Bと105cmの間隔で平行しており、埴輪列Dの1本置きに樹立していたと考えると、ほぼ南北方向にE-1、E-2、E-3の3本樹立していたことになる。A4とC-4につながると思われる。個々に径30cmの壠方を掘削し、底面はT.P.23.95mで埴輪列Aより浅い。樹立間隔はA4とE1とが1.7m、E1とE2とが1.75mを測る。これらも埴輪列D同様、基部に円形の透孔が穿たれており、形象埴輪列と推定できる。

埴輪溜まり

埴輪列Aと埴輪列Cが平行に8本（埴輪列Bとのコーナー部を入れると9本）並んでいたと仮定し、さらにそれぞれ1本分東に存在したとして円弧を描くと、埴輪列A-1の北東約2mのところに倒壊して残存していた円筒埴輪の基部の位置にはほぼ一致し、その北東方向に円筒埴輪の破片が散乱することなどから、これらが墳丘部の埴輪列から転落したものであると推定した。原位置を留めているものはなかったが、埴輪列Aでは、墳丘部の近くでも円筒埴輪が樹立した状態で検出できたにもかかわらず、そこから先の墳丘推定部では全く残存していないことから、円墳部が一段高くなってしまいその部分に埴輪が樹立されていたと推定したい。A1、A2が他の埴輪列構成埴輪に比較して底面レベルが高くなっていることも傍証になるであろう。

ここから検出した円筒埴輪は径30cm前後で底部から第二段目の突帯まで残存しており、造出しのものとは異なり底部端まで残存していた。他にも底部端の破片が出土しており、墳丘部では底部端を欠かない円筒埴輪を採用した可能性を考えたい。なお、多くの埴輪が出土しており、外面タテハケ調整で終わるものも認められる。

導水施設形埴輪

調査区北西部のくびれ部付近から、形象埴輪が原位置で検出された。造出し北側斜面から約25cm下がったところに平坦部を作り、そこに形象埴輪を埋め込んでいた。当初、部分的な掘削であったため家形埴輪と思われたが、拡張の結果、幅15cm、長さ50cm前後の箱状の埴輪を8個並べ、一辺約1.2mの方形の区画を作っていることが判明し、他に例を見ない組合せ式の图形埴輪と認識した。

图形埴輪を構成する箱形の部位は、個々を横形と呼び、便宜上、南東部のものから反時計回り

にA～Hの名称を付けた（このバーフは柵形A、柵形Bというように表示する）。南西隅の柵形Aから東隣の柵形B、その東側が柵形C（以上南辺）と反時計まわりに、東辺の柵形E、柵形D、北辺の柵形F、柵形G、西辺の柵形H、柵形Aと並ぶ。なお、柵形Aには西側を向いて入口が付けられていた。埴輪列Dの並びからA-7を延長させたところに柵形A、Hを南北に並べ、D、Eは埴輪列Eから埴輪列A-4の延長にはば合わせている。圓形埴輪の配列を詳しく見ると、柵形Aの北側に柵形Hを置き、柵形Hの北側小口に柵形Gの側面をあてる。その東に柵形Fを置き、



図25 くびれ部形象埴輪・葺石平面図

その東側小口に橢形Eの側面を当て、その南側に橢形Dを置く。さらに橢形Dの南側小口に橢形Cの側面を合わせている。

圓形埴輪を埋める際に内側に細砂を入れ上面には玉石を敷いて、その中央部やや北側には構造状の土製品（木槌形埴輪）が置かれていた。木槌形埴輪は槽部と樋部との間で折れていた。圓形埴輪のバーツは基本的に個々の器壁が接しているのに対し、木槌形埴輪の樋部を延長した橢形Fと橢形G間は5cm程度すき間が開いていた。基部の外側には2～3列の石を敷くことによって固定していた。圓形埴輪の中に木槌形埴輪が置かれている状態は、御所市南郷大東遺跡〔青柳編2003〕の導水施設と一致し、今回の形象埴輪群も導水施設形埴輪と総称したい。

なお、圓形埴輪の中央部からは盾形埴輪の破片が出土しており、付近に盾形埴輪が樹立していた可能性が考えられる。

埴輪列AのA5とA6の間と埴輪列CのC5とC6の間をつないだところと、橢形Bと橢形Cの間、橢形Fと橢形Gの間がほぼ一致する。このラインに沿って木槌形埴輪は置かれ、さらに導水施設形埴輪の対角線の交点に木槌形埴輪槽部の南東角を合わせている。

葺石

埴輪列A中軸の1.25m北側にやや大きな川原石を長径を東西にそろえて並べ、そこから葺石がはじまる。残念ながら基底石をはじめとする基底部は検出できなかったが、他の類例から推定すると最低1mの斜面が続くと考えられる。導水施設形埴輪のところでは約25cm下ったところでやや平坦になり、変換点から約30cm、葺石斜面上面から75cmのところに橢形埴輪が置かれていた。導水施設形埴輪の対角線を南東に延長したところに、大きな川原石を縦に積んだ葺石の区画ラインが認められる。これは造出しから円墳部に移行する部分と一致すると思われる。（上田）

遺物

円筒埴輪、形象埴輪が出土し、土器類は認められない。

原位置を留めた円筒埴輪の資料は、全てが造出し部分である。北辺埴輪列（A列）からは7個体、西辺（B列）から7個体、南辺（C列）から2個体、形象埴輪の基台を構成すると考える埴輪列（D列）からは5個体、同じくE列からは2個体の計23個体である。くびれ部からは原位置を留めた8個体の橢形埴輪と1個体の橢形土製品がある。

以上に加え原位置を留めないものの、出土状況から狼塚古墳に伴うと考える資料を含め計113点を報告する。

造出し円筒埴輪A・B・C列（図26～29）

いずれも底部端を留めるものではなく、口縁部まで復元しうるものはない。

黒斑を有するものではなく全て窑窯焼成である。

体部径は30.0～37.0cmを測る。36cmを超えるものはA列の2点（2・3）のみである。A列はこの2点を除くと31～33.5cmの範囲に収まる。B・C列はA列のように36cmを超えるものはなく、31cm前後と、34cm前後に集中する。

体部の形態は直立に立ち上がるものが大半を占め、8や14のように上方に向かってやや広がる

ものを少量含んでいる。

透孔は円形であるが、体部の資料に方形透孔が1点(28)ある。出土状況から4の上部に接合する可能性がある。透孔の位置は、現状で下から2段目にあるもの(2・15・16)と3段目にあるもの(3~5、8~10、14)がある。いずれも底部に近い位置に穿たれた透孔と考えられる。応神陵古墳出土の円筒埴輪では底部を含めて3段目に穿たれることを参考とするならば、2段目に透孔をもつ3点(2・15・16)は底部1段目を完全に欠いていることになる。そうであれば設置に際して埴輪列のU縁部高を揃えることが必要となるが、出土状況からそういう工夫は確認できない。このことから最も下段に穿たれた透孔の位置は、応神陵古墳出土例のように3段目には統一されず、底部から2段目もしくは3段目であったことがいえるであろう。

突帯は2のように方形で突出度の高いものが多い。他に方形ではあるが断面が「M」字状を呈し、やや低いものもある(1・4・6・7・11)。突出度(突帯の器壁からの高さ÷器壁との接合部幅×100)は35~73、平均は52である。

突帯間隔(下段突帯上端面から上段突帯の上端面までの間隔)の平均は12cmである。最も幅狭いものは6の11.3cm、幅広いものは5の12.8cmを測り、突帯間隔において著しい差は認められない。

外面の二次調整は観察可能な個体の全てがBb種ヨコハケである[一瀬1988]。この内、条痕の残らない板工具を横方向に施すものが2点(6・11)ある。この場合も工具は突帯間を一周の施文で充足することができず二周している。Bb種ヨコハケは突帯の下方から上方へ施すことが一般的であるが、同一個体内でも突帯間によっては、これが逆転し上方から下方へ施すものが認められる(8・9)。

ヨコハケ原体幅は6~7cmの範囲にお

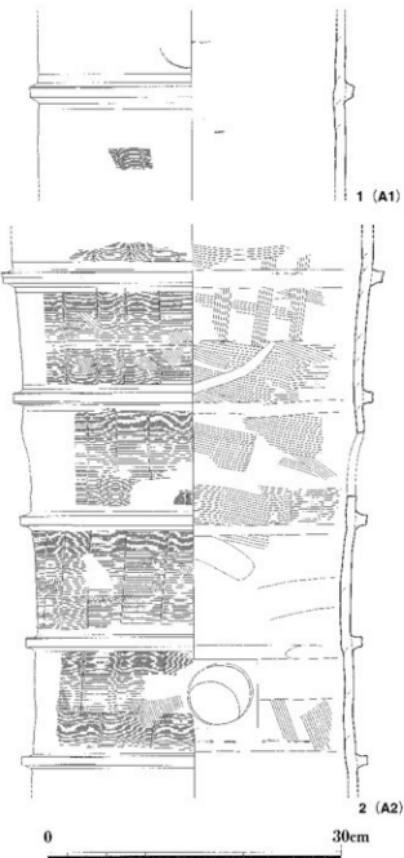


図26 造出し埴輪列A円筒埴輪実測図(1)

さまり、まとまりが認められる。6.5 cm前後に集中する。

静止痕間隔は3~5 cmを測るが、突帯間に明瞭な痕跡を残すものは少なく、突帯に近い部分で認められることが多い。それは器壁が均一ではなく、突帯間中央部で窪むことからヨコハケ工具が器壁に当たらない状況を示している。そのため、窪んだ中央部分には一次調整のタテハケを多く残す結果となっている(2・3・10・16)。

静止痕の角度は突帯に対して垂直になるものと、やや傾くものがあり、同一個体であっても底部により近い方が傾く傾向にある。例えば2・4の静止痕角度は下から2段目ではやや傾くものの、その上段では垂直に施されている。また2では下から3段目以上では上下の静止痕位置や角度を突帯間で揃えており、視覚的にBc種を指向しようとする例であるといえよう。



図27 造出し埴輪列A円筒埴輪実測図(2)

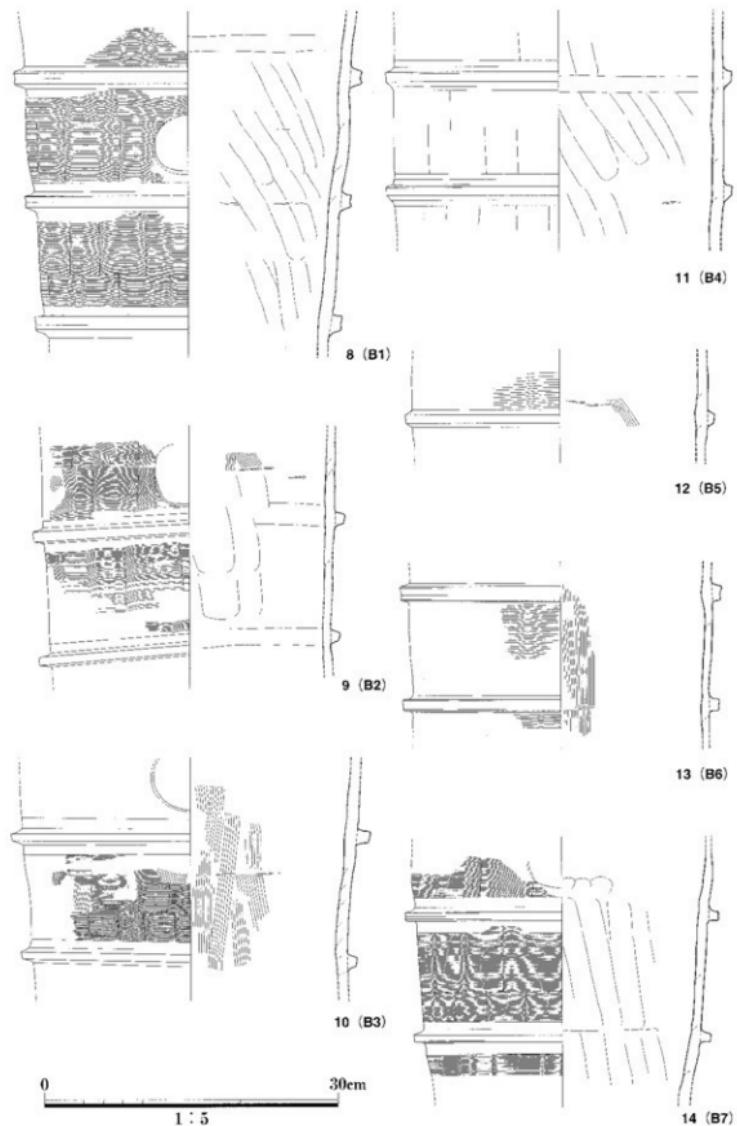


図28 造出し埴輪列B円筒埴輪実測図

原体条数は多くが5~9条の範囲にあり、最も密なもので12条(10)がある。

内面調整は全体に丁寧なナデ調整を施すもの(8・11・14)と、縦・横方向のハケ調整を施すもの(3・10・16)がある。ハケ調整した後にナデ調整を加えるもの(2・9・15)もある。内面のハケ原体幅を確認することはできないが、原体条数は4~6条とヨコハケに比べて粗い傾向にある。

造出し円筒埴輪D・E列(図29)

形象埴輪の基台を構成する円筒部である。出土状況から鶴、水鳥形埴輪の基台と考えられるが、

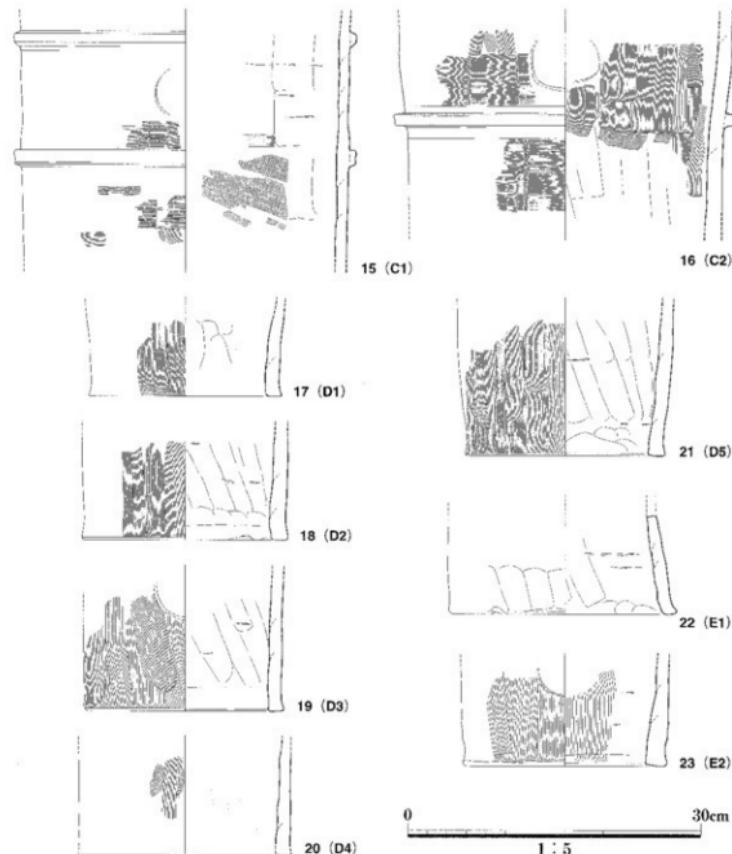


図29 造出し埴輪列C・D・E円筒埴輪実測図

接合するものがなく特定することはできない。19・22はやや梢円形気味で、底部径は前者が短径20、長径21cm、後者は短径18.1、長径23.3cmである。他の5点は19.6~21.8cmを測る。

黒斑を有するものはないが、焼成が堅敏というほどではないものが2点(18・19)ある。

透孔を確認できるのは3点(19・22・23)で円形である。この内19と22は梢円形の短径側に透孔があり、底部の梢円形態が鳥形埴輪の体部の形態を反映するなら、透孔は側面ではなく正面に穿たれていた可能性がある。

また、透孔を確認できる3点を出土状況に照らし合わせると、透孔の向く方向に違いが認められる。19・23は南北方向に、22は東西方向に位置する。このことから、透孔の方向の違いは鳥形埴輪の設置方向が異なっていたことを示している可能性がある。ただし、これらの円筒部が鳥形埴輪ではなく、別の形象埴輪の基台であった可能性も考慮する必要があるだろう。

形態は底部端から垂直に立ち上がるもの(18~20・22)、底部端がふんばりハの字形になり、やや広がりながら立ち上がるもの(17・21・23)がある。

外面調整は縦方向にハケ調整し、ハケ条数は6~13条で上記した円筒埴輪に使用された原体より密である。

内面はナデ調整するものが多く、縦方向のハケ調整を施すものが1点(23)ある。

造出し、他出土の円筒・朝顔形埴輪(図30・31)

円筒埴輪には口縁部、体部、底部それぞれの資料がある。いずれも黒斑ではなく窑窯焼成である。口縁部を留めるものを14点(24~27、32~41)図化した。口縁部径を復元した4点の内3点(24~26)は39.0~40.0cmを測り、出土状況から24はB列の、25はA列のいずれかの円筒埴輪の口縁部を構成するものと考えられる。口縁部径を復元することができなかつた10点(32~41)についてもA列、またはB列の円筒埴輪の口縁部を構成するものと考える。26は体部の資料(29)と同一個体の可能性があり、底部の資料(31)とともに円墳部テラスに樹立された埴輪列の可能性がある。

口縁部の形態は、直立気味になるものと、ゆるやかに外反するものに大別できる。前者には、端部まで垂直気味に立ち上がるもの(32~34)、断面逆「L」字形に折れ曲がり水平方向に矧く聞くもの(24・25・35・36・38)、端部近くでゆるやかに聞くもの(37)がある。後者には、全体に外彎するもの(26・39・40)、端部近くで外彎するもの(41)がある。これらの外面調整は縦方向のハケを施すもの(32・37)、B種ヨコハケが観察されるもの(25・26・35・40・41)がある。

この他に唯一、口縁部に貼付突帯をもつ27は、口縁部径52.6cmを測る。外面調整はBb種ヨコハケであるが、ハケの静止痕を下上で掘えておりBc種かのようである。法量的に大きなことから埴輪列の要所に樹立していたものかもしれない。

体部の資料は2点ある。28には方形透孔があり、上記したように4の上部である可能性がある。体部径32.2cmを測り、突帯は方形で突出度は52と高い。外面調整はBb種ヨコハケで、原体幅は約7cmを測り4の原体幅とも合う。29は口縁部の資料26と同一個体の可能性がある。体部径は31.2cm、突帯は台形で突出度は50である。円形の透孔がある。外面調整はB種ヨコハケである。

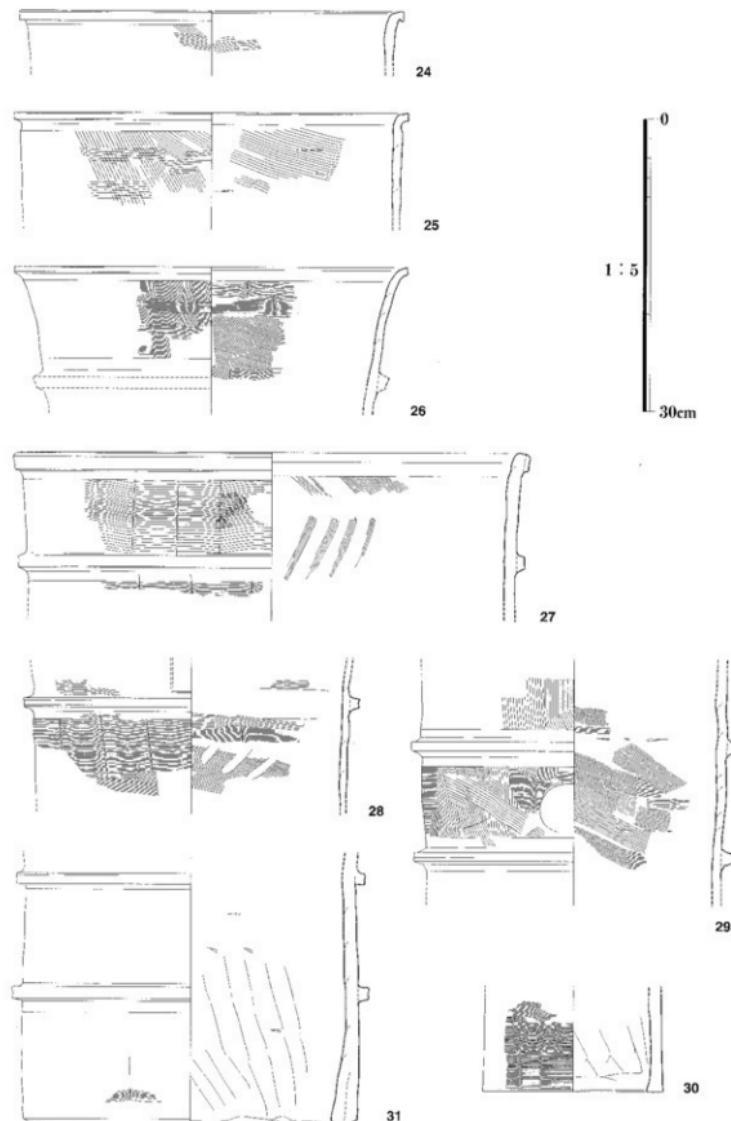


図30 造出し、他出土円筒埴輪実測図

が、器面に凹凸があるためヨコハケを均一に当てることができず一次調整のタテハケを多く残している。

底部の資料は2点ある。30は底部径18.5cmを測り、法量的にみて形象埴輪の基部であろう。外而調整はB種ヨコハケが観察されるが静止痕は不明瞭である。31は底部径34.2cm、底部端は厚く、2.5cmを測る。突帯は方形で、突出度は63と高い。外面調整は条痕の残らないヨコハケを施している。上記した26・29とともに円墳部テラスに樹立されていた可能性はあるものの、そうであれば唯一底部が残存する資料である。しかし造出し部にあった埴輪列とは胎土や器壁の厚み等の点に違いが認められ、本墳を構成する埴輪ではない可能性も残る。

朝顔形埴輪の出土は少なく4点を図化したにすぎない。全て窓窓焼成である。口縁部(42)は外反し端部で垂直な面をもつ。外面面ともに横方向のハケ調整を施す。肩曲部は3点あるが、径を復元できたのは45のみで、34cmを測る。いずれも肩曲部には突出度の高い突帯を貼付ける。44は器壁が厚く、径を復元するには至らなかったが、かなり大きくなるものと思われる。

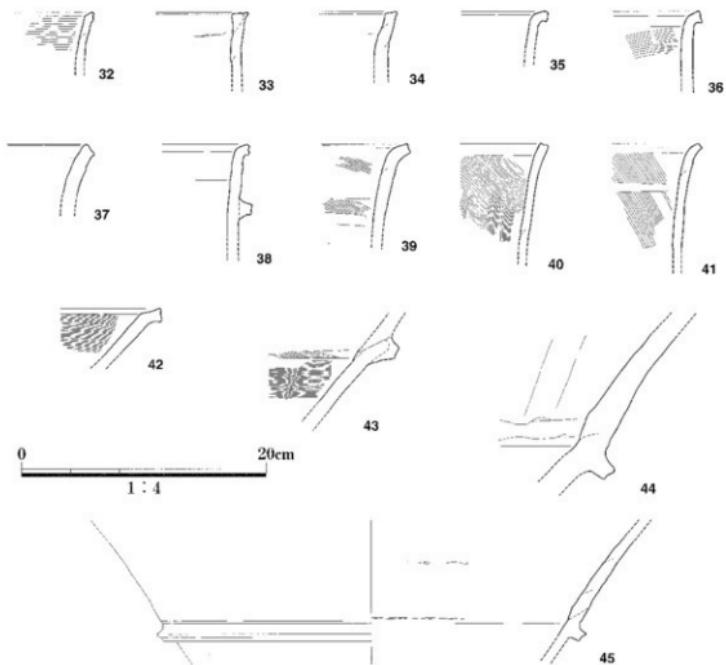


図31 造出し、他出土円筒・朝顔形埴輪実測図

造出し出土の形象埴輪（図32～34）

46～48は盾形埴輪である。46・48の焼成は堅緻、47はややあまい。46は円筒部との接合部分が残る。盾面は直線的で、外面には粗いハケ調整が施されるのみで無文である。47は綾杉文によって画された内側に鋸歯文を線刻している。48は厚さ1cmを測る。盾面は直線的で、綾杉文で画された外側に鋸歯文を線刻する。

49は弧状を呈する線刻が二条認められる。鞍形埴輪になるのであろうか。黒斑が認められる。

50は厚さ平均1.6cmを測る板状で、器種は不明である。弧状を呈する綾杉文が線刻される。また綾杉文が途絶える部分から粘土を足して、ゆるやかな段をなす。最大で0.8cmを測るその高まりは、綾杉文と同様に弧をなす。外面はヘラケズリの後にナデ調整、内面は指によるナデ調整で

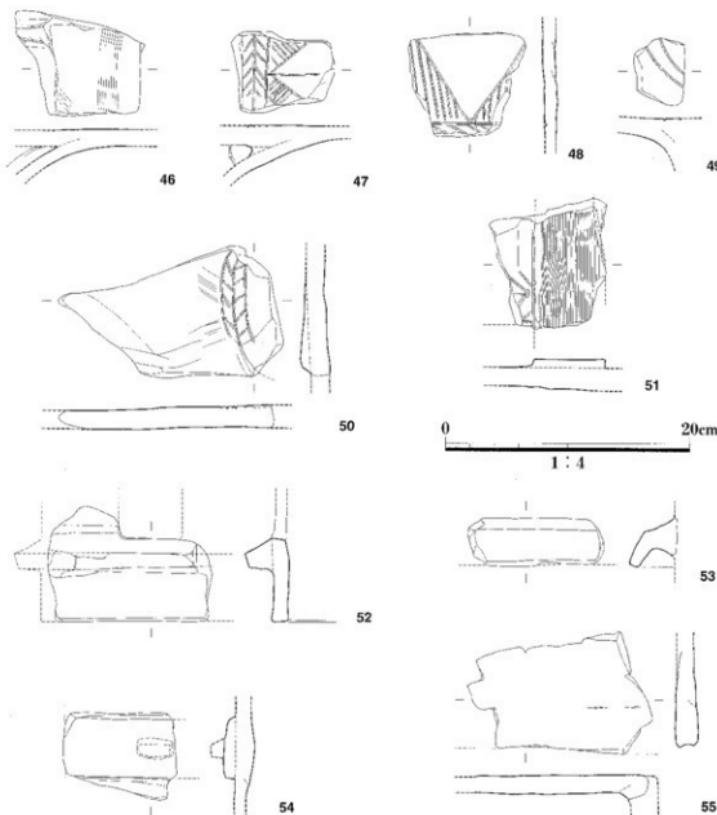


図32 造出し出土形象埴輪実測図

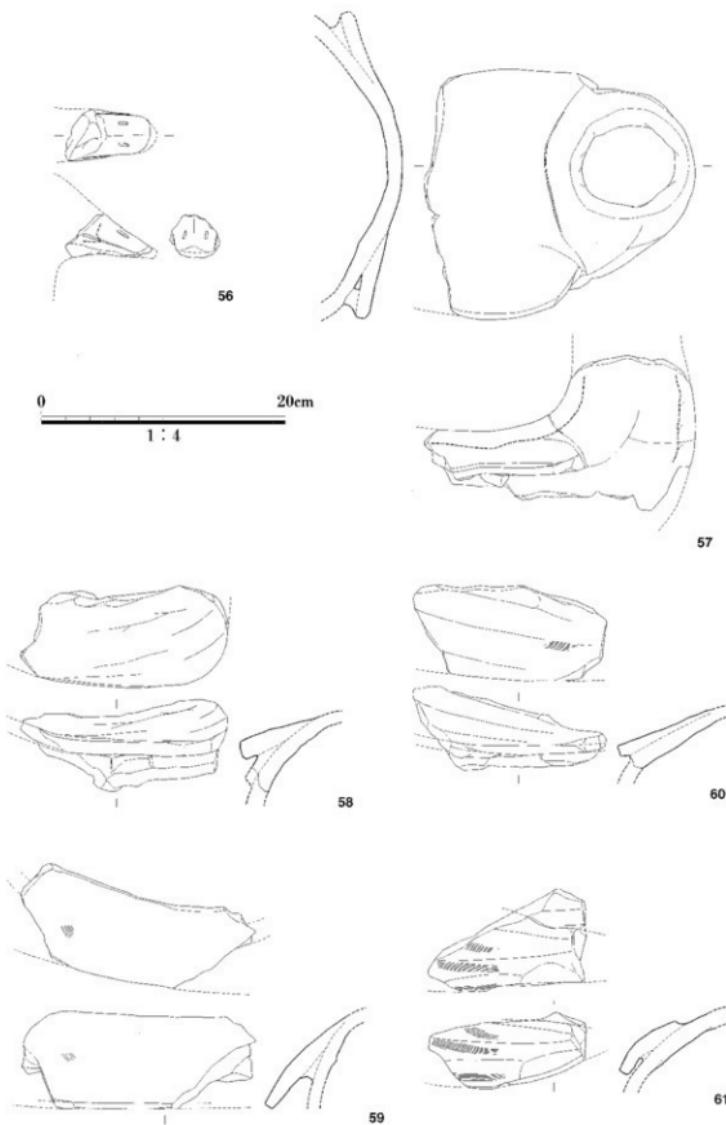


図33 造出し出土鳥形埴輪実測図 (1)

ある。焼成は良好ではあるが、断面は黒色をなす。

51は家形埴輪であろうか。厚さ1.5cmを測る板状に、幅5.5cm、厚み1cmの突帯を貼付ける。家形埴輪であるなら柱の表現であろう。また突帯近くに刺突があり、そこから放射状に伸びる線刻が認められる。また線刻の下方には切取りがあり開口部であろう。突帯外面は横方向の細かなハケ調整、内面はナデ調整を施す。焼成は良好ではあるが、断面は黒色を呈する。

52・53は家形埴輪である。52は基部でコーナー部にある。隅柱は約6cmで、幅5cmの開口部を設けている。また幅約2cmの突帯を巡らしている。53は屈曲した突帯をもつものである。

54・55は柵形埴輪と考える。54は柵形埴輪の帯状突帯部分で、器壁の厚みは1.5cmと厚い。左端がコーナー部になる。帯状突帯の幅は4.8cm、厚みは1cmあり、その上面には突起が剥落した痕跡がある。55は底部で右側がコーナー部である。風化が著しく調整は不明である。54・55は

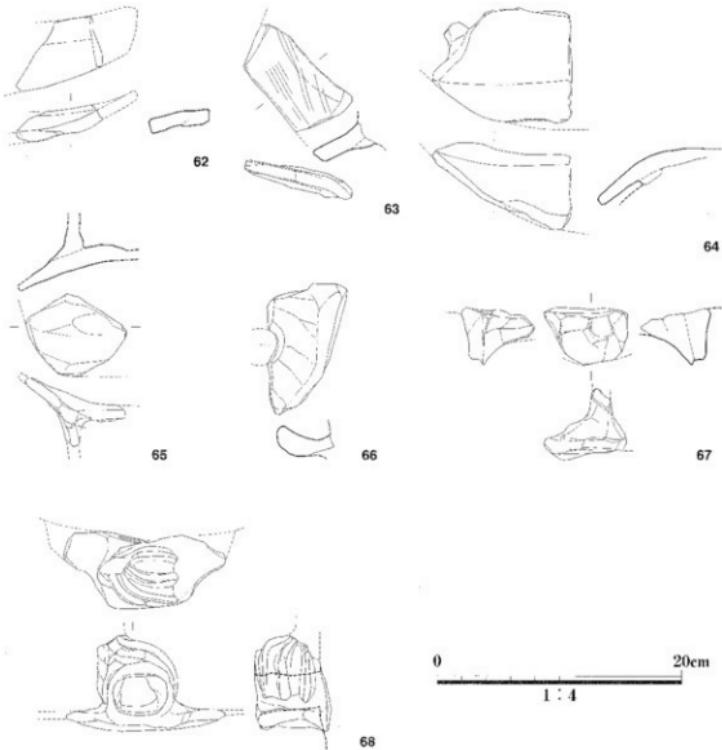


図34 造出しう出土鳥形埴輪実測図(2)

以下で述べる橢形埴輪8点の何れとも異なることから、別個体の橢形埴輪が存在していた可能性を示す資料でもある。

56～68は埴輪列D・E周辺から出土した鳥形埴輪である。このうち68は鶴形、他は全て水鳥形埴輪と考えられる。焼成は全てにおいて良好ではあるが、68の鶴形を除く水鳥形埴輪は堅緻というほどではなく、断面が黒色を呈するものが多い。水鳥形埴輪の胎上は小石を含むものの、おむね精良である。

56は嘴部分である。平たい嘴は水鳥に特徴的である。

57は体部から頭部に続く部分である。体部と主翼の隙間は粘土塊で接着し補強している。外面には体部と頭部の境に弧状を呈する線刻がある。内面は指によるナデで平滑に仕上げ、外面全体は丁寧なナデ調整である。

58～61は体部から続く主翼部分である。主翼の形態はいずれも異なることから、水鳥形埴輪は少なくとも5個体はあったと考えられる。58・60は外面を指によるナデで平滑に仕上げている。59は丸みを帯びる主翼部で、外面は丁寧なナデ調整である。61は主翼部に丁寧なハケ調整を行っている。主翼部外縁は58がやや丸みを帯びるもの、他の3点はシャープな面をもっている。内面はいずれも丁寧な指によるナデ調整である。

62・63は風切羽の部分と考える。外縁はシャープに仕上げられている。62の外面は丁寧なナデ調整、63は粗いハケ調整の後に外縁に沿ってナデを施している。

64は主翼部の風切羽に近い部分と考える。主翼外縁はシャープな面をもつ。外面調整は丁寧なナデである。

65は尾羽を表現すると考える。外面は丁寧な指によるナデ調整である。

66は透孔があり、肛門部である。丁寧な指によるナデ調整がみられる。

67は円筒部の突帯にのせている脚部である。指を明確に形作ってはおらず、縦方向のナデを施すことによって判別できる程度である。

68は鶴の脚部である。前3本と後1本の指で止まり木にとまる姿を表現している。指の表現は明確で、67の水鳥形埴輪の脚部が曖昧な作りとは対照的である。

くびれ部出土の形象埴輪

原位置を留めた橢形埴輪8点と楕形土製品1点の他に橢形埴輪の破片、盾形埴輪の破片がある。

橢形埴輪（図36～51） 楕形埴輪の8点は残存状態に違いがあり簡単に比較はできないものの、法量や形態で大きくは共通しているといえる。記述にあたりこれらの橢形埴輪に大きく共通する項目を取り上げ模式化し、以下で使用する各部名称を図35に示した。便宜上、楕形土製品を向く側を内側とし、右側と左側の使い分けは外側から見たものとする。

全体の傾向は底部長は42.5～52cm、底部幅は8～

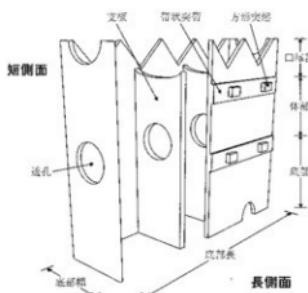


図35 楕形埴輪各部名称

14.5cmを測る箱形で平面長方形を呈する。器高が判明するものは少ないものの、45cmを超えない程度に描えていた可能性は高い。また形態においても口縁頂部を鋸歯状に仕上げる点、長側面に二条の帯状突帯をもって3段に構成する点、方形突起を貼付ける点、短側面に円形の透孔を穿つ点、箱形内部に支板を設ける点などで大きさは共通している。また、外面の一部には赤色顔料の痕跡が認められることから、本来は外面全体に塗布されていたであろう。焼成は良好ではあるものの、黒斑が認められるものが3点ある。大きな差異が認められる点は底部にあり、二対になる割り込みを設けるもの、割り込みがなく透孔をもつもの、あるいはそれらを全くもたないもの等がある。

ある程度の規格をもつと考えられるこれらの横形埴輪は、短側面を接するように2個体を並べて一辺とし、四辺で楕形上製品を囲む。それは8個体を組合わせて横状のもので空間を囲んだ施設を表現しているといえる。

この中にあって69には開口部があり、この施設の出入口を表すと考える。開口部は両方の長側面にあり、一对になるかのようにほぼ位置を揃えて開けられている。開口部の幅は外長側面で7.3cm、内長側面は9.3cmと後者がやや幅広く、両者とも外側から見て中心よりやや右寄りに開けられる。底部から開口部下端までの距離は外長側面と内長側面で約1cmの違いがあり、内長側面の方が低い位置にある。一对をなす開口部ではあるが、外長側面と内長側面では装飾に大きな差

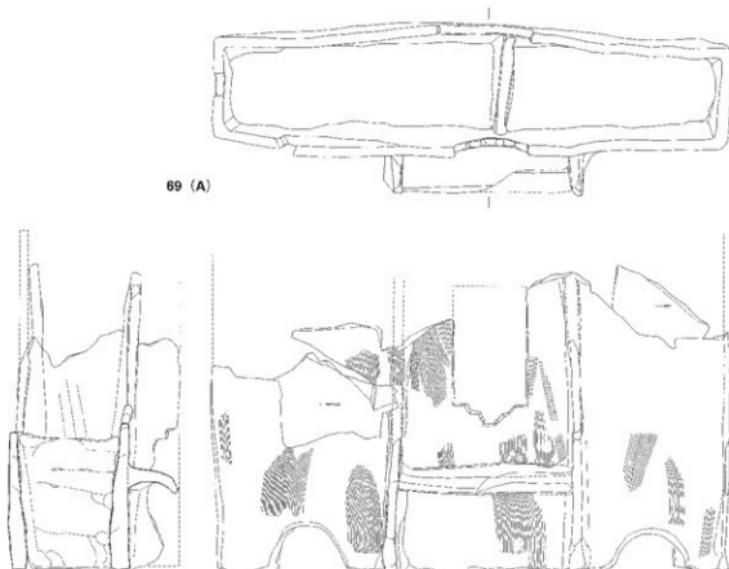


図36 くびれ部出土横形埴輪実測図 A (1)

いがある。まず開口部そのものは、外長側面では下端に刷り込みを入れて階段状をなすが、内長側面にはそれらしい細工は施されず直線的である。また外長側面開口部の長辺側両脇には鱗状とした突帯が垂直方向に取り付く。この鱗状突帯は底部から直線的に立ち上がり、現況では23.5cmの高さまで残存するが、その上部に剥離した痕跡があることから、開口部の長辺に併行して取り付いていたことが分かる。鱗状突帯は厚み約1cm、幅約4~4.5cmである。さらに開口部より下4cmの位置には、左右の鱗の間を渡すように底部と併行して水平方向に粘土板が取り付く。この粘土板は幅5cmを測り、先端が逆「L」字形に屈曲する。こういった裝飾は扉構えの構造材を表現するものと思われるが、内長側面開口部には一切認められない。以上のように両長側面には開口部とそれに附隨して外長側面に扉構えを表現する装飾的なものはあるものの、他7点に取り付く帶状突帯は認められない。

さて開口部上端は欠損しているため、口縁部の形態とともに情報に乏しい。開口部の高さは現状で外長側面は13.7cm、内長側面では9.6cmである。ここで出土状況や胎土、色調から同一個体と考えられる破片(79)がある。それは開口部の左辺を表現すると考えられるもので、僅かではあるが左上隅コーナーを確認することができる。これには外長側面開口部に取り付く鱗状突帯の痕跡が認められず、外面をナデ調整する点は内長側面に特徴的であることから、79は内長側面開口部のものと考えられる。内長側面開口部とこの破片(79)は直接には接合できないことを勘案して復元すると、開口部の高さは少なくとも21cmを見積ることができる。さらに底部から開口部上端までの推定高は約35cmとなり、器高が45cmを超えないとするなら開口部上端より10cm程

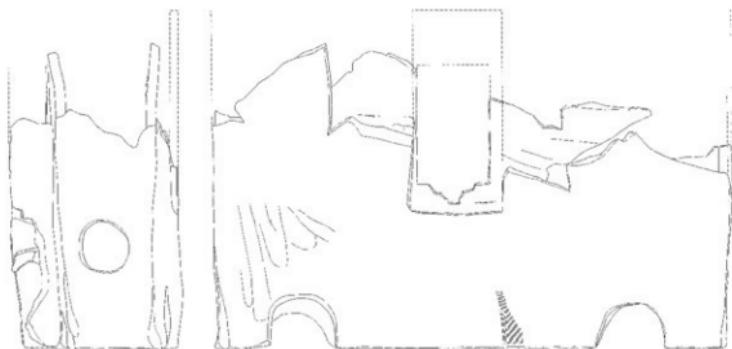


図37 くびれ部出土柵形埴輪実測図A (2)

で口縁端部に至ることになる。

さらに開口部上辺を推測できる破片(78)がある。内面に支板と考えられる粘土板が取り付き、下辺が直線をなすものである。下辺の直線部分は端面を形作ることから底部とは考え難く、開口部の上辺ではないかと考えたのである。外表面は風化が著しく69の外面調整に特徴的なハケを78に確認することはできないが、同一個体とするならば外長側面の開口部上辺になろう。図面の開口部推定線は、口縁部まで残存する資料(70・72・74)の口縁部高をもとに復元したものである。開口部の推定高は約14cm、底部から開口部上端までの推定高は約29cmとなり、内長側面の開口部上端の推定線より低い。

I口縁頂部は鋸歯状の形態を呈すると考えられるが、破片からも該当するものは見当たらない。唯一、69周辺から出土する80が鋸歯状の形態をなすが、胎土、色調、器壁の厚みなどから同一個体とするには難しい。また80の三角形は他の鋸歯に比べて小さく、69に附随すると考えるなら口縁部を構成する鋸歯ではなく、開口部上端の装飾的なものであるかもしれない。

69周辺から出土する破片は上記以外にも5点(81~85)ある。後述もするが、81~83は外長側面開口部脇に取り付く鱗状突帯であると考える。84~85は色調、胎土等の点で鋸歯状を呈する

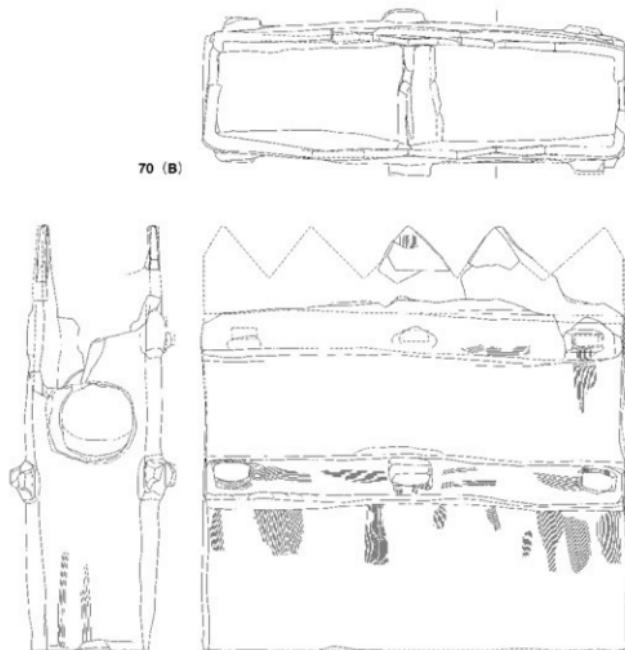


図38 くぎれ部出土楕形埴輪実測図B(1)

80と似通っており、これら3点が69と同一個体と考えるならば上記したように開口部上端、もしくはその周辺に附隨する装飾的なものであろう。

以上は開口部をもつ69のみに認められる特異な部分である。平面長方形の箱形という形態は他の7点と共通する。法量は底部長51.5cm、底部幅10cm、現状での高さ31.3cmを測る。底部長が50cmを超える個体は他に2点(71・76)あるがともに底部幅は11cm以上であることから、69は底部長の割には底部幅が狭いといえる。

平面形は四隅の角を作り出し直線的であるが、開口部付近でややふくらむ。開口部の鱗状突帯を含めた最大幅は17.5cmである。器壁の厚みは底部で約2cm、上部では平均1cmである。

両長側面の底部にはやや大きめの半円形の削り込みを二対、両短側面では円形の透孔を穿つ。短側面の透孔は右側では底部から上に8cm、左側では11cmにあり、70・73・74に比べて底部に近い位置にある。また透孔の大きさは直径約5cmと小振りである。

支板は一つで、外長側面開口部のほぼ中心に位置する。支板が比較的良好に残る70や72をみると、底部から口縁部付近まで取り付き上端は弧状を呈している。しかし69の支板は口縁部まで続かず、開口部下端のラインで終えており、その上端は弧状ではなく平坦である。他の7点で

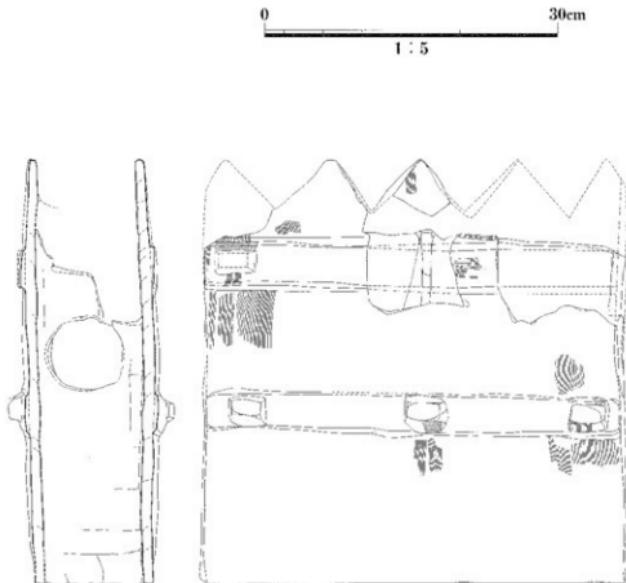


図39 くびれ部出土柵形埴輪実測図B (2)

は必ず開けられる透孔も見られない。厚みは1.2~1.5cm、粘土紐の痕跡はあるものの丁寧なナデ調整を施している。

外面の全体的な調整は細かなハケである。内側長侧面及び両短侧面では丁寧なナデ調整が目立つ。全体に赤色顔料が観察され、胎土は精良である。

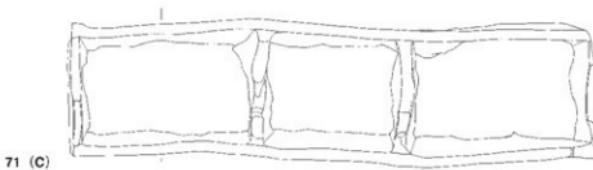
70は底部から口縁部までが残存する。底部長42.5cm、底部幅10cm、器高43.5cmを測る。底部長は8点中で最も短いものの、底部幅は69と同様である。器壁の厚みは0.9~1.2cmである。平面形は四隅の角を作り直線的であるが、支板の取り付く長側面中央付近でややふくらむ。底部高19.8cm、体部高15cm、口縁部高8.7cmである。

両長側面は幅3.5~4cm、厚さ約0.5cmを測る二条の帯状突帯によって3段に構成される。帯状突帯の位置は外・内長側面ともにはば揃う。さらに帯状突帯には方形突起が3個ずつ貼付けられる。中央に一つ、小口近くに一つずつ配置し、ほぼ等間隔である。方形突起の基部幅は4cm前後、突出面も約3cmあり72~75に比べて大きいが、突出高は1cm程度と幅に対してやや低平で、突出度（突起の器壁からの高さ÷器壁との接合部幅×100）の平均は25である。

両長側面に割り込みや透孔は認められない。8点の内で長側面に割り込みや透孔をもたないのはこの1点のみである。

両短側面には直径8~8.5cmの比較的大きな円形の透孔が穿たれる。透孔の位置は右側では底部から上に21.5cm、左側では19cmにあり、長側面に貼付けられる二条の帯状突帯の間にある。

支板は一つで、ほぼ中央に位置する。底部付近で歪み、厚さは1.5cmを測る。その上方ではほぼ直線的に伸び、厚みは約1cmである。支板の上端は欠損しているが、口縁の内面端部より約3cm下にその痕跡が認められる。72の支板の上端と同様な形態になると考えられる。支板には直径



71 (C)

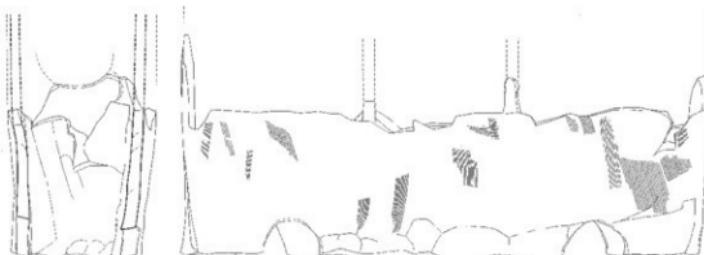


図40 くびれ部出土楕形埴輪実測図C (1)

7~7.5cmを測る大きめの透孔が穿たれる。その位置は支板の中央より上方である。調整は丁寧なナデを施すものの粘土紐を消しきれずに残り、その痕跡が長側面を構成する粘土紐の位置と一致することから、支板は長側面と共に製作されたと考えられる。

口縁頂部の鋸歯状を呈する三角形の一辺は約7.5cm、底辺約10cmで、残存状況から復元すると一つの長側面に対して5個を配置していたと考えられる。

外面は細かなハケ調整（ハケ条数9~10条/cm）である。ハケ調整は帯状突帯の上面、さらに方形突起の基部にまで及ぶ。

胎土は細かな小石を含むが精良で、外面には赤色顔料が観察される。

71は底部長52.0cm、底部幅11.5cm、現存高22.8cmである。底部長の点では8点中もっとも長く、底部幅は75に次いで2番目に広い。器壁の厚みは底部で1.5cm、その上部では1cm程度である。

平面形は四隅の角が角張り直線的である。両長側面には帯状突帯が取り付くものと考えられるが、その高さまで残存していない。

両長側面の底部には並な半円形の割り込みが二対、両短側面では円形の透孔が開けられる。

支板は2つで中央気味に位置し、それぞれに円形の透孔が穿たれる。厚みは底部で2.5cm、その上部では1.2cmである。

調整は外面全体をハケ調整（ハケ条数8~9条/cm）する。両長側面の底部近くはナデ調整が目立ち、小口に近い部分では角を作るためであろうか、ケズリの痕跡が認められる。

口縁部の形態は不明であるものの、71周辺から出土する三角形を呈する破片が8点（86~93）ある。これらのうち86~92の7点は同一個体と考えられるが、71に附随するものは不明である。試みに71とこれらの破片を復元すると、一つの長側面に鋸歯状の三角形は6個を想定することができる。



図41 くびれ部出土柵形埴輪実測図C (2)

胎土は細かな小石を含み、外面には赤色顔料が観察される。

72は口縁部が残存する資料である。底部端は剥離しているが、残存の状態から45cm以上の高さには復元できないものと考える。底部上で長さは49.5cm、幅は8cmを測り、8点中でもっとも幅せまい。器壁の厚みは平均1.2cmである。平面形は直線的ではあるものの、四隅は丸みを帯びている。底部高は復元で19.3cm、体部高は14.2cm、口縁部高は11.5cmを測る。

両長側面は幅3.3~4.3cm、厚さ0.7cmを測る二条の帯状突帯でもって3段に構成される。それぞれの帯状突帯には4つの方形突起が配置される。中央の方形突起2つはやや距離をもち、小口側は等間隔に配置される。外・内長側面ともに、これらの方形突起は上下の帯で位置をほぼ揃えている。方形突起の基部幅は2.5cm前後で、突出面は小さい。突出高は約1.3cmあり、70の方形突起に比べると、幅狭いものの突出度の平均は52と高い。

長側面底部のほぼ中央には直径約6cmに復元できる円形の透孔が穿たれる。その位置は中央に配置される二つの方形突起との間である。内側長側面は底部の多くを欠損するため透孔を確認することはできないが、外側と同様に円形の透孔があったであろう。長側面に一つの透孔を配するのは、8点の内この資料のみである。

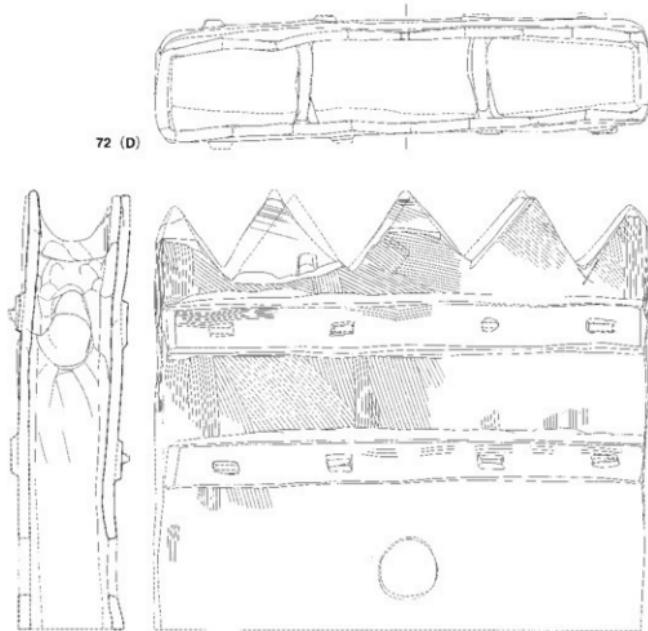


図42 くびれ部出土横形埴輪実測図D(1)

両短側面には直径約6cmの透孔が穿たれる。透孔の位置は長側面に貼付ける2段目の帯状突帯の高さに開けられる。70・73・74では1段目と2段目の帯状突帯の間に位置するが、それに比べると上位にある。また上端面は半円形の弧状を呈する。

支板は2つではなく等間隔に位置する。それぞれの支板には板中央より上位の位置に円形の透孔がある。それより下部を欠損するものの、その痕跡は底部にまで及んでいる。支板上部は口縁部内面から下に約5cm前後の位置に取り付け、上端はゆるやかな弧状を描く。

口縁部には鋸歯状をなす三角形を5つ配置する。中央の3つは一边9~11cm、底辺は11~13cmを測る二等辺三角形状で、70・74に比べて大きい。これら中央にある3つの口縁端部の高さはほぼ揃う。対して、小口側にある2つは底辺約7cmの直角三角形状をなし、その躍部の高さは中央に配置される3つより1.5cm下で揃えている。また外長側面に認められる交差する線刻は、鋸歯状に割り出すためのレイアウト線と考えられる。

外面は粗いハケ調整（ハケ条数4条/cm）を継・斜方向に施す。帯状突帯ではそれよりも粗い横方向のハケが認められ、板状のもので押圧したのちにナデ調整したと考えられる。内面は全体をナデ調整するが、口縁端部の一部には粗い斜方向のハケ調整が見られる。

胎土は小石を多く含み、赤色顔料が認められる。極一部に黒斑が観察される。

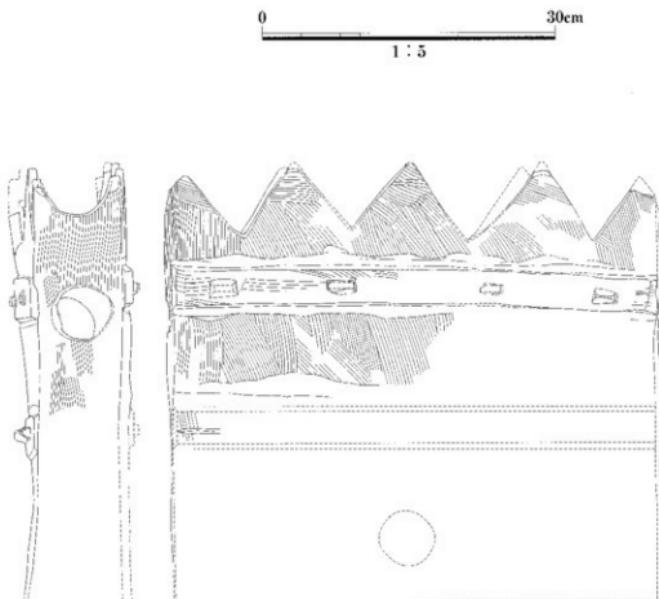


図43 くびれ部出土橢形埴輪実測図D(2)

73は底部長44.0cm、底部幅9.5cm、残存高35.8cmを測る。器壁の厚みは底部で1.5cm、その上方では1~1.5cmである。平面形は長圓面中央でややふくらみ、四隅は丸みを帯びる。底部高19.4cm、体部高13.6cmである。

両長側面は幅3~3.8cm、厚み約0.8cmを測る二条の帯状突帯によって3段に構成される。帯状突帯には4つの方形突起がほぼ等間隔で配置されるが、上下の位置で揃わない。方形突起の基部幅は2.8~4cmで、大きさにはバラつきがある。突出高は1.2cm、突出度は30~42である。

長圓面底部には直径約6cmを測る円形の透孔を二対穿つ。二対の透孔を配するのはこの一例のみである。

短側面には底部から20cmの上方に円形の透孔を配する。

支板は1つで中央に位置する。底部はやや歪み、厚みは2cm、その上方では直線的に立ち上がり、厚みは平均1.2cmである。また底部より17cm上方に5.5×8cmの歪な透孔が穿たれる。

口縁部の形態は不明であるが、出土状況から8点(95~102)の破片が復元の候補になる。これら8点はいずれも三角形をなし色調や胎土、ハケ調整、器壁の厚みなどの点で73と同一個体の

73 (E)

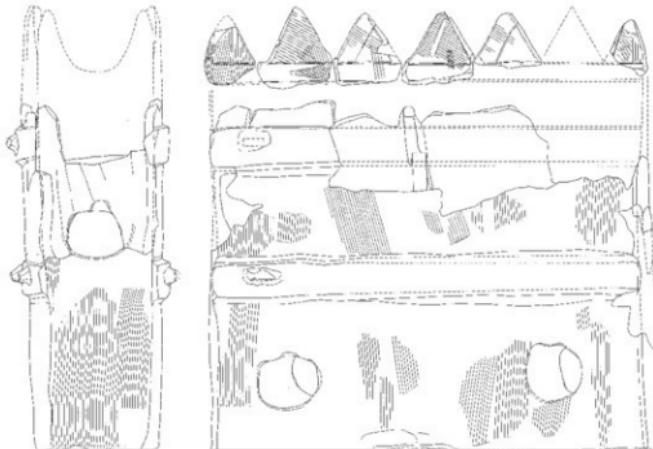


図44 くびれ部出土桐形埴輪実測図 E (1)

可能性がある。ただし95~100は横方向の線刻が特徴的であるのに対して、101には認められない。また101には口縁外面端部に横方向のナデ調整が観察されるのに対して、95~100には認められない。73には線刻は認められないので、線刻を有する95~100の6点を別個体と考えても他の個体とも符合するものはない。仮にこれら全ての破片を73の口縁部を構成する鋸歯とするなら、線刻を有するものとそうでないものは、一つの個体の中で外長側面と内長側面とで使い分けられていたと考えることも可能である。ここでは線刻を有する95~100を外長側面とし、線刻をもたない101を内長側面として仮定し実測図に推定復元を試みた。その根拠としては101の鋸歯のうち右側に位置する鋸歯の裏面に支板の痕跡があり、これを元に外長側面に復元すると器高が高くなりすぎてしまうからである。この復元案からは外・内長側面ともに鋸歯の三角形は7個に復元が可能である。また外長側面に復元した鋸歯は横方向の線刻を根拠に配置すると、両小口側の口縁端部は中央に位置する口縁端部の高さより約1cm下の位置に取り付くこととなり、72の口縁部形態に似る。

外面は縱方向主体のハケ調整（ハケ条数4条/cm）、内面は支板とともに縦方向のナデ調整である。

胎土には小石を多く含み、外面には赤色顔料が観察される。

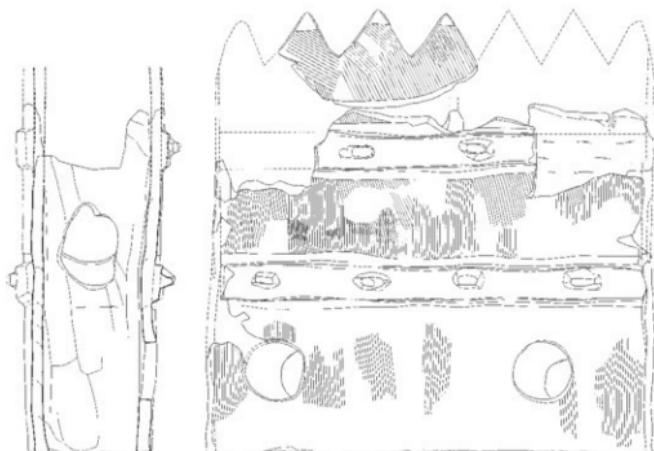
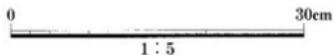


図45 くびれ部出土橢形壺輪実測図E(2)

74は底部から口縁部までが残存する。底部長43.0cm、底部幅9.5cm、器高42.6cmを測る。底部長、底部幅はともに2番目に小さい。平面形は直線的ではあるものの底部より垂み、全体に大きく垂んでいる。四隅は丸みを帯びている。底部高19.2cm、体部高14.4cm、口縁部高9cmである。

両長側面は幅2.8~3.6cm、厚さ約0.4cmを測る二条の帶状突帯でもって3段に構成される。方形突起は3個ずつ貼付けられる。中央の方形突起は長側面のほぼ真中に位置し、小口側の2つとは等間隔である。また上下で位置が揃い、外長側面と内長側面でもほぼ揃う。方形突起の基部幅は2.6~3.9cm、突出高は約2cm、突出度は51~76でもっとも高い。

両長側面の底部には半円形の削り込みが二対聞けられる。また縦方向に5条の線刻が観察される。線刻は底部端、または底部近くから帶状突帯を超えて体部に及び、内長側面ではさらに口縁部まで伸びているのが観察できるが、外長側面の口縁部には認められない。線刻の間隔は7~9.5cmである。線刻は帶状突帯および方形突起を切っていることから、最終段階に施されたことが分かる。

口縁部は鋸歯状で三角形の一辺は約6cm、底辺は約8cmである。現況から鋸歯の三角形は6個に復元が可能で、線刻の条数と一致する。そうすると両小口の形態は72にあるような直角三角形として復元するには無理があり、中央に配されるような二等辺三角形を想定するほうが自然で

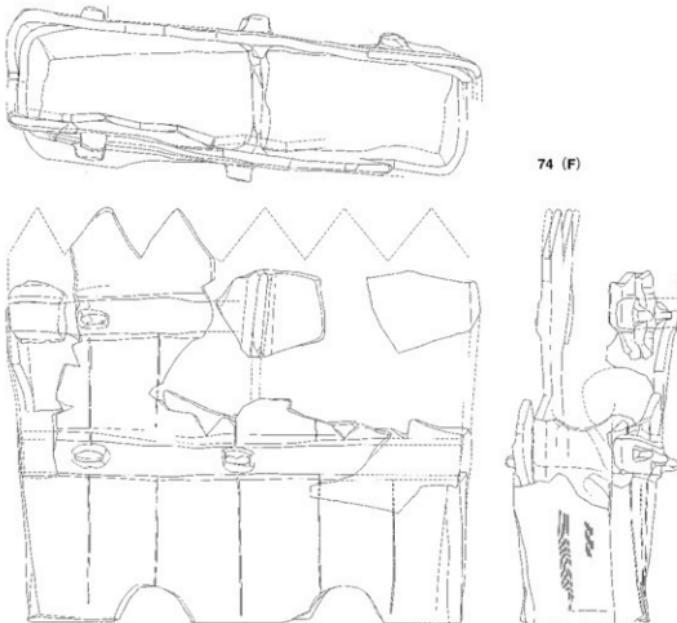


図46 くびれ部出土楕形埴輪実測図F(1)

であろう。

短側面には円形の透孔がある。透孔の位置は底部から 19 cm の上方にあり、長側面に貼付けられる二条の帯状突帯の間である。

支板は 1 つではほ中央に位置する。底部から 20 cm の位置に円形の透孔を穿つ。

外面には細かなハケ調整（ハケ条数 10 条/cm）が見られるが、多くの部分をナデ調整している。赤色顔料が観察される。

75 は底部長 43.5 cm、底部幅 14.5 cm である。底部幅は 8 点中でもっとも幅広い。器壁の厚みは約 1.2 cm である。平面形は直線的で、四隅の角を作る。

長側面には幅広の帯状突帯がある。その幅は 5.3 ~ 5.6 cm と他の 4 点（70・72 ~ 74）に比べて幅広いものの、厚さは 0.5 cm 前後と低平である。また帯状突帯の縁は角を作りシャープで、他の 4 点とは明確な差異が認められる。また、1 段目の帯状突帯の上面の位置は底部から 20.4 cm にある。他の 4 点でも 20 cm 近くに位置することを考えると、底部高は帯状突帯の幅に関係なく個体を超えて安定しているといえる。2 段目の帯状突帯を含む体部から口縁部下端までの破片は直接には接合できないが、以上のことから体部高も安定していたと考えられること、器高が 45 cm を超えるものがないことなどから復元図化した。推定残存高は 38.6 cm である。

方形突起は他に比べて大きく基部幅 3 ~ 3.5 cm、突出高は約 1 cm、突出度 29 ~ 33 である。それ

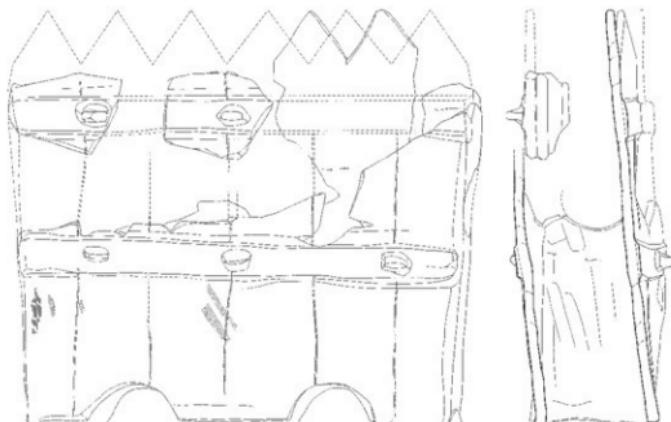


図 47 くびれ部出土桐形埴輪実測図 F (2)

それの方形突起には3個の方形突起が配置されたと考える。長側面の底部にはやや低平な半円形の切り込みが二対開けられる。また縦方向の線刻がある。底部から帶状突帯を越えて体部にわたり、さらに2段目の帶状突帯も越えて口縁部に続いている。線刻は4条であったと考えられるが、同じく線刻を有する74と異なる点は線刻の条数だけではなく方形容起との位置にある。74の方形容起は線刻の延長線上に位置するが、75ではその延長線上から離れて配置している。線刻はこの縦方向に加えて、横方向の梯子状が認められる。梯子状の線刻は幅1.5cmで2段目帶状突帯から2cm上にあり、突帯と併行する。これらの線刻はハケ調整を切っていることから最終段階に施されたと考えられる。

口縁部の形態は不明である。75周辺から出土する三角形状を呈する破片(103~109)はあるものの色調、胎土、調整等の点から同一個体である可能性は低い。そこで縦方向に4条の線刻があることから考えると、口縁部の鋸歯は5個であった可能性がある。また外長側面の左側小口は角度をもって内に傾くことから、両小口の鋸歯形態は74で復元したような二等辺三角形になる可能性がある。

短側面には円形の透孔を穿ち、上面は半円形の弧状をなす。

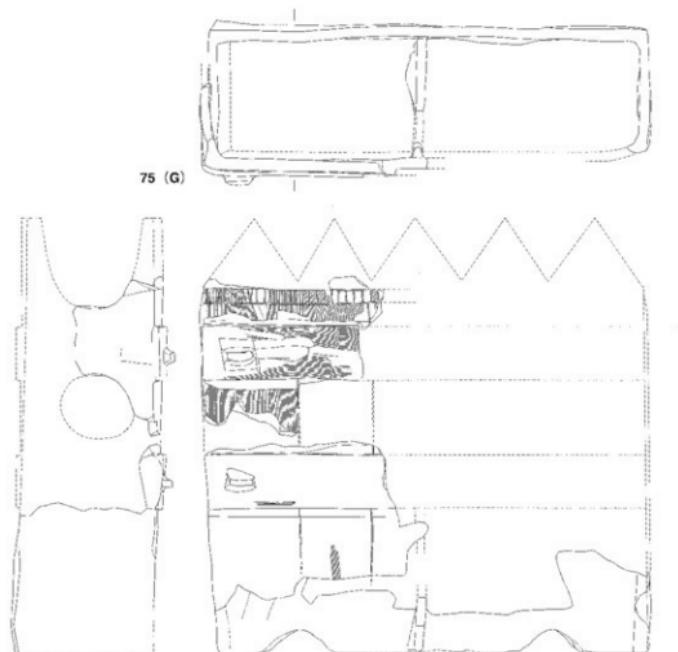


図48 くびれ部出土壺形埴輪実測図G(1)

支板は1つではば中央に位置する。

外面は縦方向のハケ調整（ハケ条数8条/cm）を施し、帯状突帯には横方向のハケ調整が見られる。

胎土は小石を多く含む。外面には赤色顔料が観察され、極一部に黒斑が認められる。

76は底部長51cm、底部幅11cm、残存高17.3cmである。平面形は直線的であるが、四隅は丸みをおびる。

両長側面の底部には半円形の切り込みを二対穿つが、両長側面ともに左右で大きさが違う。帯状突帯は現状では見られないが、底部から15cm上にナデ調整があり、帯状突帯を貼付ける際の痕跡であると考える。

支板は1つで中央よりやや偏って取り付く。

外面は横方向のハケ調整（ハケ条数8条/cm）で、内面は縦方向のナデ調整である。外面には赤色顔料が観察され、一部には黒斑が認められる。

桶形土製品（図52-77） 長さ28.7cm、幅10.4cm、高さ3.8cmを測る土製品である。断面逆台形を呈する掘り込みは内法長10.5cm、内法幅8.7cm、深さ2.2cmを測る。溝部分は断面方形で、内法長16.8cm、内法幅2cm、深さ1.6cmである。製作方法としては掘り込みを形作る槽部分と溝を

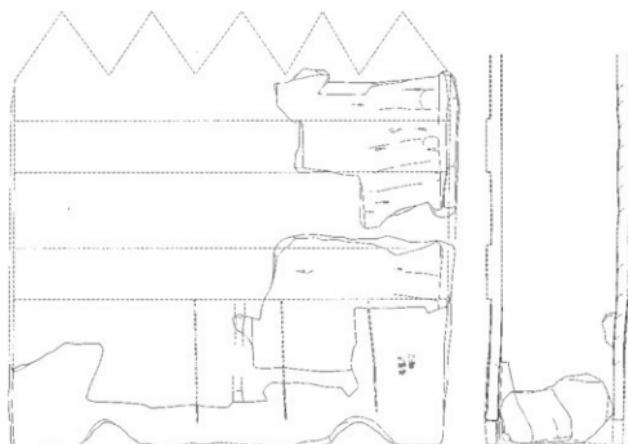
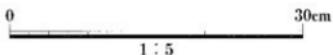


図49 くびれ部出土桶形埴輪実測図G(2)

形作る桶部分を接合し、その連結部に粘土を足して一体とする。桶部分は粘土を削り出して溝を作ると、槽部に連結する側の溝底は深さ1cm、溝端では1.6cmで緩やかな傾斜をもつ。また、槽部底と連結する側の溝部底では1.2cmの比高差となる。

調整は外面全体を丁寧なナデ調整、底面および槽・桶部分の側面はケズリを施し面をなす。胎土は小石を少量含むものの精良である。焼成は良好ではあるが、ややあまく、断面は黒色を呈する。外面全体、および底部にまで赤色顔料が認められる。

くびれ部周辺出土の形象埴輪(図53・54) 78~85は69周辺から出土した。前述したように、78は69の外側開口部上辺の可能性がある。79は胎土や色調などから内側開口部の左辺、81~83は外側開口部の両脇に取り付く鱗状突帯であると考える。80・84・85は胎土や色調の点で69とは異なるものの、これら3点は同一個体の可能性がある。80は一辺約3.5cm、底辺約4.5cmの二等辺三角形状と底辺約3.5cmの直角三角形状をなす。左端は破面であることから同じような二等辺三角形が連続して鋸歯状を呈すると考えられる。厚みは最大で0.9cmと薄く69の口縁頂部を構成する鋸歯とは考え難い。84は厚み1cmを測る板状で、左端面は別のものに取り付いていたようである。下端の弧状は透孔と考えられ、支板のようなものであるかもしれない。85は片側面に小さな三角形状の切り込みを入れるものである。頂部には剥がれた痕跡があるものの全体にどういった形態になるのかは不明である。80・84・85の3点は69に附隨する装飾的なものか、もしくは別個体の橢形埴輪の存在を示す可能性を残している。

86~94の9点は71周辺から出土した。前述したように86~92の7点は同一個体と考えられるが、71に附隨するかどうかは不明である。86~93は鋸歯状口縁を構成する三角形状の破片である。一辺8cm前後の三角形状で、92は右側小口に取り付くものである。93は継方向にハケ調整



図50 くびれ部出土橢形埴輪実測図H(1)

を施すもので、いずれの楕形埴輪にも該当するものはない。94は全体に弧を描く破片で、一方は片口をなすかのような形状をもち、もう一方は擬口縁状である。この擬口縁に取り付きそうな破片は認められないが、全体が弧状を呈すること、わずかに片口状をなすことから導水の送水口のようなものかもしれない。その際、この擬口縁に取り付くものは土製品だけではなく、木製品を想定してもよいかもしれない。

95～102の8点は73周辺から出土した。前述したように8点は同一個体と考えられる。95～100の6点には線刻が認められる。このうち上辺に沿った斜方向の線刻は三角形に削り出す際のレイアウト線と考えられる。横方向の線刻は併行して二条あり、その間隔は1.8～2cmである。

103～109は75周辺から出土し、色調、胎土、調整などの点から75と同一個体とは考え難い。

110・111は76周辺から出土した方形突起である。基部幅3.5cm、突出面幅も2.5cm前後ある。突出高は約1cmである。

112・113は楕形埴輪中央付近から出土した盾形埴輪である。112は盾面部分で線刻による菱形文が描かれる。厚みは1cmを測り盾面の中央、内区部分であると考えられる。113は盾面が剥落している。円筒部と盾面を支える突帯部分である。内外面ともにナデ調整である。2点ともに窖焼成である。

遺物小結

円筒埴輪 造出し部の円筒埴輪は全てが底部端を欠くものの、以下に述べるように共通した特徴を認める事ができる。全体形態を窺えるものはないが、少なくとも6段以上で構成され、底部より2段目、もしくは3段目に円形透孔を配するものである（一部、体部に方形透孔の可能性）。口縁部径は39～40cm、体部径は30～37cmである。口縁部の形態は、貼付突帯をもつものはな

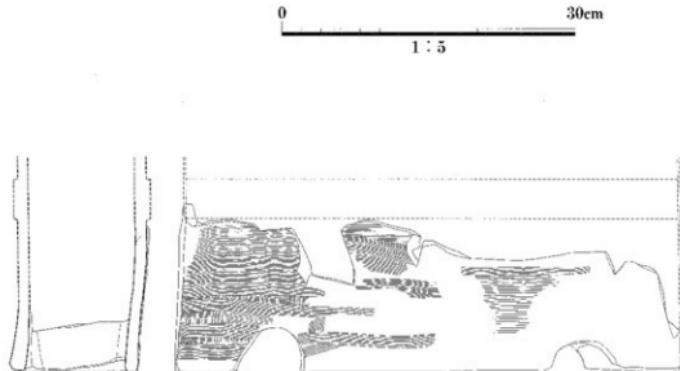


図51 くびれ部出土楕形埴輪実測図 H (2)

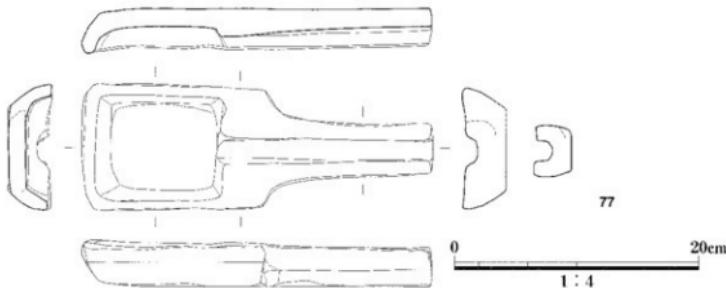


図52 くびれ部出土埴形土製品実測図

く、直立気味になるもの、ゆるやかに外反するものに限られる。体部の形態は直立に立ち上がるものが大半を占める。突帯は方形で突出度の高いものが多く、突帯間隔の平均は12cmである。外面の二次調整はBb種ヨコハケで、ヨコハケ原体幅は6.5cm前後である。黒斑を有するものではなく窯窓焼成である。

以上の形態、及び諸特徴から、比較が可能な資料としては応神陵古墳出土例【一瀬1981・1988・1989a】をあげることができる。まず法量の点では、応神陵例は口縁部径30~56cm、体部径36~42cmで本例がやや小さい。形態では体部が直立気味に立ち上がる点で共通しているが、口縁部の形態は応神陵例が受口状の貼付突帯であるのに対して、本例ではこの形態はまったくみられない。突帯は応神陵例が基本的に断面台形で突出度はあまり高くないのに対して、本例は断面方形で突出度も高い。突帯間隔は応神陵例が11cm前後、本例では12cmとやや広い。外面の二次調整は応神陵例がBa~Bc種ヨコハケ、本例はBb種ヨコハケである。焼成に関しては両例とも窯窓焼成である。

以上のことから体部の全体形態や焼成において、両例は共通することが認められる。異なる点は口縁部や突帯の形態、突帯間隔、外面二次調整で、本例にやや古い様相をみることができる。

さらに古市古墳群での相対的な位置関係を検討するにあたり、外面調整であるB種ヨコハケに注目したい。本例以外にBb種ヨコハケを主体とする資料としては西墓山古墳をあげることができる。西墓山古墳出土例は応神陵古墳に先行し、川西の円筒埴輪編年【川西1978】では第Ⅲ期の最も新しいところに位置する【川村1997a】。B種ヨコハケの推移は突帯間隔と密接に関係しており、ヨコハケ原体幅も考慮することで細かな編年の指標になりうることを以前に指摘した【川村1997b】。さて西墓山古墳例と本例はBb種ヨコハケの点では共通するものの、突帯間隔、ヨコハケの原体幅において違いが認められる。西墓山例での突帯間隔は10.9~12.9cm、平均は12.2cmである。本例は11.3~12.8cm、平均は12cmで、西墓山例とは著しい違いはないものの、まとまりが認められる。さらにヨコハケ原体幅では西墓山例は5~6cm、本例は6~7cmで6.5cm前後に集中している。つまり突帯間隔がまとまり、ヨコハケ原体幅を幅広くする傾向を本例に見いだすことができる。それはまさにBb種からBc種への移行期と捉えることができるのである。した

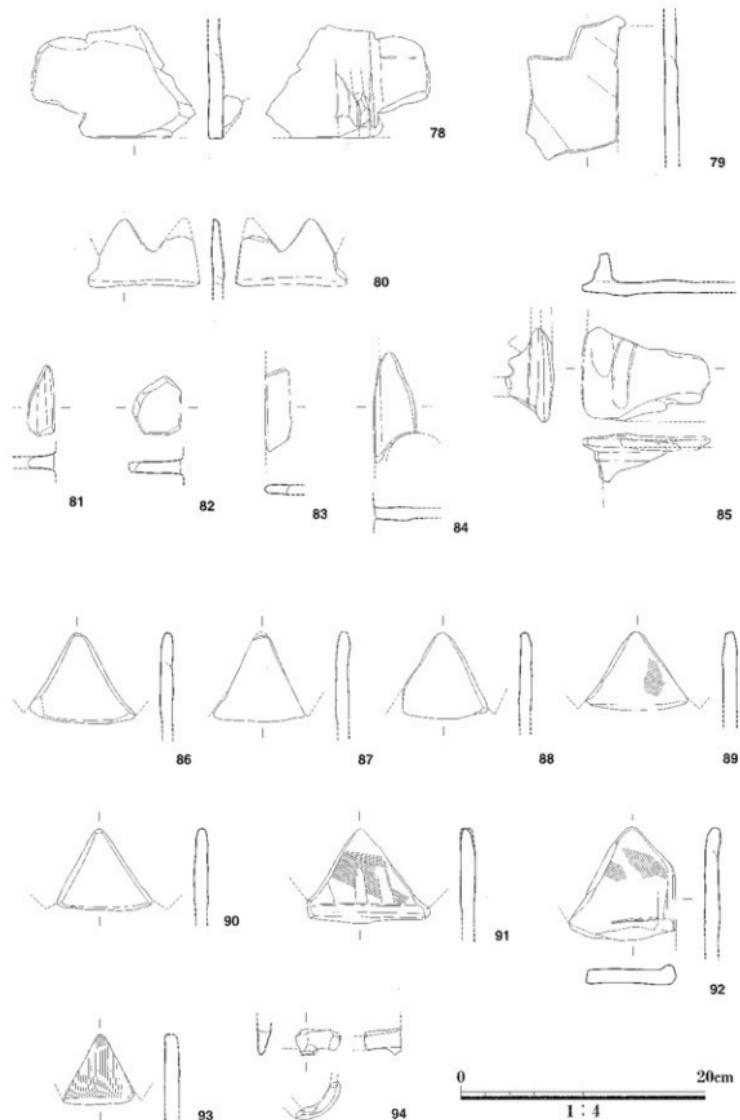


図53 くびれ部周辺出土形象埴輪実測図(1)

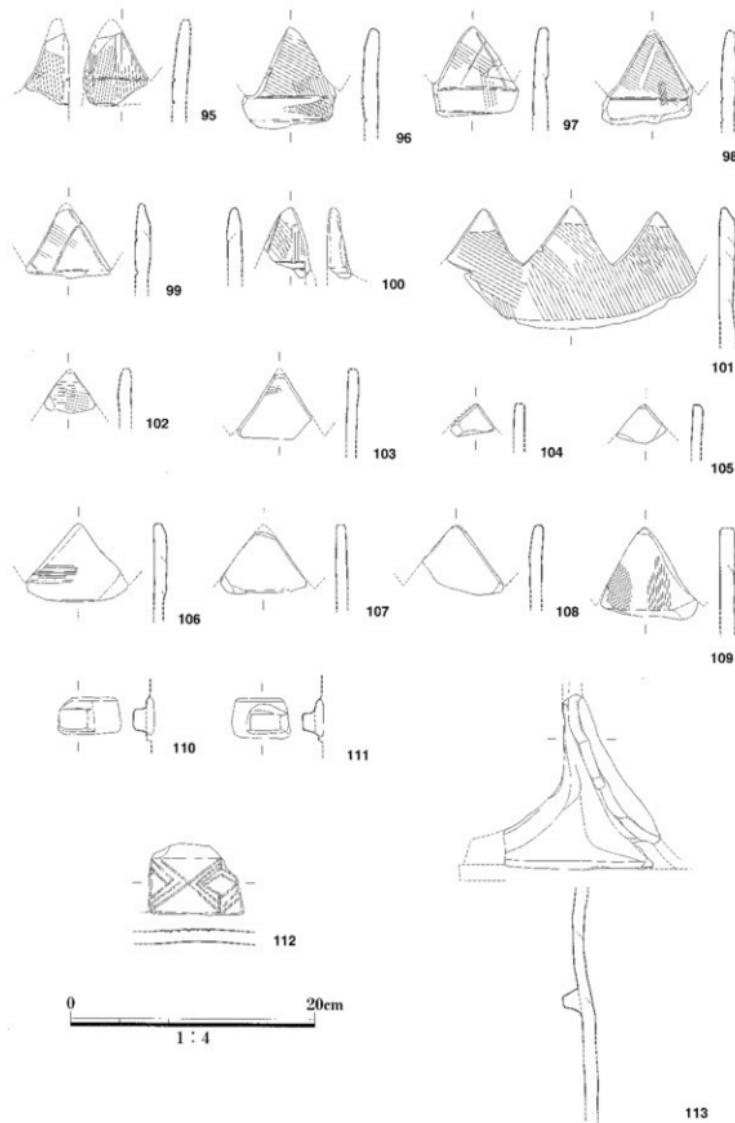


図 54 くびれ部周辺出土形象埴輪実測図 (2)

がって本例は西幕山古墳に後出しし、応神陵古墳造営初期に併行する時期と捉えることができ、川西の円筒埴輪の編年で第Ⅳ期の最も古い段階に位置づけることができる。

形象埴輪 造出し部からは円筒埴輪の他に形象埴輪が樹立していたと考えられる。形象埴輪の種類を特定することはできないが、出土状況から最も有力な候補となるのは鳥形埴輪である。そのうち明らかに鶴形埴輪と判断できるのは1点のみで、他の多くの破片は水鳥形埴輪である可能性を含む。水鳥形埴輪と考えられる破片は嘴、主翼部、風切羽、尾羽、脚部など各部にわたり、接合できるものはなかったが図上復元を試みた(図55)。高さは66cmに復元が可能である。応神陵古墳からも水

鳥形埴輪が出土しており[吉田1994]、完形に復元された高さは42.8cmと61.8cmを測る。この61.8cmを測る個体と本例の頭部の破片とのほぼ近いことから、復元案の高さは最大値であるかもしれないが、少なくとも応神陵例と同様な高さはあったと思われる。また応神陵例、本例とともに頭部が太く、津章城山古墳出土3号水鳥形埴輪[天野1987]の特徴に共通している。のことから本例の埴輪のモデルはコハクチョウ以外のガンカモ科であった可能性を指摘できるであろう。

以上の復元から形象埴輪の内容が鳥形埴輪で占められていたとするなら、前述もしたように、その樹立に関しては造出しに正面を向けるものと側面を向けるものがあるといった設置方向が異なる可能性を指摘できる。

桐形埴輪 くびれ部出土の桐形埴輪の全体形態は以下のように復元できる。

短側面を接するように2個体を並べて一辺とし、全体で8個体を組合わせて一つの施設を表現している。この一辺には開口部を設けている。口縁頂部は鋸歯状を呈し、長側面には帯状突帯が二条あり、さらに方形突起がある。この鋸歯状口縁は先端が三角形状を呈する板材を表現している。鋸歯状の谷間に底部に綱方向の線刻を有するものがあることから、綱長の板材を並べる表現であることが分かる。帯状突帯はそれを横に連結するための横木を、また方形突起はそれらを留めるための材を表現している。これらの表現は短側面にはみられないでの、当初より組合わせて用いることを意図して製作されたことが窺える。組合わせる意図は、両小口に配される鋸歯状口縁の形態にも表れている。両小口の鋸歯は直角三角形状で、中央にある二等辺三角形を半減したかのようである。この小口の形態は、組合わせて用いた場合に連続する鋸歯を表現するために意図したものと考えられる。ただし、これに該当しないものが2個体認められる。この2個体(74・75)は橢形土製品の樋部分に向けられる側に並び置かれ、ともに綱方向の線刻を有する。一方には梯子状の線刻が見られる点は、他の辺を構成する個体と明確な差を認めることができる。開口部を有する一辺とともに、樋部分に向けられる一辺にも何らかの意図を見ることができるで

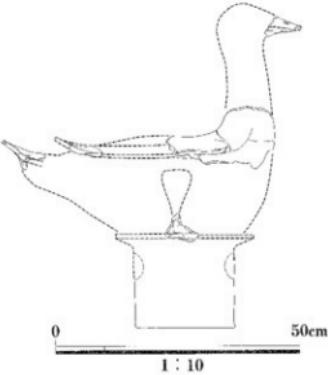


図55 水鳥形埴輪復元図

表6 横形埴輪法量・諸特徴表

	69	70	71	72	73	74	75	76
法量(cm)	器高 (31.3)	43.5	(22.8)	(45.0)	(36.8)	42.6	(38.6)	(17.3)
	底部長 51.5	42.5	52.0	49.5	44.0	43.0	43.5	51.0
	底部幅 10.0	10.0	11.5	8.0	9.5	9.5	14.5	11.0
	口縁部高 —	8.7	—	11.5	—	9.0	—	—
	体部高 —	15	—	14.2	13.6	14.4	(13.0)	—
	底部高 —	19.8	—	(19.3)	19.4	19.2	20.4	—
各部特徴	緑歯数 —	5	(6)	5	(7)	(6)	(5)	不明
	方形突起数 —	3	不明	4	4	3	3	不明
	支板数 1	1	2	2	1	1	1	1
	底部透孔 ×	×	×	1対	2対	×	×	×
	底部刺り込み 2対	×	2対	×	×	2対	2対	2対
備考	開口部			黒斑 (縦刻)	縦刻	黒斑・縦刻	黒斑	

であろう。

組合せを意図しているものの、法量の点や細かな形態の点においては若干の違いが認められる。器高は42.6~45cm(推定)で、ある程度の幅がある。これに対して底部高は19.2~20.4cm、体部高は13.6~15cmで器高に幅がある割にこれらの差は大きくはない。このことから樹立に際して帶状突帯の高さを揃える意図が窺える。

底部長は45cm未満が4個体、45cm以上が4個体で、底部長の長い個体と短い個体を並べて一辺にするもの(70と71の一辺、72と73の一辺)が認められる。底部幅は10cm前後に集中し、最も幅狭い8cmが1個体、最も幅広い14.5cmを測るものが1個体である。

帶状突帯の幅は3~4cmを測るもののが大半で、その縁は丸く仕上がるのに対して、縁をシャープにし幅も5.6cmを測るもののが1個体あり、これには縱方向の線刻と梯子状の線刻がある。

口縁頂部の鋸歯数は5つを配置するものが2個体ある。他に6つに復元できるもの2個体、7つに復元できるもの1個体がある。方形突起数は3つを配置するもの3個体、4つを配置するもの2個体があり、鋸歯数と方形突起数とに規則性は認められない。

支板は1つが多く、2つ配される2個体は底部長が長い。

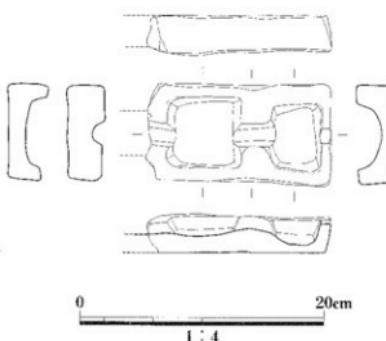


図56 野中宮山古墳出土埴形土製品実測図

底部に刺り込みが見られるのは5個体あり、いずれも二対である。刺り込みがなく透孔のあるものは2個体ある。その内、一对の透孔をなす個体は底部幅が最も幅狭く、二対をなす個体も底部長や底部幅が小さい。また、刺り込みや透孔を全くもたないものが1個体あり、これは底部長が最も短い。底部にみられる刺り込みの有無は、法量の点において違いを見いだすことができるものの、他の属性から差異を認めるることは難しい。

以上のことから、少なくとも帶状突帯の高さを揃えることで横木を連続するも

のとして表現しようとした意図は窺える。設置に際しても、底部長の長いものと短いものを組合わせて、一辺の長さを揃えようとする意図も窺えることから、組合わせて用いる場合に必要最低限の要素は統一していることが分かる。口縁部の鋸歯数や、方形突起の数、底部の切り込みや透孔などにはバラエティーがあり、これらの諸要素は必ずしも統一する必要がなかったのであろう。

焼成に関しては、極一部分ではあるものの3個体に黒斑が認められる。窖窯焼成であったのか、檻形埴輪という限られた種類を、極めて小規模な生産の中で野焼き焼成が行われたのかは判断できないが、黒斑の有無が時期差を表しているとは考えない。

野中宮山古墳出土の橢形土製品を図化した(図56)。二つの橋をもつ点は狼塚古墳例とは異なる形態である。

狼塚古墳出土形象埴輪の形態に関する一考察

1 囲形から柵形へ

【はじめに】くびれ部から原位置を留めて出土した橢形埴輪と橢形土製品は、奈良県御所市南郷大東遺跡で検出された一連の導水施設〔青柳編2003〕との共通性を指摘することができる。集落で検出された水の祭祀遺構とでも呼ぶべきものが埴輪に形象されたことは、埴輪祭祀を考えるうえでもすこぶる重要なと見える〔坂2000〕。この橢形埴輪が橢形土製品を圍むように配置されていたことから、この種の埴輪の性格に迫ることができる可能性もでてきた。

ここでは従来、圓形埴輪、柵形埴輪と別の名称で呼ばれ、それらの性格が定まっていなかった埴輪を統一し、形態面から分類しなおすことで新たな視点にたって、この種の埴輪に検討を加えようとするものである。

【圓形埴輪とは】圓形埴輪と呼称されてきた埴輪の形態は、平面形が方形や隅丸方形で、一般に鉤形の張り出し部をもち1ヶ所に出入口を表現する。上縁は鋸歯状に成形するものと、それがなく水平になるものがあり、側面には突縁を巡らすものである。

後藤は群馬県赤堀茶臼山古墳より出土した、この性質不明の形象埴輪を帷帳・壁代の類を表したものとした〔後藤1932〕。小笠原は赤堀茶臼山古墳の家形埴輪群を製作技法から再検討し、圓形埴輪を主屋の前方に置くべきとした。その性格については、防禦装置が施された門とそれに付属する柵・堀を示すとした〔小笠原1985〕。橋本は古墳時代の豪族居館の外護施設(柵列)の構造が圓形埴輪の形態に類似すること、経ヶ峰1号墳から圓形埴輪の中に家形埴輪が入った状態で出土したことなどから、外護施設(柵列)を表現したものとした〔橋本1985〕。そして、家形埴輪の全てが圓形埴輪の中に収まるわけではないので、その性格については象徴的に使われたものとした。また、圓形埴輪に特徴的な鋸歯状は先を尖らせた柵木であり、それを連結する柵木を突帯で表現したとして、具体的なモデルを指し示した点は重要である。

小笠原は柵状の門を、橋本は居館をめぐる施設としたものの、両氏は圓形埴輪を家形埴輪群の中でも家形埴輪の大きさとは見合わない小規模に作られたミニチュアとして捉えている点で共通している。これに対して後藤が帷帳・壁代としたことは、圓形埴輪もまた家形埴輪群を構成するひとつの施設として同一のスケールで扱っている点に大きな違いがあると考えるが、こういった

議論が展開されることになった。

圓形埴輪が解や衝を象徴したとする小笠原・橋本説に異を唱えたのは櫻井であった。圓形埴輪が扉や柵を象徴したものであるなら1古墳で複数出土する必要はないとして、居館全体をめぐるものをモデルとするには検討の余地があるとしたうえで「もっと限られた範囲（ある種の壇域）を画する施設の可能性」を指摘した〔櫻井 1990〕。

今回、狼塚古墳のくびれ部において一連の形象埴輪が出土したことにより、南郷大東遺跡で検出された導水施設との類似性に注目が集まった。つまり平面長方形を呈する形象埴輪が、南郷大東遺跡で検出された圓形状の埴根に相当すると考えられること、この中にあった槽をもつ木製の柵を象ったと思われる上製品がともに出土したことから、導水施設を埴輪で表現した最初の事例となつたからである。

上田は平面長方形を呈するこの形象埴輪が8個体で一つの圓形埴輪を形成するとし、柵を象った土製品を囲むことから全体を導水祭祀形埴輪と評価した〔上田 1998〕。

こういった見解をうけて青柳は、圓形埴輪の性格として「祭殿」を象った家形埴輪、もしくは「導水施設」を象った木彫形土製品を囲むための埴輪であるとした。この説は、豪族居館を囲む柵・堀とした説、それ以前に提出された壁代・帷帳、家畜小屋、稻城とした説は該当しないとし〔青柳 1999〕、圓形埴輪の用途を限定した点で櫻井の意見に近い。

その後、導水（湧水）施設を象ったと考えられる埴輪が圓形埴輪を伴って出土する事例が相次いで見られるようになる。兵庫県加古川市行者塚古墳からは圓形埴輪、家形埴輪、柵形土製品が出土した〔森下・高橋他 1997〕。大阪府八尾市心合寺山古墳のくびれ部から出土した埴輪は、圓形と家形が一体になり、その内部に導水施設を表現する特異なものである〔道他 2001〕。三重県松阪市宝塚1号墳〔福田他 2005〕からは2個体の圓形埴輪が出土し、その中に家形埴輪がおさまり、それぞれの中には柵形土製品と井戸形土製品とが据えられた形で表現されていた。

こういった事例の増加にともなって、これまで進展を見なかった圓形埴輪の研究がなされるかに思われたが、議論の中心は導水施設に焦点をあてて展開される傾向にあった〔消2001、2005・青柳 2005〕。しかも、これらの研究は狼塚古墳から出土したこの平面長方形の形象埴輪を、圓形埴輪とする根拠は示されないままに議論されているように思う。集落で検出された水の祭祀遺構とでも呼ぶべきものと、狼塚古墳での形象埴輪の出土状況に共通する点は認めるができるものの、狼塚古墳で柵形土製品を囲っていた形象埴輪の機能からの解釈を議論する前に検討しなければならない課題があると本稿では考えるのである。以下では柵形埴輪と呼称された形象埴輪について検討することで、この問題点を明確にしたい。

【柵形埴輪とは】 大阪府高槻市今城塚古墳の内堤の張出し部において、人物、動物、鳥形、家形、器財など多彩な埴輪が検出された。これらの形象埴輪群は張出し部のほぼ全面に展開し、南北方向に設置された柵列によって4区画されていた〔高槻市教育委員会 2004〕。

ここで問題とすべき点は、張出し部を区画しているのは柵形埴輪と呼ばれる形象埴輪であり、その形態は導水施設にかかる施設を表現したと考えられる狼塚古墳の形象埴輪と全く同じであったことである。

この点について森田は、今城塚古墳例の直接の祖形は狼塚古墳例であるとし、どちらも楕形埴輪として捉えられるものの、機能のうえで本質的な違いがあると指摘した。また、狼塚古墳例の「楕形埴輪」は「形式化が進んだ圓形埴輪」であって「圓形埴輪から楕形埴輪への変化過程」を示す資料とした〔森田 2003・2004〕。

さて楕形埴輪の呼称は、東京都世田谷区野毛大塚古墳で用いられたものである〔小泉 1999〕。その形態は楕円筒で鋸歯状口縁をもち、造出し部を囲繞していた。この形態と同じものは奈良県天理市櫛山古墳からも出土していることが知られ、これには鱗がつくことから、この種の埴輪の中では最も古く位置づけられる〔伊藤・豊岡 2001〕。

楕形埴輪を集成し形態面から検討を行った河内は、狼塚古墳例を異質とし、楕形埴輪の区分には入らないとした。また、楕形埴輪は配置される状況が一様ではないので、それを類型化したがその配置によって「意味が異なる記号性をもつ抽象的埴輪」であると結論した〔河内 2004〕。

圓形埴輪から検討を加えた青柳は今城塚古墳例、野毛大塚古墳例、櫛山古墳例は一般に「楕形埴輪」と呼ばれるもので、導水施設における場を表現したと考えられる圓形埴輪からは除外できるとする〔青柳 2005〕。また楕形埴輪は圓形埴輪との形態の類似性、出現時期の違いから圓形埴輪の起源に関わってくるかもしれないともした。

楕形埴輪から検討した河内と圓形埴輪から検討した青柳は、ともに狼塚古墳例を圓形埴輪、今城塚古墳例を楕形埴輪と分類した点で共通している。これらの分類案が形態面からの検討としながらも、機能面の違いを考慮に入れており一貫性に欠けるように感ずるのは、先に示したように狼塚古墳例と今城塚古墳例が、形態面で同様であるにもかかわらず、前者を圓形、後者を楕形埴輪とに分類される点である。また狼塚古墳例と今城塚古墳例とともに楕形埴輪と捉える森田も、狼塚古墳例を圓形埴輪とする前提で論を展開する点においては同様である。

もともと圓形埴輪なる名称自体が機能面を重視した命名であるのは、当時そのモデルを特定できなかったがためである。現在ではそれが少なくとも上縁の鋸歯状は柵木、水平なものは縱板を横に連ねた柵、垣根、柵板をモデルとしている可能性は高い。それが楕形埴輪と呼称される埴輪と形態面において共通性を見いだすことから、単体で用いるか複数で用いるかの差異の他に両者を区別する必然性は見あたらないと考える。

そもそも形象埴輪とされるものは器物を具象的に象った呼称が与えられており、その具体的な用語になじまないのは機能を指す圓形埴輪だけである。よって本稿では、そのモデルとなった器物を代表して具体的な名称である楕形埴輪に統称、統一し以下にその分類案を提示する。

【そして楕形埴輪へ】 機能的な区別を考慮せずに平面形態をもとに A 類と B 類に大別する。A 類は平面形が楕円、円形、長方形をなし、上縁に鋸歯をもつ。さらに楕円、円形を 1 類、長方形を 2 類とする。B 類は平面形が方形もしくは長方形、鉤形の張り出し部をもつ方形の形態をもち 1ヶ所に出入口を表現するものである。前者を 1 類、張り出し部をもつ後者を 2 類とする。A 類にも平面長方形を呈するものはあるが、B 類はその中に家形埴輪などを置くスペースをもつ点で A 類と区別される（表 7）。

この他に、突帯、透孔、鋸歯などの形態や数、その位置などをもとに細分が可能である。しか

(3) 家形埴輪を置き、その中に橿形、井戸形を表現する（心合寺山古墳、宝塚1号墳）。

この内(3)は導水を象った土製品があることから消や青柳が指摘するように「水に関連する祭祀儀式を執り行う場を囲繞していた壇または壇を象ったもの」とする可能性は高くなつた。【消2001、青柳1999】。(1)と(2)の性格を明らかにする根拠はもちえてはいないが、ここで埴輪に示されるスケール観に注目したい。埴輪に現実とは違うスケール観がもちこまれていたと指摘したのは水野である【水野1977】。人物、器財、家形埴輪にはそれぞれ別のスケールが存在するとして、赤堀茶臼山古墳での家形埴輪群を例にして家形埴輪の構造や規模の差は実際の建物自体の機能の差を示しているとした。橿形埴輪B類は家形埴輪とセットで配置されることが多いことから、これらが同一スケールで表現されているとみてよい。このことから考えられるのは、橿形埴輪が小規模に作られたミニチュアではなく、他の家形埴輪と同一スケールで造形されたものであるということである。ゆえに(1)や(2)の場合も、門や居館をめぐる象徴的なものではないといえるのである。

以上からB類は板塀や垣根（帷帳・壁代の可能性も）を備えた具体的な埴輪であるといえるであろう。

次にA1類を考えてみたい。A1類はその形態から鰐付楕円筒にその出自を求めることができる。他の類型に先行する可能性があり、しかも器財埴輪や家形埴輪が出揃う時期でもある。また単体で用いられることがなく、その配置によって次の3つがある。

(1) 形象埴輪がある造出し部を囲繞する（野毛大塚古墳）。

(2) 間隔を置いて設置し門状をなす（乙女山古墳、宝塚1号墳）。

(3) 形象埴輪群を画する柵列をなす（百足塚古墳）。

のことからA1類は配置に違いはあるものの形象埴輪と同時に置かれる埴輪であり、中でも家形埴輪に伴う可能性が高い埴輪であることが分かる。ここで再び埴輪のスケールから考えると、A1類が普通円筒より器高を抑えて表現しようとしたものは、抽象的な埴輪などではなく家形埴輪とセットとなるスケールで造形されたきわめて具体的な器物を象った埴輪であるといえることである。

つまり橿形埴輪A1類もまた、B類で検証したように家形埴輪とセットとして造形され、同じ場に置かれたきわめて具体的な柵または板塀を表現していると考えられるのである。またA1類がB類に比べて大きく表現されるのは、実際の機能の違いである。

最後に本例を含むA2類を考えてみたい。形態面ではA1類が鰐付楕円筒にその出自を求めることができるのに対し、A2類はB類に近いものである。⁽³⁾またA1類のように複数で用いられる。配置が分かれる確実な例は次の2つである。

(1) 橿形土製品を圍む（狼塚古墳）。

(2) 形象埴輪群を画する柵列とする（今城塚古墳）。

狼塚古墳のように橿形土製品を置くのはB類の行者塚古墳にもあり、今城塚古墳のように形象埴輪群を画する柵列とするのはA1類の百足塚古墳【有馬2005】にある。つまりA2類もすでにA1類やB類でみたように、他の形象埴輪と同時に置かれる埴輪であることが分かる。

ただし狼塚古墳に特徴的なことは、その場を閉鎖するということである。A1類では複数で用いられるものの、閉鎖することはなかった。A2類の今城塚古墳でも柵列とすることから、A類の本質としては閉鎖することを目的として造形されたものではなかったと考えられる。これに対してB類は空間を限定的に閉鎖することを目的として造形されたということができる。

狼塚古墳では閉鎖する必要があったということができるであろうが、その際にA類の柵形埴輪を用いた点に大きな特徴を見いだすことができる。先に検討したように、埴輪のスケール観からすれば狼塚古墳が閉鎖する空間は、B類の柵形埴輪が示す範囲を大きく超えるものであると考えられるのである。

柵形埴輪は家形埴輪と同一のスケールで造形された、きわめて具体的な埴輪である。A類はその場を区画する場合や、墳丘本体からの遮断に使われ、B類は小さな空間を示す施設として使われた。以上のような区分が整うのであれば、機能的解釈はこうした前提で議論上におかれることを希望する次第である。したがって本稿は、狼塚古墳例を上田がいうような柵形で組合せた柵形埴輪であるとする立場ではないことを改めて述べておく。

ともかく狼塚古墳で大きな空間を獲得したのは、具体的な埴輪である柵を用いて、全体を表象的に捉えることができたからである。それは狼塚古墳の被葬者が独自で成し遂げたとは考え難く、その築造時期や立地から応神陵古墳との密接な関係を読みとることができると考える所以である。応神陵古墳の造営にあたっては窑窓焼成の導入、埴輪製作全般の規格と統一といった埴輪生産の大きな変革を見いだすことができる〔川村1997b〕。こういった変革を伴う応神陵古墳の造営契機を抜きにしては成立しないと考えるのである。そう考えるもう一つの理由として、以下に述べる墳丘復元から狼塚古墳の立地を考えてみたい。

2 くびれ部からランドスケープへ

【墳丘の復元】 円筒埴輪列の北辺、西辺、南辺から造り出し部は幅9m、突出4m、円墳部径46m、全長50mの造出しつきの円墳に復元できる（図57）。

この復元案は最大値であり、狼塚の墳丘はこれより小さくなる可能性はある。

さて、陵墓図には本調査区とほぼ同形の畦畔が認められ（図58）、現在に至るまでその痕跡を良く留めている。この畦畔は復元した造り出し部と円墳の北側部分に合致することから、復元寸数値はあながち大きいとはいえないであろう。造り出し部に相当する畦畔から約6m西側には弧状を描く畦畔があることから、これを堤部とすると卵形の周溝を描くことができる。周溝幅は約10mを見積ることができる。最も外側を廻る溝は旧地形が西側に向かって落ちていくことから、この部分まで廻るとは考え難く、陵墓図においてもその痕跡は見いだせない。

このように復元すると、狼塚古墳は円墳部分をすぐ南側に位置する応神陵古墳中堤に最大限まで近づけた立地であることが分かる。ここで墳丘の築造時期を考慮に入れて、狼塚古墳の立地が意味するところを考えたい。

【古墳の占有形態】 応神陵古墳周辺での古墳築造は、二ツ塚古墳を契機としている。同様な時期に盾塚古墳があり、これを中心として周囲に鞍塚古墳、珠金塚古墳が墳形を変えながらも順次築造される。一瀬はこれらを盾塚古墳のブロックとし「仲津姫陵古墳南端から大鳥塚古墳にかけ

ての谷状に大きくくぼんだところをさけて整然と配置されている。」とする〔一瀬1989b〕。また、この谷状地形が仲津姫陵古墳、古室山古墳、赤面山古墳、大鳥塚古墳、丸山古墳、応神陵古墳といった西グループの古墳と国府台地における立地の違いにおいて大きく色分けされるとする。そして盾塚古墳のブロックを含む東グループは、その立地から造営主体者が石川流域と強く結びつき、西グループは大水川流域を主とした谷とその下流域の北西方からの眺望を重視したとし、両グループの造営主体者が異なることを指摘した。

さて、狼塚古墳は応神陵古墳中堤に取り付く形をとり、造出し部を西側に向けている。この立

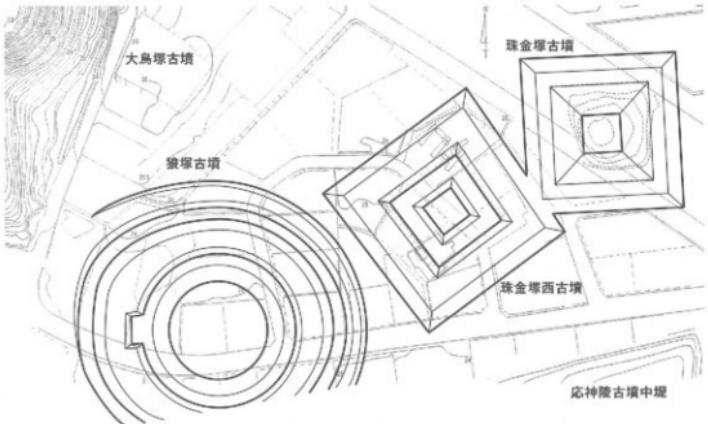


図57 狼塚古墳墳丘復元図〔一瀬1989b〕に加筆 ($S = 1:1,500$)

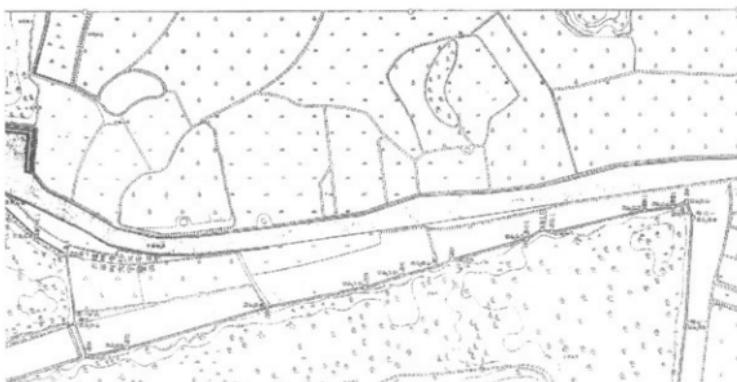


図58 応神陵古墳陵墓図〔宮内庁書陵部1999〕 ($S = 1:1,500$)

地と狼塚古墳は応神陵古墳の陪冢の可能性は高い。さらに留意すべきことは、狼塚古墳のくびれ部にある橢形埴輪の出入口を西側に向ける点である。この出入口の方向は、一瀬が指摘した大水川流域を主とした谷側に向けられるのである。大鳥塚古墳の南端と丸山古墳の間隙を縫うかのように設置された橢形埴輪の出入口は、偶然によるものではなく、その造営主体者が大水川流域と強く結びついていることを意味する。

狼塚古墳を特色あるものにしているのは、くびれ部に設置された橢形埴輪と楕形土製品である。遺跡で検出された祭祀遺構を埴輪で形象したことは、埴輪祭祀を考えるうえでも重要な意味をもつことは間違いない。これらの遺構が集落の縁辺部に立地し、埴輪で形象されるようになっても

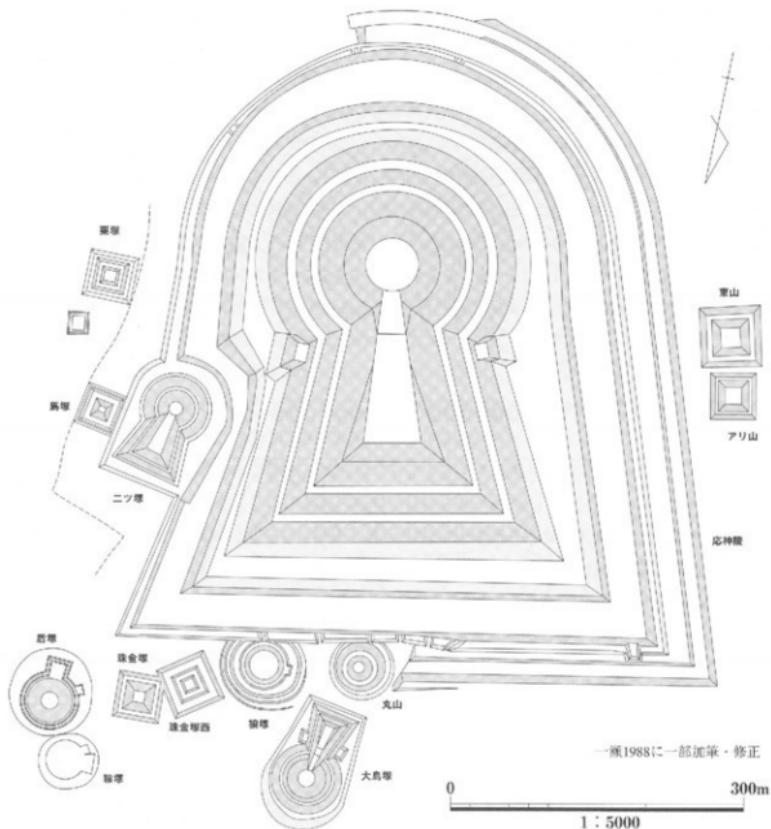


図59 応神陵古墳・周辺古墳埴丘復元図

古墳のくびれ部や谷部に置かれることを考える時、狼塚古墳は周囲に存在する古墳や地形といったランドスケープまでも埴輪の中に取り入れたと考えることもできるのである。それは、あたかも新しき時代の到来を宣言しているかのようである。

資料の実見に際して高槻市教育委員会 宮崎康雄氏より御配慮いただきました。末筆ではありますがここに記して感謝いたします。
(川村)

註1 本例と南郷大東遺跡で検出された一連の導水施設との共通性、特に群馬県三ツ寺1遺跡における石敷との共通性を最も早くに指摘されたのは現場に訪れた大阪府教育委員会の一瀬和夫氏である。調査中のこの御教示は、その後の作業を円滑に進めるうえで大変貴重であり、ここに感謝申し上げます。

註2 野中宮山古墳では埴形土製品が出土している。古市占墳群での水に関する祭祀を象った埴輪の出現は、少なくともこの時期にまで遡ることが分かる資料である(図56参照)。

註3 狼塚古墳の橢形埴輪には底部に割り込みのある個体と透孔をもつ個体がある。前者は橢形B類によく見られる割り込みを、後者は橢形A類とそれを祖形とする円筒埴輪の透孔を引継いだものとみることもできるかもしれない。

狼塚古墳と導水施設形埴輪

導水施設形埴輪を構成する橢形埴輪は、今まで破片ではあるが出土しており、円形や家形として報告されている。

昭和30年の盾塚古墳・鞍塚古墳・珠金塚古墳の発掘調査後に鞍塚古墳西方の道構から出土したものが圓形埴輪として報告されている[伊藤・林部1984]。その後、大阪府教育委員会による発掘調査で圓形を用いた埴輪桿である埴輪棺墓2が検出された[小浜1996]が、両遺構は場所的にもその出土状況も一致するなど同じ遺構と思われる。鞍塚古墳に樹立されていたものを利用したと考えられる。

狼塚古墳のものと比較すると、大きさはほぼ同じであるが、狼塚古墳のものが外面にほとんど飾りがないのに対して、円形や綾杉紋状の線刻など、様々な紋様が認められる。また、両端の山形突起は狼塚古墳のものは半截されたものであるが、鞍塚古墳のものは端まで他と同じく三角形を呈しており、狼塚古墳より立派な橢形埴輪であることがわかる。ただ他の埴輪の様相からは、鞍塚古墳のほうが狼塚古墳より時期的にやや下ると思われる。

狼塚古墳出土例のような長方形の箱形の橢形埴輪を、狼塚型橢形埴輪と仮称する。したがってその集合体は狼塚型導水施設形埴輪である。

さらに最近、上師の里埴輪窯から窯本体内ではないが、やはり狼塚型橢形埴輪が出土している[佐々木2001b]。また、市野山(允恭陵)古墳の北側で新しく発見された長屋1・2号墳からも狼塚型橢形埴輪の破片が出土している[佐々木2001a]。他には以前大阪府教育委員会が発掘調査した青山2号墳からも出土しているが、家形埴輪片として扱われていた。

この狼塚型橢形埴輪は、時期的に連続して使用されていることや埴輪窯の近くから出土してい

ることなどを勘案すると、少なくとも古市古墳群では一般的な埴輪祭祀としてこの埴輪は存在すると考えたい。

なお、導水施設の遺構はいくつかの遺跡で検出されている。そのうち奈良県御所市南郷大東遺跡「青柳編2003」では水流上に切妻造形式の覆屋を建てその中に木樋を槽部を上流部に向け、樋部で下流に流すように置かれていた。覆屋の周りには、斜めに組んだ枝状の材で作った圓形埴輪状の垣根で覆わされていた。

狼塚古墳の導水施設形埴輪は横形埴輪が8個全体が組合わさせて、一つの圓形埴輪を構成していると考えるが、普通の圓形埴輪と異なって横が二重になっており、その間が空いている状況を表すという特徴を持つ。そうすると、横形の間の仕切り板が問題になる。しかし、横形Aの仕切り板は入口部から続くところが切れており、強度や粘土の収縮など単に制作上必要なもので、実際の機能的な状況を表現しているのではないかと考える。

新しい時期の資料であるが、伊勢神宮參詣曼荼羅に牛垣が二重に表現されており、この中が通路としての機能を備えており、回廊状のもの表現していると考えた。

また、神社関連では春日大社本殿の玉垣は板玉垣で、その上部に山形突起の表現がなされているを確認しており、住吉大社本殿の生垣も同様であった。狼塚古墳の導水施設形埴輪が南郷大東遺跡で出土した遺構と酷似していることから、当時の状況を忠実に表現しているとすれば、重要なものを牛垣で囲うという伝統が現在にも引き継がれていると考えられる。

導水施設形埴輪出土古墳について

導水施設形埴輪は他に行者塚古墳、宝塚1号墳、心合寺山古墳で認められる。古市古墳群では野中宮山古墳でも存在した可能性があり、これらについて狼塚古墳の状況と比較したい。

行者塚古墳は兵庫県加古川市にある墳丘長99mの前方後円墳で、東西の造出しが調査されている〔森下・高橋1997〕が、どちらも造出し鞍部から横形埴輪が検出している。特に東側造出しへは長方形の大型の圓形埴輪の中に家形埴輪が置かれていた。ここからは調査概報で船形土製品と報告されているものが出土しているが、これは家形埴輪の中に納めると、両端部が少し人口から出る程度になるため、これが木樋形埴輪になると思われる。

宝塚1号墳は三重県松阪市にある墳丘長110mの前方後円墳で、造出しへは馬見丘陵にある巣山古墳の出島形の島の流れで、渡り土手でつながるものが検出されている〔福田2005〕。前方部側には壺形埴輪が並んでおり、北側が削られている可能性から、これは壺形埴輪を並べることによって壺形を表していると考えたい。ちょうど入口に当たるところに精円の、巣山古墳でいう横形埴輪が二つ並べられており、さらにその中に圓形埴輪を置き、その中に導水施設のついた家形埴輪があった。後円部西側には圓形埴輪の中から湧水の祭祀を表す井戸が付いた家形埴輪がある。

心合寺山古墳は八尾市にある墳丘長160mの前方後円墳で、後円部と造出しへの間に家形埴輪・導水施設・圓形が一体化した埴輪が出土している〔酒2001〕。副葬品や埴輪などにも古い要素が残る古墳である。

野中宮山古墳は墳丘長154mの前方後円墳で発掘調査により南側に大きな造出しが発見されている〔上田1993〕。断ち割りの結果、後円部と造出しへの鞍部を埋め立て、その周辺に多くの埴

輪を立て並べていることが判明した。埋め立てられた下層には後円部の葺石が残存していた。

ここには馬形埴輪の脚部が原位置に残っており、頭部がその東側から出土していることから、東側を向いて樹立していたと思われ、またその南側には壺形埴輪が列をなして4個体並んでいた。

壺形埴輪列の南側には小さな形象埴輪の基部が4個体並んで列をなしており、この付近から多くの水鳥形埴輪の破片が出土していることから、水鳥形埴輪列と考えたい。

水鳥形埴輪は津堂城山古墳から高さ1m強で最古最大のものが出土している。これはかなりリアルに水かきまで表現しているが、野中宮山古墳のものは今のところ水かきの破片は見つかっていない。さらに津堂城山古墳のものは顔と頸のラインを丸く表現しているのに対して、野中宮山古墳例では段があり、目も竹簡状のものでついているなど簡略化されている。これは誉田御廟山古墳などの水鳥形埴輪に続く技法であろう。他に猪形埴輪が複数個体見つかっており、列になっていた可能性も認められる。

くびれ部からは原位置ではないが、木樋形埴輪が出土している。付近から瓦器なども出土しており、当時は中世期の何かの鋳型と考えていたが、狼塚古墳を調査したことによりこれが樋部は折れてしまっているが木樋形埴輪であることが判明した。出土場所はやはり造出しと後円部との鞍部であることが判明しており、導水施設形埴輪も存在した可能性を考えたい。

また、野中宮山古墳では少なくとも10点以上の圓形埴輪の破片が認められる。まだ検討を加えていないので詳細は不明であるが、山形突起のある破片や行者塚古墳で出土しているもののように上に山形突起のないものなどタイプの異なる圓形埴輪がいくつか認められる。

以上あげた古墳はすべてが、円筒埴輪にB種ヨコハケを採用しており、その規格などから中期古墳であることがわかる。時期的には宝塚1号墳と行者塚古墳は古いタイプの規格を使用しているが仲津山古墳のⅢ-2期の時期を考えている。野中宮山古墳は古市古墳群の埴輪の規格を使っており、仲津山古墳併行であろう。心合寺山古墳も古市古墳群の円筒埴輪の規格を使っており、他の古墳より新しく、誉田御廟山(応神陵)古墳併行のⅣ-1期もしくはそれよりやや下がる時期と考える。

これらの古墳の造出しと後円部や前方部との取付き状況を見ると、すべて鞍部のところを埋め立てて半坦にし、そこに導水施設形埴輪が存在するなど、形象埴輪群が認められることがわかる。図60は導水施設の入口と導水の流れの方向が造出しや後円部に対してどのような方向性があるのか表現している模式図である。

行者塚古墳の西側造出では、その上面に方形の円筒埴輪列が認められるが、前方部寄りのところで、埴輪列が少しづれておりその部分が入口部と考えられる。造出しと後円部の鞍部にある圓形埴輪は造出の方に入口がある。東側造出では後円部との鞍部に導水施設形埴輪が認められるが、入口は後円部側にあり、墳丘から流れた水は鞍部を通って導水施設形埴輪に入り、周濠に流れようになっている。

宝塚1号墳は、北側は不明であるが壺形埴輪の並びが圓形になっているのがわかる。壺形埴輪を2個体並べているところが入口部と考えると、造出のほうに入口があることがわかる。その中にある導水施設形埴輪は入口が造出とは逆方向にあり、造出の斜面から水が流れ、導水施

設形埴輪を通り周濠に落ちるようになっている。西側の湧水施設形埴輪の入口は埴丘側で、井戸から湧いた水は周濠側に流れようになっている。

心合寺山古墳では導水施設形埴輪は入口が造出しの方にあり、造出し斜面から水が流れ、導水施設形埴輪の中を通り、周濠に落ちるようになっている。

野中宮山古墳では方向等は不明である。

狼塚古墳は円墳部と造出との鞍部に平坦面を作り導水施設形埴輪を設置している。入口は周濠側を向いており、造出し斜面から導水施設形埴輪を通り周濠に水が流れようになっている。

このように導水の流れはすべて造出しが或は埴丘部から、導水施設形埴輪を通り、周濠に流れようになっている。これは埴丘上から流れ下に落とすジオラマを形作っていると思われる。

また、入口はほとんどが埴丘部や造出しが或は埴丘部を向いているが、狼塚古墳では造出しが流れてくるのは同じであるが、入口が外側にある。つまり周濠や外堤側から入っていくのを表現している。

これには二つの考え方ある。つまり、狼塚古墳が誉田御廟山（応神陵）古墳の陪塚と思われるため、主墳を横目で見るような形で入口があるという考え方と、狼塚古墳の時期が他の古墳よりも新しいことから、外側にあるという考え方である。後者は、今まで古墳の被葬者とか前世とかに対する「お祀り」であったため入口が造出しが或は埴丘部にあったのが、祭祀形態の変化によって、狼塚古墳では現世の、今いる人が「お祀り」するために、外からの入口を作り、導水施設形埴輪を用いた埴輪祭祀を行ったと考えられる。

南郷大東遺跡は古墳ではないため造出しがないが、導水施設では開形の入口がちょうど金剛山

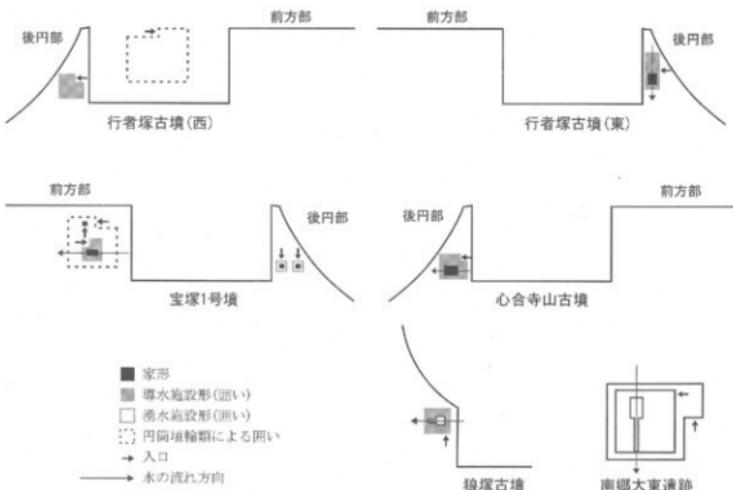


図 60 導水施設形埴輪の位置と入口（模式図）

表8 導水施設形埴輪と造出し樹立形象埴輪

時 期		III-1	III-2	IV-1	IV-2	IV-3
古市古墳群	津堂城山古墳	■	野中宮山古墳 ▲☆□■◎壹土	狼塚古墳 ★■◎	鞍塚古墳 ★◎ 野中古墳 団■	長者1・2号墳 ★
	佐紀石塚古墳 ▲ 巣山古墳 ▲団■壹	ナガレ山古墳 ☆団 乙女山古墳 ▲団壹 行者塚古墳 ☆団○土壹 宝塚1号墳 ▲☆団○壹土	心合寺山古墳 ☆団○壹 五条猫塚古墳 ☆団			
代表古墳	その他					

(▲=櫛形 ☆=導水施設形 団=圓形 ★=狼塚型埴輪 ■=水鳥形 ◎=鶴形 壱=壺形埴輪 土=土製品)

を望む方向に作られ、金剛山の方向から流れ出てくる水を木桶檣で溜め下流に流していると想定されている。金剛山を見る方向を意識しているとすれば、入口は外側にあると考えられる。

埴輪の置かれた方向では、狼塚古墳の圓形埴輪にはあまり外側の模様はないが、櫛形Fと櫛形Gと櫛形Eに関しては線刻が少しだけ見られる。特に櫛形Gでは上部に梯子紋が見られるので、北側から見る方向を意識していると思われる。それは葦田御廟山(応神陵)古墳を見上げる方向を意識しているのであろう。他の櫛形埴輪は外側の山形にだけ線刻が見られるので、埴輪の置く方向も意識して、埴輪工人は制作していると考える。

また、心合寺山古墳の家形埴輪には内側だけ線刻があるので、これは内のはう、墳丘のはうを意識していると思われる。この古墳は狼塚古墳と同じか、もしくは新しい時期に造営されたと考えるが、古い形態を残す古墳であるため、祭祀形態も古い形態をとっていたのであろう。

さらに、宝塚1号墳や行者塚古墳、心合寺山古墳、野中宮山古墳など導水施設形埴輪を確認している古墳では、鈎の付いた壺形埴輪が出土していることも特徴の一つであろう。これは他に奈良県北葛城郡河合町にある墳丘長130mの帆立貝形古墳乙女山古墳からも出土している。乙女山古墳は造出しを調査している[木下編 1988]が、導水施設型埴輪は出土しておらず、造出しの中央から楕円形埴輪が出土している。周りから山型突起が出土しており、これは櫛形埴輪であると考えられる。なお、宝塚1号墳でも同類の櫛形埴輪が出土している。

櫛形埴輪は櫛山古墳から出土している[伊藤・農岡 2001]のが最も古いもので、佐紀石塚(成務陵)古墳からも山型突起を持つ楕円筒埴輪、櫛形埴輪が出土している[福尾 1997]。野中宮山古墳の木櫛形埴輪に類似した木櫛形石製品が出土した東京都野毛大塚[小泉 1999]からも山型突起を持つ楕円筒埴輪、つまり櫛形埴輪が出土している。このような要素から、これらの古墳は間接的につながりが認められると考えたい。

表8は以上あげてきた古墳で形象埴輪の造出しに置くものの関係を表す。▲が櫛形埴輪、☆が導水施設形埴輪、★が狼塚型圓形埴輪、■が水鳥形埴輪である。III-1期の津堂城山古墳では水鳥形埴輪しか今のところ判明していない[天野 1987]。なお、同じ時期と思われる佐紀石塚古墳では櫛形埴輪が出土している。巣山古墳では水鳥形埴輪と櫛形埴輪が出土している[広陵町

2005]。Ⅲ-2期の仲津山古墳併行期では、野中宮山古墳で橢形埴輪や、導水施設形埴輪も出土しており、水鳥形埴輪も多数認められるが、狼塚型圓形埴輪は不明である。同時期のナガレ山古墳 [吉村1999]、行者塚古墳でも導水施設形埴輪が出土しているため、この時期に導水施設形埴輪が出現すると考えたい。IV-1期の狼塚古墳では、狼塚型橢形埴輪と水鳥形埴輪が出土している。さらに心合寺山古墳では導水施設形埴輪が認められる。IV-2期の鞍塚古墳では、狼塚型圓形埴輪が出土しており、その他、鶏形埴輪、盾形埴輪、衣蓋形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪が出土している。野中古墳では、渡り土手から4万点以上の白玉が出土しており、そこから圓形埴輪や水鳥形埴輪が出土している [山田1991] が、導水形施設形埴輪は認められない。IV-3期にあたる長屋1・2号墳からは狼塚型橢形埴輪が出土している [佐々木2001a]。

橢形埴輪は櫛山古墳で既に認められるため、佐紀古墳群など大和で出現すると考えられる。導水施設形埴輪は津堂城山古墳では未確認であることから、古市古墳群に大王陵が移ったⅢ-2期に創作された新しい埴輪祭祀と考えたい。

この中で、興味深いのは古市古墳群では水鳥形埴輪が古くから続いており、それに伴って橢形埴輪と導水施設型埴輪や他の形象埴輪のセット関係が続くということである。ただ、時期が下るにつれて少しづつそのセット関係も崩れていく状況が見てとれる。

さらに鶏形埴輪が野中宮山古墳や狼塚古墳、鞍塚古墳、心合寺山古墳から出土していることも注目すべき点と考える。導水施設ということで関連する南郷大東遺跡では導水施設造構から鶏の骨と燃えさしの木材が出土していることから夜に行った祭祀ではないかということが報告されている。導水施設形埴輪で浄水祭祀を行った後、鶏が鳴くことによって終わりを告げることを鶏形埴輪で表現している可能性を指摘したい。津堂城山古墳や巣山古墳では造出しや島状造構から鶏形埴輪が確認されていないのは、導水施設形埴輪がまだ確立していないことを示唆していると考えたい。

(上田)

〈参考文献〉

- 青柳泰介 1999 「橢形埴輪小考」『考古学に学ぶー遺構と遺物ー』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 青柳泰介(編) 2003年「南郷遺跡郡Ⅲ」奈良県立橿原考古学研究所報告第74号奈良県立橿原考古学研究所
- 青柳泰介 2005 「導水施設の意義についてー南郷大東遺跡の調査を中心にー」『水と祭祀の考古学』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編
- 天野末喜 1987 「津堂城山古墳の埴輪」『季刊考古学』第20号
- 有馬義人 2005 「百足塚古墳の調査」『王権と儀礼』大阪府立近つ飛鳥博物館
- ・瀬和夫 1981 「応神陵古墳外堤発掘調査概要」大阪府教育委員会
- ・瀬和夫 1988 「大水川改修にともなう発掘調査概要・V」大阪府教育委員会
- ・瀬和夫 1989a 「大水川改修にともなう発掘調査概要・VI」大阪府教育委員会
- ・瀬和夫 1989b 「珠金塚西古墳と墓域占有形態の変化」『南河内遺跡群発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
- 伊藤雅文・林部均 1984 「大阪府藤井寺市鞍塚古墳西方出土の形象埴輪」『関西大学考古学研究紀要』4
- 伊藤勇輔・農岡卓之 2001 「櫛山古墳の新資料」『考古学論叢』橿原考古学研究所紀要第24冊
- 上田睦 1992 「HJ91-1区」「石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅳ」藤井寺市教育委員会
- 上田睦 1993 「野中宮山(足塚)古墳」「新版古市古墳群」藤井寺の遺跡ガイドブックNo.6 藤井寺市教育委員会

- 上田勝 1998 「藤井寺市猿塚古墳（HJ97-10）の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第37回）資料』
 （財）大阪府文化財調査研究センター
- 上田勝 1999 「HJ97-16区」『右川流域遺跡群発掘調査報告X IV』藤井寺市教育委員会
- 上田勝 2003 「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論義』第5号
- 小笠原好彦 1985 「家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」『考古学研究』第31卷第4号
- 河内一浩 2000 「壇形埴輪に関する覚書」『堀山啓一先生古稀記念獻呈論文集』堀山啓一先生古稀記念獻呈論文集作成委員会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪統論」『考古学雑誌』第64卷第2号
- 川村和子 1997a 「壇塚」『西墓山古墳』古市古墳群の調査研究報告Ⅲ 藤井寺市教育委員会
- 川村和子 1997b 「古市古墳群の埴輪生産体制—墓山古墳周辺の方墳出土円筒埴輪の検討から—」『西墓山古墳』古市古墳群の調査研究報告Ⅳ 藤井寺市教育委員会
- 北野耕平 1979 「河内における古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室研究報告第一冊
- 木下亘編 1988 「乙女山古墳付高山二号墳」河合町教育委員会
- 宮内庁書陵部 1999 「陵墓地形図集成」宮内庁書陵部陵墓課
- 小泉玲子 1999 「撮影埴輪」「野毛人塚古墳」世田谷区教育委員会、野毛大塚古墳調査会
- 小浜成 1996 「盾塚・鞍塚古墳の調査」「土師の里遺跡発掘調査概要IV」大阪府教育委員会
- 後藤守一 1932 「上野國佐波郡亦堀村今井茶臼山古墳」帝室博物館
- 櫻井久之 1990 「一ヶ塚古墳（長原85号墳）の形象埴輪」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告II」（財）大阪市文化財協会
- 佐々木理 2001a 「K099-5区」『右川流域遺跡群発掘調査報告X VI』藤井寺市教育委員会
- 佐々木理 2001b 「HJH00-1区」『石川流域遺跡群発掘調査報告X VI』藤井寺市教育委員会
- 末永雅雄編 1991 「壇塚鞍塚珠塚金塚古墳」
- 高槻市教育委員会 2004 「発掘された埴輪群と今城塚古墳」
- 天理市教育委員会 2003 「史跡赤土山古墳 第4次～第8次発掘調査概要報告書」
- 奈良県広陵町教育委員会 2005 「巣山古墳調査概要」
- 橋本博文 1985 「古墳時代首長層住居の構造とその性格」「古代探求II」早稲田大学
- 畠本政美 1979 「善田中学校グランドフェンス工事に伴う調査」「茶山遺跡発掘調査報告書」羽曳野市教育委員会
- 坂靖 2000 「埴輪祭祀の変容」「古代学研究」第150号
- 福尾正彦 1997 「佐紀旁列池後陵整備工事区域の手前調査—第一トレントの出土品—平成八年度 陵墓關係調査概要」「書陵部紀要」第49号 宮内庁書陵部
- 福田哲也 2005 「史跡宝塚古墳」松阪市教育委員会、松阪市文化財センター
- 松村降洋 1993 「土師の里遺跡他発掘調査概要III」大阪府教育委員会
- 水野正好 1977 「埴輪の世界」「日本原始美術体系3」土偶 埋輪
- 酒井2001 「史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書」八尾市文化財調査報告45
- 酒井2001 「「水の祭祀場を表した埴輪」とについての覚書」「史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書」史跡整備に伴う発掘調査の概要—八尾市教育委員会
- 酒井2005 「「水の祭祀場を表した埴輪」と導水施設」「水と祭祀の考古学」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編
- 森下幸司・高橋克壽他 1993 「紫金山古墳と石山古墳」京都大学文学部博物館
- 森下幸司・高橋克壽他 1997 「行者塚古墳発掘調査概要報」加古川市文化財調査報告書15 加古川市教育委員会
- 森田和伸 1984 「茶山遺跡」「古市遺跡群V」羽曳野市教育委員会
- 森田克行 2003 「今城塚古墳と埴輪祭祀」「東アジアの古代文化」第117号
- 森田克行 2004 「今城塚古墳の埴輪群像を読み説く」「発掘された埴輪群と今城塚古墳」高槻市教育委員会
- 山田幸弘 1991 「NNK90-1区」『石川流域遺跡群発掘調査報告VI』藤井寺市教育委員会
- 古澤則男 1989 「栗塚古墳」「古市遺跡群X」羽曳野市教育委員会
- 吉田珠己 1994 「善田御廟山古墳」「羽曳野市史」第三巻 羽曳野市史編纂委員会
- 吉村公男 1999 「笠原勝彦君とナガレ山古墳」「駆け抜けた人生」笠原勝彦君追悼文

狼塚古墳の埴輪にみられる砂礫

櫻原考古学研究所共同研究員

奥田 尚

藤井寺市の狼塚古墳から出土した埴輪の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。観察は始めに埴輪資料全体を裸眼で行い、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で行った。識別した石種・鉱物種をもとにその構成から類型に区分し、砂礫相から砂礫の採取地を推定した。

砂礫種の特徴

識別した石種は花崗岩・閃綠岩・圧碎岩・流紋岩・砂岩・泥岩・チャート・火山ガラスで、鉱物種は石英・長石・黒雲母・角閃石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色・灰色で、粒形が角・亜角・粒径が最大8mmである。石英・長石・黒雲母・石英・長石・黒雲母が嗜み合っている。

閃綠岩：色は灰白色・灰色・褐色で、粒形が角・粒径が最大1mmである。石英・長石・角閃石・長石・角閃石・黒雲母が嗜み合っている。

圧碎岩：色は褐色で、粒形が亜角・粒径が2mmである。花崗岩質岩の圧碎岩である。B1の資料にみられる。

流紋岩：色は灰白色・灰色・暗灰色・褐色・茶褐色・暗褐色・灰褐色・淡赤茶色・赤茶褐色・赤茶色と様々で、粒形が角・亜角・亜円・円・粒径が最大12mmである。石基はガラス質で、斑品鉱物として石英や長石がみられるものもある。

砂岩：色は灰色・褐色・茶褐色で、粒形が角・亜角・亜円・粒径が最大8mmである。細粒砂・中粒砂からなる。

泥岩：色は灰色・黒色・褐色・茶褐色で、粒形が角・亜角・亜円・粒径が最大6mmである。片理がみられるものもある。

チャート：色は灰色・暗灰色・黒色・褐色・茶褐色で、粒形が角・亜角・亜円・粒径が最大10mmである。

火山ガラス：無色透明・黒色透明で、粒径が最大0.5mmである。貝殻状・フジツボ状・束状をなす。

石英：無色透明・灰色透明で、粒形が角・粒径が最大3mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色・灰色で、粒形が角・粒径が最大6mmである。

黒雲母：黒色・金色・褐色・茶褐色で、粒状や板状をなす。粒径が最大4mmである。

角閃石：黒色で、粒形が角・粒径が最大0.3mmである。粒状や柱状をなすものがある。

類型区分

識別した砂礫種構成を基にして、源岩を考慮して主とする砂礫構成から類型に区分すれば、1類型と4類型になる。更に、割となる砂礫構成から細分すれば、1類型は1bd類型・1bdg類型・1d類型・1dg類型に、4類型は4agn類型に区分される。各類型の特徴について述べる。

1bd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に上師里付近の石川の砂礫と推定されるものと砂礫の採取地について推定しがたいものがある。

1bdg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源・碎屑岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に藤井寺市上師里付近の石川の砂礫と推定される。

1d類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に柏原市田辺付近の砂礫の可能性がある。

1dg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・碎屑岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に羽曳野丘陵の砂礫と推定される。

4agn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・碎屑岩起源と推定される砂礫や他形の角閃石を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に柏原市田辺付近の砂礫と推定される。

砂礫の採取地について

藤井寺市は南西部に羽曳野丘陵、東に石川があり、北に平地が広がっている。現在の大和川は江戸時代に開削されたものであり、古代の状況を反映しているものではない。藤井寺市付近に砂礫が供給された後背地としては羽曳野丘陵、金剛山地、和泉山脈がある。また、砂礫の採取地としては、石川の川原、段丘の地層、羽曳野丘陵の地層等があげられる。羽曳野丘陵の砂礫は流紋岩質岩起源の砂礫が多い。石川の砂礫には花崗岩質岩起源の砂礫が多く、飛鳥川との合流地よりも下流では自形の石英がみられる。段丘層の砂礫は石川の砂礫に似たものと羽曳野丘陵の砂礫に似たものがある。

1bdg類型の砂礫構成を示す砂礫は土師里付近の石川の砂礫と推定される。1bd類型の砂礫構成を示す砂礫は石川の砂礫と推定されるが、自形の石英が含まれないことから古市付近の可能性が高い。1dg類型の砂礫構成を示す砂礫は4類型とすべきか1類型とすべきか判断し難い。砂礫相的には羽曳野丘陵の砂礫構成に似ている。4agn類型の砂礫構成を示す砂礫は柏原市田辺付近の砂礫と推定される。

2. HJ06-3区

位置と環境

調査区は、下位段丘上に位置し、周辺の地形は東方向に下降する。

西に隣接するHJ04-6区では、新たに埋没古墳が見つかり、土師の里12号墳と名付けられた。周濠と思われる部分からは多量の埴輪が出土している。円筒埴輪とともに形象埴輪も認められた。形象埴輪は、家形、蓋形、軒形、盾形、甲冑形、馬形などが認められる。埴輪の特徴から、5世紀中ごろの築造時期が想定されている。また、古代の土器器も見つかっており、多量の土師器、須恵器が出土している。

南に隣接するHJ05-11区では、新たに埴輪窯2基が見つかった。これまで埴輪窯の存在が確認されていなかった場所であり、土師の里南埴輪窯跡群と名付けられた。5世紀中ごろの操業時期が想定されている。

今回も、これら隣接する調査区と関連する遺構、遺物が確認されることを視野に入れて調査を実施した。

調査の経過

工事で遺構面が損壊を受ける部分に計6つのトレンチを設定して調査を実施した。調査面積は、1トレンチ2.5m²、2トレンチ3.3m²、3トレンチ2.1m²、4トレンチ0.9m²、5トレンチ1.5m²、6トレンチ1.7m²で、総面積は12m²である。

調査区内の現状のレベルは、T.P.25.45～25.55m程度で、4トレンチと5トレンチのあたりが若干高くなっているようである。

1～3トレンチでは、現代の盛土（第1層）を除去すると旧耕土（第2層）があり、その下に暗黄灰色細砂（第3層）が堆積している。1トレンチでは第3層の下で地山である暗黄褐色砂礫（A層）が認められる。地山レベルは、T.P.24.95mである。2・3トレンチは地山は未確認である。

4・6トレンチでは、第2層の下、暗灰色細砂（第4層）の堆積があり、その下でA層が認められる。地山レベルは、T.P.24.95～25.1m程度である。なお、4トレンチの西半分では第2層が存在せずに、第1層の下に第4層が認められる。



図61 トレンチ位置図 (S=1:500)

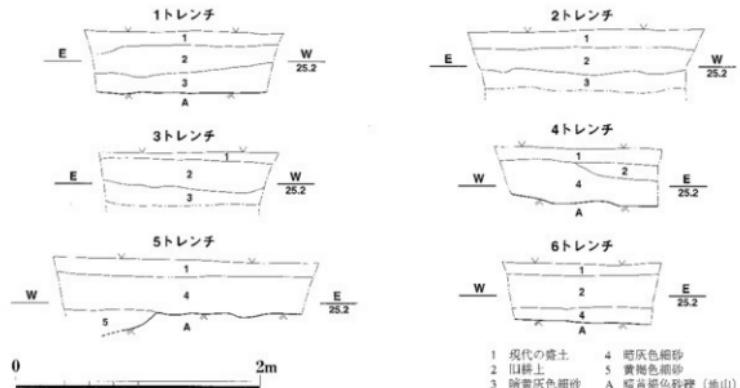


図 62 各トレーニング断面図

5 トレーニチでは、第1層の下が第4層となっており、その下にA層が認められる。地山レベルは、T.P.25.1 mである。

5 トレーニチの地山上で掘り込み (SX01) を検出した。埋土からは円筒埴輪、形象埴輪が出土している。包含層中のものとしては、2・3 トレーニチの第3層中から出土した古代の土師器や円筒埴輪がある。また、確認調査時に3 トレーニチ付近に設けたトレーニチ（確認調査西側トレーニチ）からも土師器、黒色土器 A類が出土している。

調査の成果

SX01 5 トレーニチ西半分で検出した掘り込み。大部分がトレーニチ外に出るため、平面形態はわからない。東側の上端ラインは湾曲しているが、ほぼ南北方向に走るようである。埋土は、黄褐色細砂である。円筒埴輪、形象埴輪がまとめて重なるような状態で出土している。これらは 5

世紀中ごろの所産である。この掘り込みの埋没の上限も同時期に求められる。

この掘り込みの性格等は不明である。西隣の HJ04-6 区で見つかった土師の里 12 号墳に関係する施設の一部とも考えられるが、別の性格を持ったものの

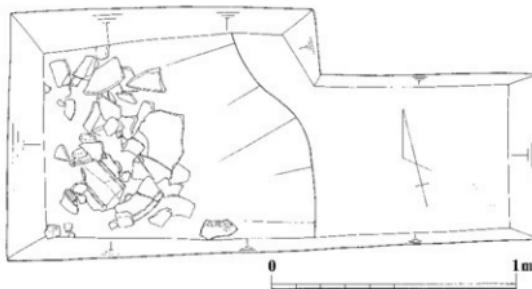


図 63 5 トレーニチ SX01 遺物出土状況平面図

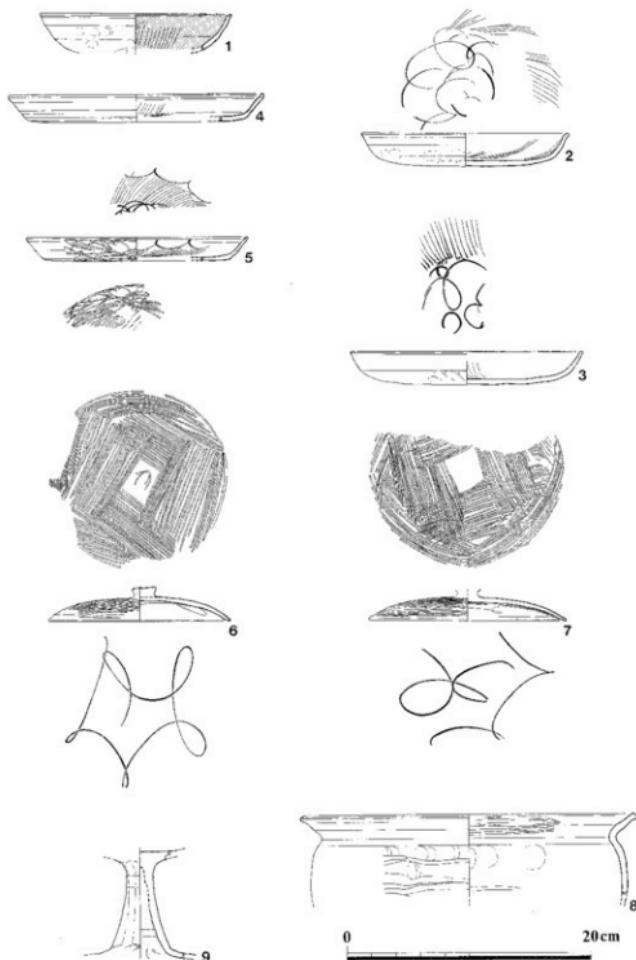


図64 各トレンチ出土土師器、黒色土器実測図
(1~4・6:確認調査西側トレンチ、9:2トレンチ、5・7・8:3トレンチ)

可能性もある。今後の周辺の調査成果も含めた検討を要する。

また、先にも述べたように、造構にはともなわないが、2・3トレンチの第3層中からは古代の土師器や円筒埴輪が出土している。これらは、HJ04-6区の古代の土器瀧りとの関連が想定できるものである。確認調査西側トレンチで出土した古代の土師器、黒色土器A類についても同様の関連が考えられる。

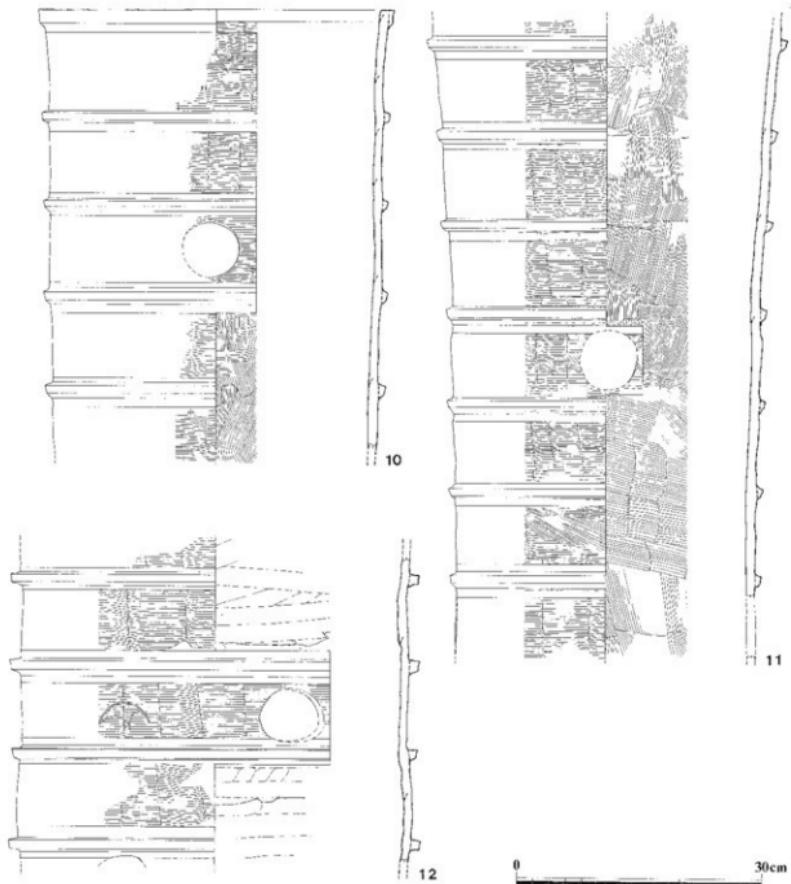


図65 5トレンチ SX01出土円筒埴輪実測図

SX01出土の埴輪について

SX01からは、円筒埴輪と形象埴輪が出土している。円筒埴輪は少なくとも4個体分あると思われる。口縁部の残存しているもので、直徑は39.5cm(13)と43.2cm(10)である。11から、タガは少なくとも7条はあることがわかる。外面は、いずれも静止痕のある横方向のハケ目が施されている。内面は、ハケ目の施されるもの(10・11・13)と、ナデにより仕上げられるもの(12)がある。また、10・12には、外面に線刻が施されている。

形象埴輪は、17と18である。17は蓋形埴輪の笠の部分である。18は家形埴輪の一部の可能性が考えられる。

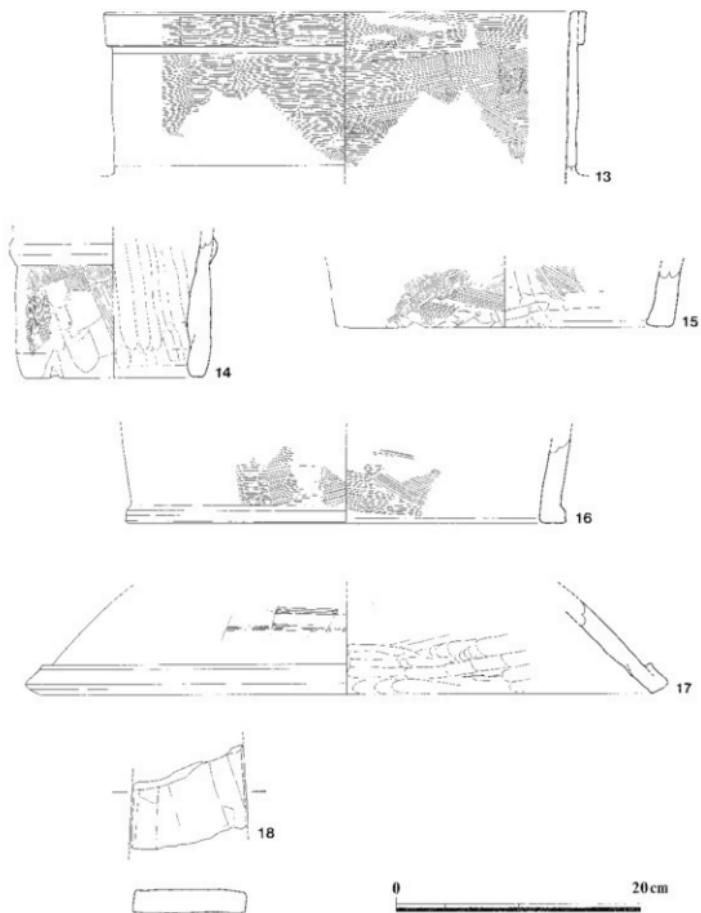


図66 5トレンチSX01出土円筒埴輪、形象埴輪、2トレンチ出土円筒埴輪実測図
(13・17・18:5トレンチSX01、15・16:2トレンチ)

小結

今回の調査でも、これまでの調査成果と同様、古墳時代の遺構を確認した。また、今回は遺構は検出できなかったが、古代にこの地域がどのような土地利用をされていたかについても、周辺の調査成果も含めて検討する必要があろう。

(新聞)

図 版



FJ04-11区
トレンチ全景（北より）



同上（南より）



SK03 遺物出土状況
(東より)

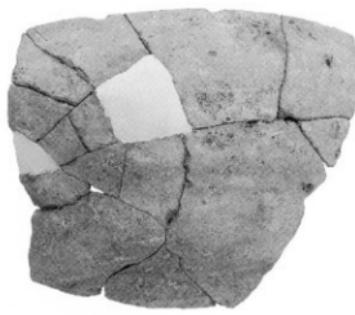
圖版二
葛井寺遺跡



5



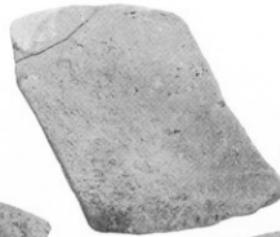
7



6



1



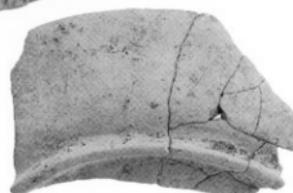
2



8



3



4

FJ04-11区 SK03出土土器



EJ05-1区 トレンチ全景（南より）



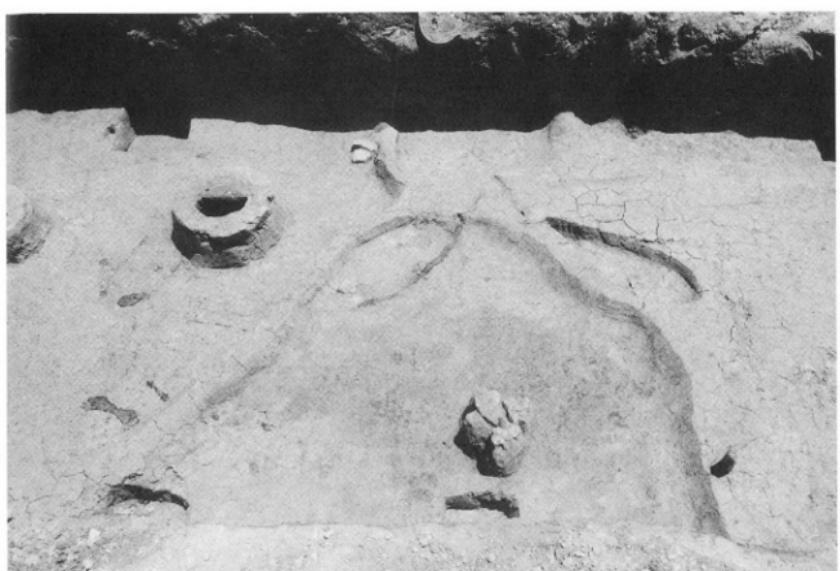
同上（北より）



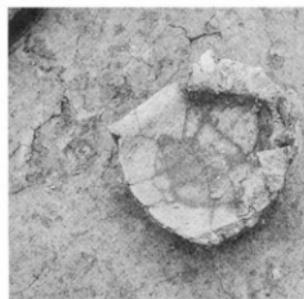
FJ05-2区 トレンチ全景（南より）



同上（北より）



FJ05-2区 SX03（西より）



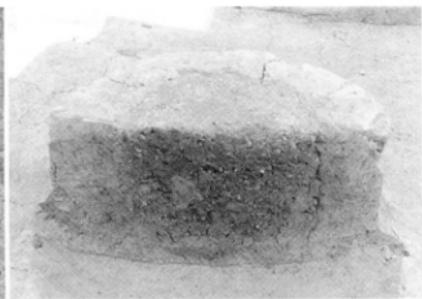
SX01 遺物出土状況（西より）



SX07 遺物出土状況1（北より）



SX07 遺物出土状況2（南より）



P1 堀土の状況（西より）



1



2



3 FJ05-2区 出土土師器



HM06-2区
トレンチ全景（北より）



同上（南より）



同上（西より）

図版八
はざみ山遺跡



HM06-11区
トレンチ全景
(南より)



同上
(北より)



SK01 出土須恵器



HJ97-10区 造出し全景（西より）



造出し円筒埴輪列出土状況（北より）



HJ97-10区 造出し埴輪・葺石転落状況（北より）



（西より）



調査区北側葺石転落状況（南より）

図版一一
土師の里遺跡 狼塚古墳



HJ97-10区 くびれ部形象埴輪出土状況（北より）



（西より）

図版一二 土師の里遺跡
狼塚古墳

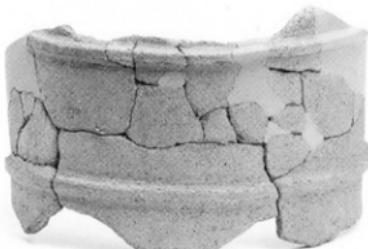


HJ97-10区 くびれ部形象埴輪出土状況（南東より）



(南より)

図版一三 土師の里遺跡 狼塚古墳





7



8



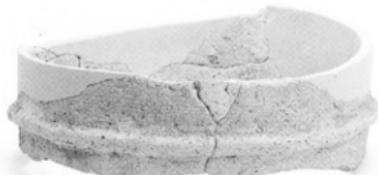
10



9



11



12



13

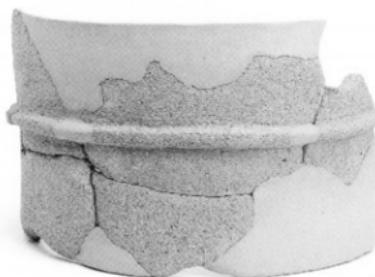
図版一五
土師の里遺跡
狼塚古墳



14



15



16



17



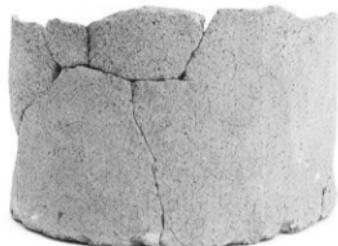
18



19



20



21

HJ97-10区 造出し円筒埴輪列B・C・D出土埴輪



22



23



25



26



27



28



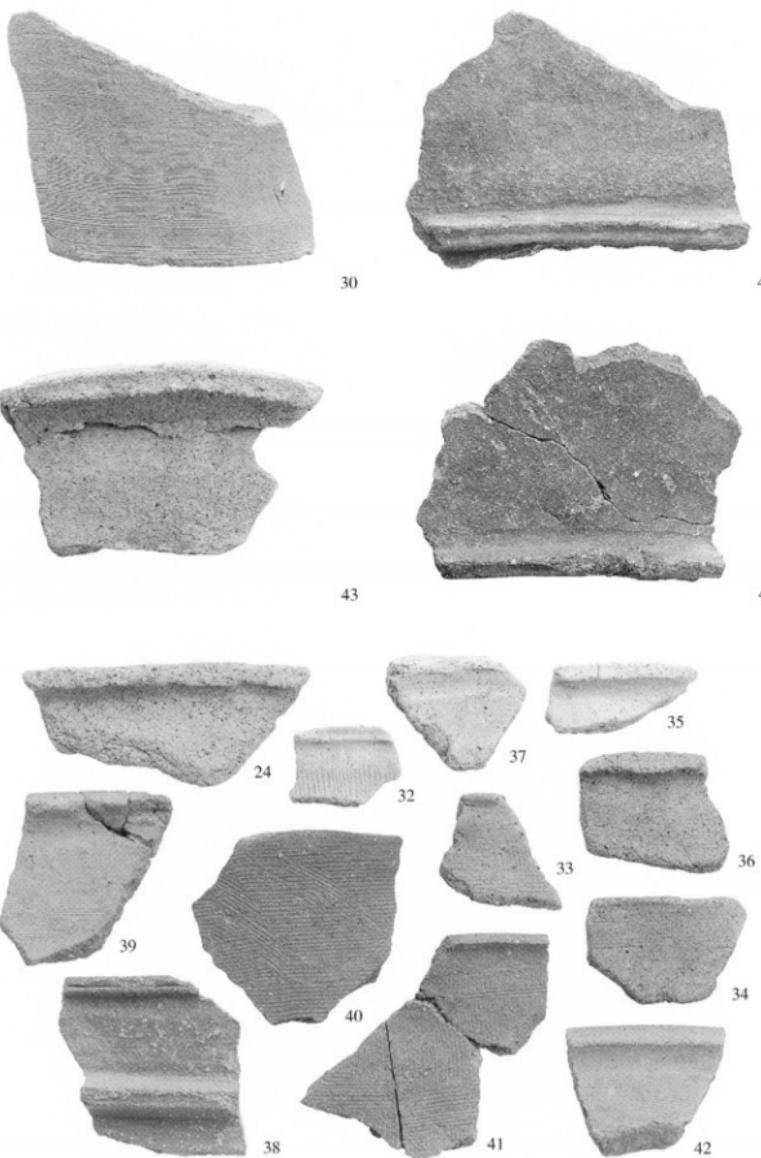
29



31

HJ97-10区 造出し円筒埴輪列E、他出土埴輪

図版一七 土師の里遺跡 狼塚古墳



HJ97-10区 造出し、他出土円筒・朝顔形埴輪

図版一八
土師の里遺跡

狼塚古墳



46



47



48



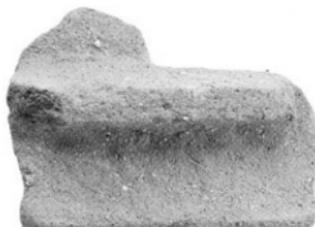
49



50



51



52



54

図版一九 土師の里遺跡 狼塚古墳



53



56



55



57



58



59



61



60



62



63



65



64



67



66



68



112

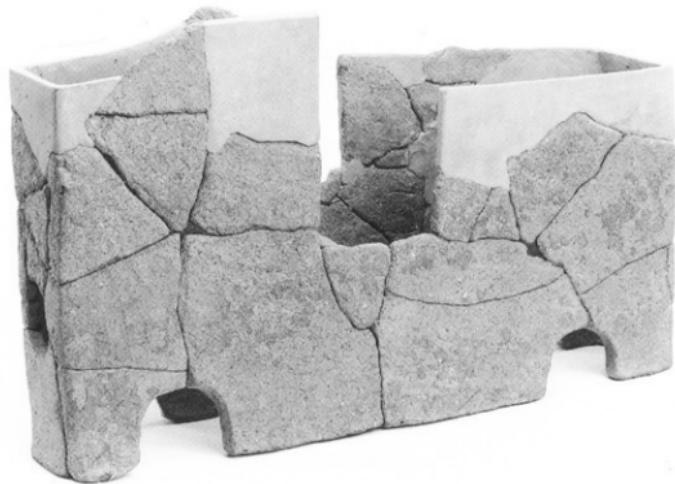


113

H97-10区 造出し、くびれ部周辺出土形象埴輪



69



HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪 A



70



HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪B

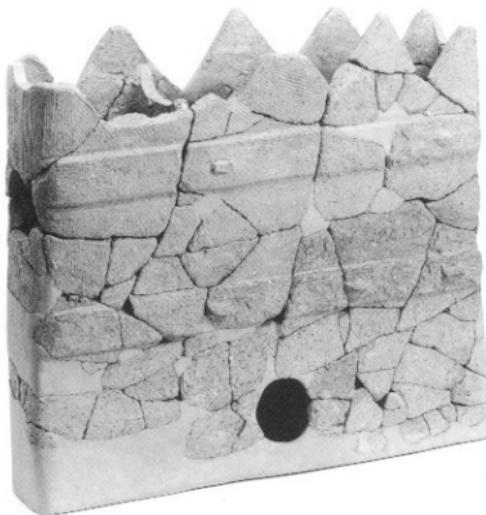
図版二三一 土師の里遺跡 狼塚古墳



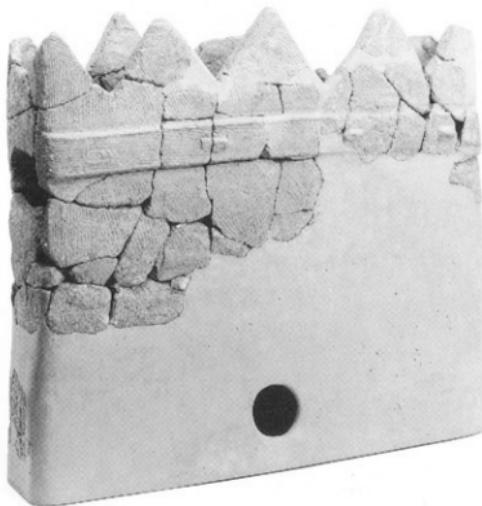
71



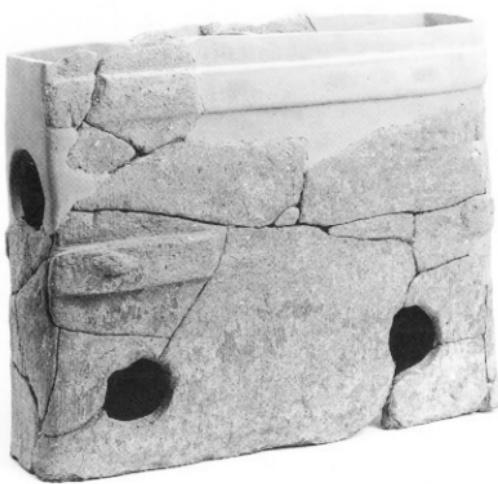
HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪C



72



HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪D



73



HJ97-10区　くびれ部出土横形埴輪E

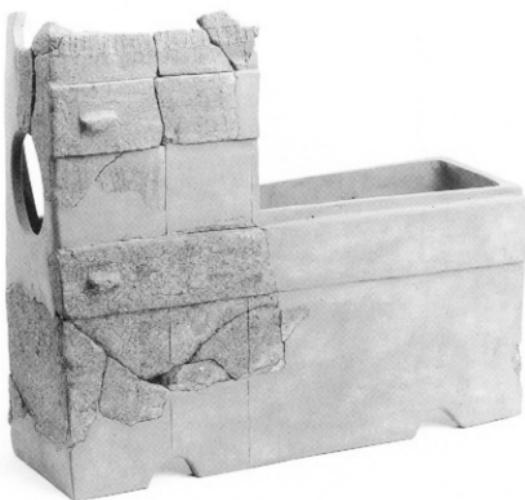


74



HJ97-10区 くびれ部出土粗形埴輪F

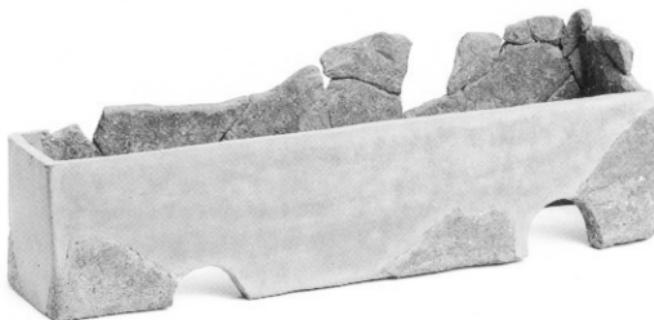
図版二七 土師の里遺跡 狼塚古墳



75



HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪G



76



HJ97-10区 くびれ部出土横形埴輪 H

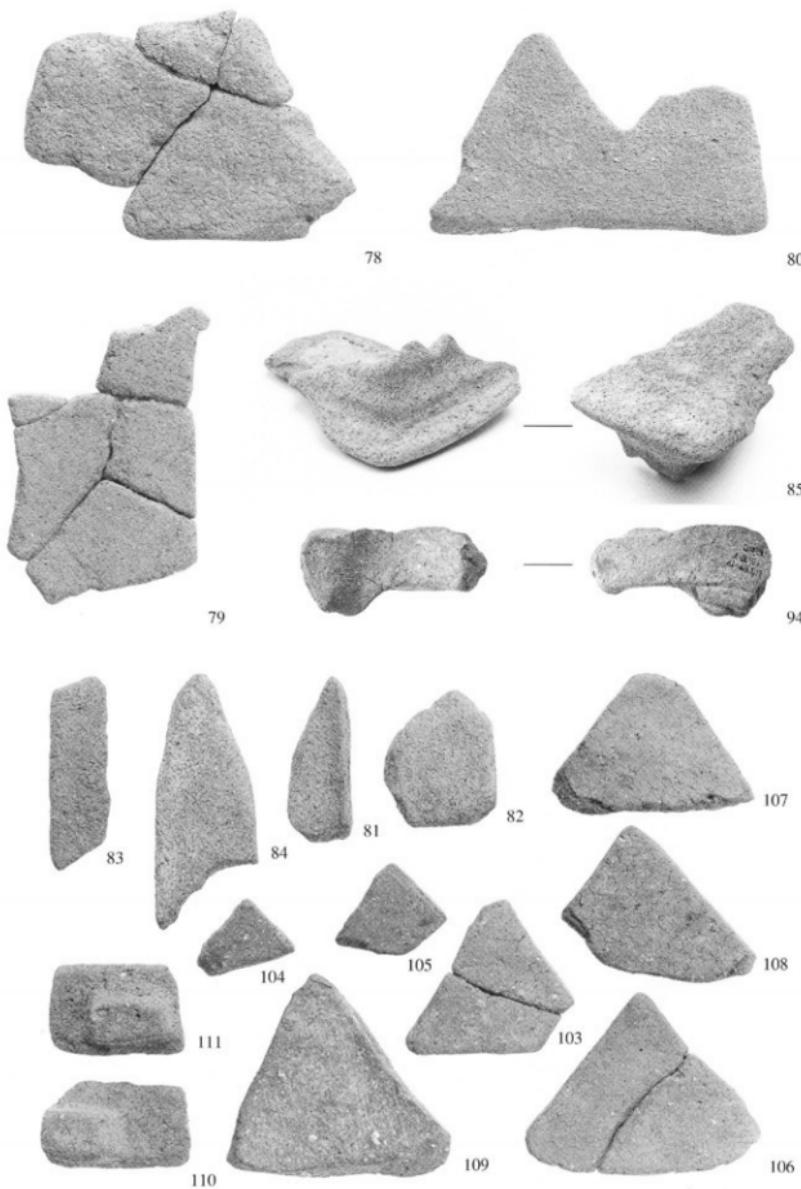


77

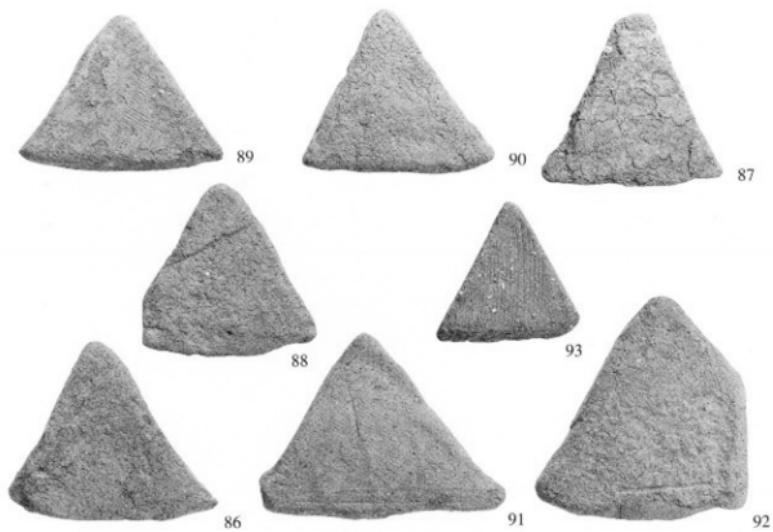
HJ97-10区 くびれ部出土楕形土製品



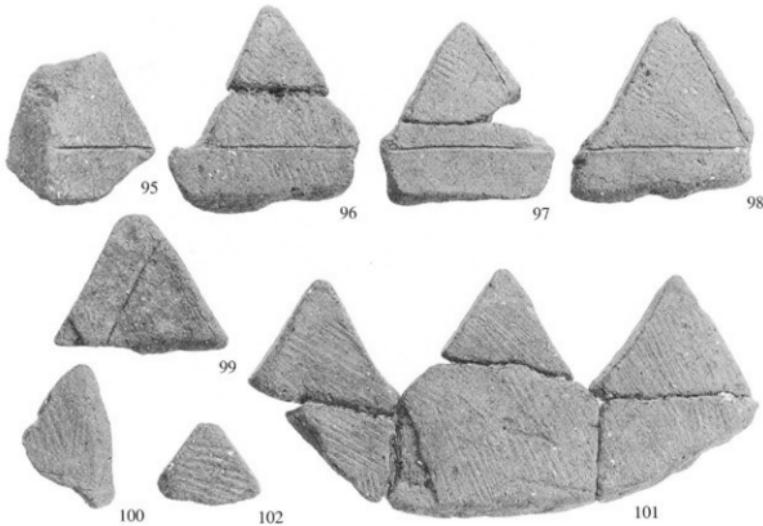
野中宮山古墳出土楕形土製品



HJ97-10区 くびれ部周辺出土形象埴輪(1)



HJ97-10区 くびれ部周辺出土形象埴輪(2)



同上

図版三
一
土師の里遺跡



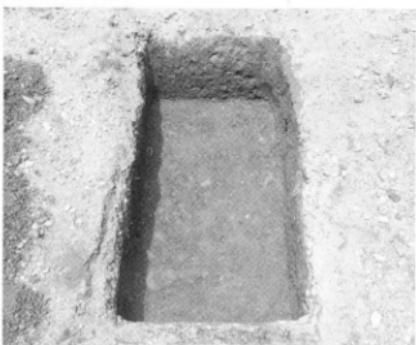
HJ06-3区 1トレンチ全景（西より）



2トレンチ全景（西より）



3トレンチ全景（東より）



4トレンチ全景（東より）



6トレンチ全景（南より）



HJ06-3区 5トレンチ
SX01 遺物出土状況
(東より)



同上 (南より)

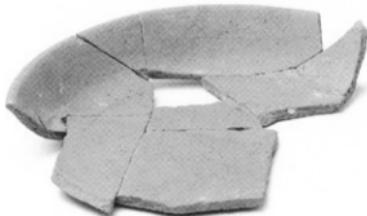


同上 (北より)



7

6



2

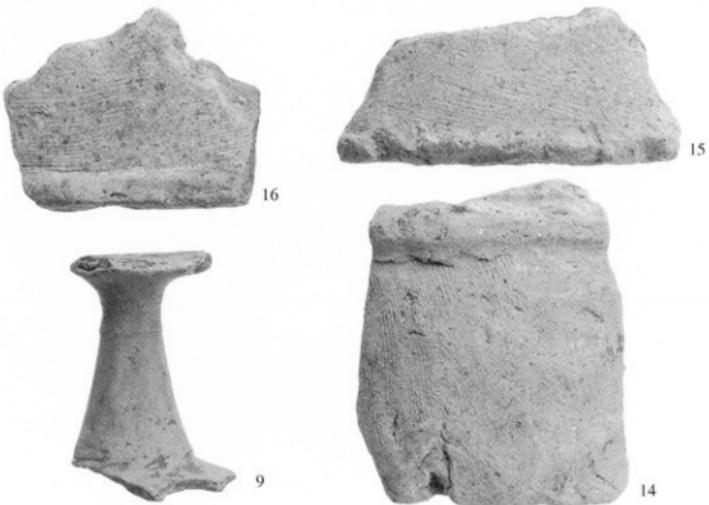


HJ06-3区 各トレンチ出土土師器

図版三五
土師の里遺跡



HJ06-3区 各トレンチ出土土器



2 トレンチ出土遺物



10



10



12

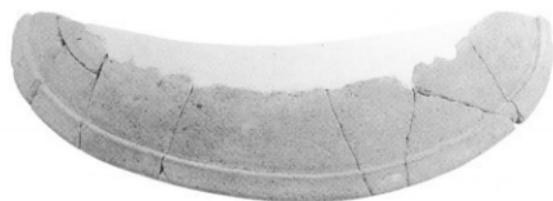


11

HJ06-3区 5トレンチ SX01出土円筒埴輪



13



17



18

HJ06-3区 5トレンチ SX01出土円筒埴輪、形象埴輪

報告書抄録

ふりがな	いしかわりゅういきせきぐんはつくちょうさはうこにじゅうに
書名	石川流域遺跡群発掘調査報告書III
著者名	
卷次	
シリーズ名	藤井寺市文化財報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	上田聰、川村和子、新開義夫
編集機関	藤井寺市教育委員会
所在地	〒583-8583 大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号 TEL.072-939-1111 (代)
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
葛井寺遺跡	大阪府 藤井寺市 西岡	27226	84	34° 34' 10"	135° 35' 90"	2005年10月1日～ 2006年9月30日 但し、 それ以前 の既調査 分を一部 含む	40	個人住宅建 設工事及び その他の開 発工事
はざみ山遺跡	大阪府 藤ヶ丘		51	34° 33' 45"	135° 36' 30"		25	
土師の原遺跡	大阪府 道明寺		20	34° 33' 46"	135° 35' 45"		87	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛井寺遺跡	集落跡	古代	溝、土壤、柱穴、掘り込み	土師器	
はざみ山遺跡	集落跡	古代	溝、掘り込み	土師器、須恵器	
土師の原遺跡	古墳	古墳	古墳 掘り込み	円筒埴輪、形象埴輪 円筒埴輪、形象埴輪	新規発見 〔猿塚古墳〕
	集落跡	古代	-	土師器	

石川流域遺跡群発掘調査報告XXII
藤井寺市文化財報告第27集

発行日 2007年3月31日

編集・発行 藤井寺市教育委員会事務局

大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号

TEL (072) 939-1111㈹

印 刷 株式会社中島弘文堂印刷所

大阪府東成区深江南2丁目6番8号

